

040548-000-5

a341-21

最近予算決算論

工藤 重義/著

M40.1

BDE-0170



341
21

法學博士 松崎藏之助校閱
法學士 工藤重義 著

最近豫算決算論

東京

有斐閣
同文館

055

391
21



27683

序

豫算決算ハ、小ニシテハ、以テ一身一家ヲ齊ヘ。大ニシテハ、以テ天下國家ヲ經綸スルノ要具タリ。從テ、國民必須ノ智識ナルコト固ヨリ論ヲ俟タズ。

然ルニ、我國ニ於テ、現今斯學ノ研究ハ、未ダ微々タル状態ニ在リ。普通ノ財政學ノ著書ニ於テモ、豫算決算ニ對スル部分ハ、極メテ簡約ヲ主トスルカ如シ。

今ヤ、我國ハ、前古無比ノ大戦ヲ經、戦時ノ豫算ハ、無慮十億ヲ超ヘ、戦後ノ經營トシテ、財政上論議施設スベキモノ尠カラズ。此時ニ際シ、國民タルモノハ、須ラク國家ノ財政ニ留意シ、其ノ如何ニ豫算決算上ニ表現セラル、ヤヲ知ラサルベカラズ。若シ、本書ニシテ、其ノ参考書トナリ教科書トナリテ、其ノ目的ノ萬

序文

一ヲ裨補スルユトヲ得バ幸ナリ。

明治三十九年九月

著者識ス

凡例

- 一、豫算決算論ハ、其重要ナルニ關セス、學者ノ研究セシモノ少ク、從テ其著書ノ如キ、極メテ寥寥タリ。本書ハ、聊カ此陷缺ヲ補ハンカ爲ニ成レリ。
- 一、本書ハ、豫算決算ニ關スル一切ノ事項ヲ網羅シタリ。蓋シ豫算決算ハ、或ハ財政學ノ一部トシテ論シ、或ハ國法學ノ一部トシテ論スルヲ常トス。本書ニ於テハ、主トシテ財政學ノ一部トシテ論述スルト同時ニ、國法學上ノ研究ニ付テモ、遺漏ナキヲ期セリ。
- 一、本書ハ、理論學說ノ論究ヲ爲スト同時ニ、外國ノ制度並ニ本邦ノ制度、慣習等實際上ノ運用ノ事項ニ意ヲ致セリ。此レ他ナシ、豫算決算論ノ如キハ、其性質上方ニ偏スルトキハ全ク其用ヲナサ、レハナリ。
- 一、本書ハ、又努メテ豫算決算ニ關シテ、世上ノ疑問トナレル點及ヒ改良ス可キ點ヲ列舉シ、以テ斯學最近ノ進歩ニ貢獻センコトヲ期セリ。
- 一、本書ノ參考書ハ、英獨佛ノ財政學及國法學ノ著書ニ據ル所多ク、傍本邦ノ官廳

凡例

公文書、及學者ノ著書ヲモ參酌セリ。

一、本書ヲ稿了スルヤ、松崎博士ニ校閲ヲ乞フ。博士ハ、我邦財政學ノ泰斗ニシテ、著者ノ在學中師事セシ所ナリ。博士速ニ之ヲ諾サレ、爾後月ヲ閱スルコト三、一々原稿紙ノ欄外ニ批點ヲ附シテ返送セラル。著者ハ、之ニ由テ、改訂増補セシ所頗ル多シ。茲ニ、謹テ、其厚意ヲ感謝ス。

最近
豫算決算論目次

第一編 豫算總論……………一

第一章 豫算史……………一

 第一節 概論……………一

 第二節 西洋ノ豫算史……………六

 第三節 日本ノ豫算史……………一〇

第二章 豫算論ノ範圍及分科……………一二

 第一節 範圍及分科……………一二

 第二節 法規ノ種類……………一五

第三章 豫算ノ性質……………一七

 第一節 豫算ノ必要……………一七

 第二節 豫算ノ辭義……………一九

第三節	豫算ノ意義	二一
第四節	豫算ト法令トノ關係	二四
第二編	豫算前論	二六
第一部	豫算準備論	二六
第一章	準備ノ機關	二六
第一節	諸國ノ制度	二六
第二節	大藏省論	三二
第二章	豫算ノ年度	三八
第一節	會計年度	三八
第二節	會計年度ノ開始	四四
第三章	準備ノ時期	五〇
第一節	諸國ノ制度	五〇
第二節	準備時期ニ關スル注意	五二

第四章	準備ノ方法	五三
第一節	準備ノ方法	五四
第二節	豫算ノ普遍	五六
第三節	豫算算法(其一)	五八
第四節	豫算算法(其二)	六二
第二部	豫算形式論	七一
第一章	總論	七一
第一節	豫算形式ノ原則	七一
第二節	豫算ノ制度	七四
第二章	本邦豫算ノ形式	七八
第一節	總豫算	七八
第二節	特別會計	八〇
第三節	追加豫算	八五

第四節 繼續費……………八八

第五節 豫備費……………九三

第三章 豫算ノ分科……………九五

第一節 總論……………九五

第二節 立法費目……………九七

第三節 豫算分科ニ關スル注意……………一〇〇

第一款 分科ノ大小……………一〇〇

第二款 分科ノ固定……………一〇一

第三款 歲入歲出ノ順序……………一〇二

第三編 豫算本論……………一一一

第一部 豫算提出論……………一一一

第一章 提出ノ時期……………一一一

第一節 毎年ノ提出……………一一一

第二節 年度開始前ノ提出……………一一六

第二章 提出ノ物體……………一二一

第一節 提出ノ物體……………一二一

第二節 追加豫算濫出ノ弊……………一二一

第三章 提出ノ方法……………一二三

第一節 提出ノ手續……………一二七

第二節 豫算ノ說明……………一二七

第一款 概論……………一二九

第二款 口頭說明……………一三〇

第三款 文書說明……………一三三

第二部 豫算協賛論……………一五〇

第一章 協賛ノ機關……………一五〇

第一節 機關ノ組織……………一五〇

第二節	下院ノ先議權	一五六
第三節	上院ノ修正權	一六二
第二章	協賛權ノ範圍	一六九
第一節	諸國ノ制度	一六九
第二節	本邦ノ制度	一七四
第一款	一般財政ニ關スル協賛權ノ範圍	一七四
第二款	豫算協賛權ノ範圍	一七八
第三款	事後ノ承諾	一八〇
第三章	憲法第六十七條ヲ論ズ	一八五
第一節	立法ノ理由	一八五
第二節	條文ノ内容	一八七
第三節	同意ノ請求	一九三
第四章	協賛ノ手續	一九八

第一節	諸國ノ制度	一九八
第二節	我國ノ制度	二〇三
第五章	豫算ノ不成立	二〇七
第一節	豫算不成立ノ原因	二〇七
第二節	豫算不成立ノ結果	二一一
第六章	豫算協賛ニ關スル注意	二一五
第一節	議員ノ心得	二一五
第二節	制度ノ得失	二一七
第三部	豫算裁可論	二二二
第一章	豫算ノ裁可	二二二
第二章	豫算ノ公布	二二二
第四編	豫算後論	三三八
第一部	豫算施行論	三三一

第一章 國庫	二三一
第一節 國庫ノ組織	二三一
第二節 我國ノ金庫制度	二三四
第二章 豫算施行ノ時期	二三九
第一節 會計年度所屬	二三九
第二節 出納整理期間	二四二
第三節 時效	二四五
第三章 豫算施行ノ手續	二四七
第一節 收入事務	二四七
第二節 支出事務	二五〇
第三節 豫備金ノ支出	二五六
第四節 收支殘額ノ整理	二六一
第五節 豫算施行ニ關スル注意	二六六

第四章 出納官吏及諸文書	二六八
第一節 出納官吏	二六八
第二節 會計文書	二七一
第二部 監督制度論	二七二
第一章 概論	二七二
第一節 監督ノ機關	二七二
第二節 監督ノ時期	二七四
第二章 行政監督	二七六
第五編 決算論	二八〇
第一部 決算總論	二八〇
第一章 決算史	二八〇
第一節 西洋ノ決算史	二八〇
第二節 日本ノ決算史	二八三

第二章 決算ノ意義……………二八八

 第一節 決算ノ意義……………二八八

 第二節 豫算ト決算トノ關係……………二九〇

第二部 決算ノ調製及審査……………二九三

 第一章 決算ノ調製……………二九三

 第二章 司法監督……………二九八

 第一節 會計検査院ノ組織……………二九八

 第二節 會計検査院ノ權限……………三〇二

 第三節 責任解除及辨償處分……………三〇六

 第三章 立法監督……………三〇八

 第四章 決算ニ關スル注意……………三一

 第一節 決算調製ノ期日……………三一

 第二節 會計検査院ノ監督……………三一三

附 錄

第三節 司法監督ト立法監督トノ關係……………三一五

豫算膨脹ノ趨勢ヲ論ス……………三一九

 第一節 諸國ノ狀態ヲ叙ス……………三一九

 第二節 豫算膨脹ノ原因……………三二六

最近 豫算決算論目次 終



最近豫算決算論

法學博士 松崎藏之助 閱
法學士 工藤重義 著

第一編 豫算總論

第一章 豫算史

第一節 概論

第一〇緒論

今茲ニ我邦ノ豫算決算ノ理論及實際上ノ運用ニ付テ論述セントスルニ當リ、順序トシテ豫算ノ沿革ヲ述ヘントス。而シテ、本節ニ於テハ先世界各國ニ共通セル

豫算總論 豫算史 概論

變遷ニ付聊カ概括的説明ヲ試ミントス。

現今ノ發達セル國法學上、財政學上ノ意味ヨリ言ヘハ、豫算並ニ決算ナル語ハ、嘗ニ文字夫自身カ表明セル所ノ意味ヲ有スルニ止マラス、特殊的ノ意味ヲ包含ス、即チ、豫算、決算トハ、立憲的豫算制度又ハ決算制度ヲ意味ス、然レトモ、遠ク豫算決算ノ起源ニ溯リ、立憲制創始時代以前ニ付テモ論究スル所アラントセハ、勢豫算決算ナル語ハ、今日ノ正確ナル意味ニ用ユルコト能ハス、故ニ茲ニ言フ所ハ豫定、計算、若クハ勘定、計算ノ意義ニ解釋シテ看ルヘシ。

○貨幣
經濟時代
ナルコト

豫算決算ハ、人民カ一體トシテ國家ヲ形成シ、人智既ニ進ミテ秩序的思想ヲ有セシ時代以後ニ、發生セシモノナリ、人民ノ生活カ未タ自然經濟ノ境遇ヲ離レズ、所謂「手ヨリ口」(Von der Hand zu den Mund)ノ生活ヲ以テ満足セル時代ニハ、此制度ハ存在スルコト能ハス、少クトモ、貨幣ヲ以テ交換ハ媒介トセル貨幣經濟ノ時代以後ニアラサル可ラス。

○收入
確定
ナルコト

凡ソ、一國財政ノ根本トシテハ、必ラス一定ノ收入ヲ要ス、收入アリテ、茲ニ始テ支

○財政
大規模
ナルコト

出ヲナスコトヲ得ヘシ、現今財政學ノ原則トシテハ、出ルヲ測リテ入ルヲ定メサル可ラサルモ、實際上ノ關係ハ收入ヲ以テ第一位トス、然リ而シテ、此收入ハ國家カ未開ノ時代ヲ距ルニ從ヒ、漸次確定の性質ヲ帶フルニ至ル、即チ一定時期ノ間ニ一定ノ收入ヲ見ルニ至ル、此ノ一定ノ收入ノ主ナルモノヲ租稅トス、一國豫算決算ノ思想ハ乃チ此一定ノ收入アリテ、後始メテ起リ得ヘキモノトス。

前述ノ如ク、既ニ貨幣ノ流通ヲ見、租稅ノ收納アルモ、豫算決算制度ノ發生ニハ、尙一ノ條件ヲ要ス、即チ一國財政カ大規模ニ赴クコト、是レナリ、若シ一國ノ人口極メテ稀薄ニシテ、財政ノ規模從テ狭小ナルニ當テヤ、其君主ハ未タ計算ノ必要ヲ見サルナリ、二三臣下ノ施爲ニ任スモ、其不可ナル所ヲ見ス、然ルニ、社會進步シテ人口漸ク増加シ、國家トシテ施スヘキ事務從テ多ク、財政ノ規模之ニ伴フテ膨脹スルニ至レハ、其腐敗ト紊亂ヲ防クノ方便トシテ、茲ニ豫算決算ノ制度ヲ案出スルニ至ルハ、事理ノ自然ナリト云フヘシ。

第三、豫算決算制度發生ノ順序

豫算決算制度發生ノ要件ハ、既ニ述フル如シトシテ、次ニ考フヘキハ、兩者何レカ

先ニ發達セルヤニアリ。今日財政上ノ運用トシテハ、毎歲豫算先ニ成立シテ後之ヲ施行シ、始メテ決算ヲナスコトヲ得ヘシ。然レトモ、之ヲ古來ノ沿革ニ徴スレハ却テ決算制度先發達シテ豫算制度ノ後ニ生スルヲ見ル。

惟フニ、人智ノ發達ハ、先ツ現在過去ノ事實ニ存シテ、將來ノ觀念之ニ次ク、一國ノ事業又同シ。社會未タ幼稚ノ境遇ヲ離レズ、國家ノ事務簡易ナルニ當テヤ、只管現在ノ事業ヲ爲スヲ以テ満足シ未來ノ計劃ノ如キハ、豫想セス又豫想スルノ要ナキナリ。是ヲ以テ、財政上ニ於テモ其整理策トシテ、第一ニ按出セラル、ハ過去現在ノ計算ヲ完結スル決算ニシテ、將來ノ計劃ヲ考慮スル豫算ハ之ニ次カサルヲ得ス。世界各國ノ財政史ヲ見ルモ、亦皆之ヲ證明ス。

總額豫算

豫算發生ノ初期ニ於テハ、其豫算ハ一般ニ總額豫算ナリ。即チ大體ノ計數ヲ來ス、ハ、ミ、ニ、シ、テ、之ヲ分類シテ其收入支途ヲ明カニスルコトナシ。歐洲ニ於テモ總額豫算ヲ全然脱却シテ區分豫算ヲ編成スルニ至リシハ、第十七世紀ノ頃ナリト云フ。

不定期豫算

又豫算ハ其初ニ當リテヤ、其時期ハ、一定セルモノナシ。人事ノ簡易ナルニ伴フテ、豫算モ毎歲大ナル變動ヲ見ス。從テ數年間同一ノ豫算ヲ以テ施行シ、或ハ三歲ニシテ改メ、五歲ニシテ改ムル等、一定ノ規律ナキハ自然ノ勢ナリ。彼佛國ノネッケル(Neckel)氏カ佛國政府ノ收入支出ハ一定シテ動カス、故ニ收支ノ如キハ既往今來ノ別ナク常ニ相同シク、更ニ異事ノ起ルニアラサレハ、之ヲ變動スルコトナカルヘシト言ヘルカ如キハ、此觀念ニ出ツ。又現今獨逸ノ小國中、三年五年ノ豫算制度ヲ有スルモノアルハ、此遺物ナリト云フヘシ。然ルニ、此不定期豫算カ進歩シテ今日ノ如ク定期豫算殊ニ毎年豫算トナリシハ、吾人ノ見ル所ノ如シ。

第五、秘密豫算

往古ノ豫算カ秘密的ナリシモ、亦其一特色ナリ。即チ專制政府ノ下ニ於テ人民ノ勢力微弱ナルヤ、政府ハ豫算ヲ以テ二三首腦者ノ施行ノ資料トナス迄ニテ、之ヲ公表セサリキ。彼リシエリョー(佛國ノ宰相)カ「財政ノ事ハ、政府ノ精神ナルヲ以テ、人民ヲシテ知ラシム可ラス」ト云シハ、其一例ナリ。然ルニ其後人民ノ勢力増加スルヤ、王侯宰相ニシテ之ヲ公表シ以テ名譽聲望ヲ博セントシ、漸次之ヲ公表スルニ至

先ニ發達セルヤニアリ。今日財政上ノ運用トシテハ、毎歲豫算先ニ成立シテ後之ヲ施行シ、始メテ決算ヲナスコトヲ得ヘシ。然レトモ、之ヲ古來ノ沿革ニ徴スレハ却テ決算制度先發達シテ豫算制度ハ後ニ生スルヲ見ル。

惟フニ、人智ノ發達ハ、先ツ現在過去ノ事實ニ存シテ、將來ノ觀念之ニ次ク、一國ノ事業又同シ、社會未タ幼稚ノ境遇ヲ離レス、國家ノ事務簡易ナルニ當テヤ、只管現在ノ事業ヲ爲スヲ以テ満足シ未來ノ計劃ノ如キハ、豫想セス又豫想スルノ要ナキナリ。是ヲ以テ、財政上ニ於テモ其整理策トシテ、第一ニ按出セラル、ハ過去現在ノ計算ヲ完結スル決算ニシテ、將來ノ計劃ヲ考慮スル豫算ハ之ニ次カサルヲ得ス。世界各國ノ財政史ヲ見ルモ、亦皆之ヲ證明ス。

總額豫算

豫算發生ノ初期ニ於テハ、其豫算ハ一般ニ總額豫算ナリ即チ大體ハ、計數ヲ來ス、ハ、ミ、ニシテ、之ヲ分類シテ其收入支途ヲ明カニスルコトナシ。歐洲ニ於テモ總額豫算ヲ全然脱却シテ區分豫算ヲ編成スルニ至リシハ、第十七世紀ノ頃ナリト云フ。

不定期豫算

又豫算ハ其初ニ當リテヤ、其時期ハ一定セルモノナシ。人事ノ簡易ナルニ伴フテ、豫算モ毎歲大ナル變動ヲ見ス。從テ數年間同一ノ豫算ヲ以テ施行シ、或ハ三歳ニシテ改メ、五歳ニシテ改ムル等、一定ノ規律ナキハ自然ノ勢ナリ。彼佛國ノネッケル(Necker)氏カ佛國政府ノ收入支出ハ一定シテ動カス、故ニ收支ノ如キハ既往今來ノ別ナク常ニ相同シク、更ニ異事ノ起ルニアラサレハ、之ヲ變動スルコトナカルヘシト言ヘルカ如キハ、此觀念ニ出ツ、又現今獨逸ノ小國中、三年五年ノ豫算制度ヲ有スルモノアルハ、此遺物ナリト云フヘシ。然ルニ、此不定期豫算カ進步シテ今日ノ如ク定期豫算殊ニ毎年豫算トナリシハ、吾人ノ見ル所ノ如シ。

第五、秘密豫算
往古ノ豫算カ秘密的ナリシモ、亦其一特色ナリ。即チ專制政府ノ下ニ於テ人民ノ勢力微弱ナルヤ、政府ハ豫算ヲ以テ二三首腦者ノ施行ノ資料トナス迄ニテ、之ヲ公表セサリキ。彼リシエリユー(佛國ノ宰相)カ「財政ノ事ハ、政府ノ精神ナルヲ以テ、人民ヲシテ知ラシム可ラス」ト云シハ、其一例ナリ。然ルニ其後人民ノ勢力増加スルヤ、王侯宰相ニシテ之ヲ公表シ以テ名譽聲望ヲ博セントシ、漸次之ヲ公表スルニ至

第六、議會ノ協賛

立憲政體ヲ採用シ、議會ヲ開キテ人民ニ參政ノ權利ヲ與フルハ、即チ人民ノ勢力強盛ナルニ至リシノ徵ナリ。而シテ豫算ノ如キハ、政務ノ最モ重大ナルモノニシテ、人民休戚ノ繫ル所亦大ナルカ故ニ、之ヲ議會ノ議ニ附シテ承諾ヲ得ルハ、自然ノ狀態ナリ。即チ今日歐米文明諸國謂フ所ノ豫算ナルモノハ、議會ノ協賛ヲ經ルコトヲ一ノ要素トスルニ至レリ。

第二節 西洋ノ豫算史

第一、緒論

豫算ノ概括的發達ノ順序ハ前述フル所ノ如シ。今茲ニ西洋諸國豫算ノ沿革ヲ述ルニ當リテハ專ラ立憲的豫算ニ付テ、説カントス。其以前ノ豫算制度ノ如キハ之ヲ叙フルモ、益スル所少カルヘキヲ以テナリ。

第二、民主國ノ豫算ノ起源

民主國ニ於テ、豫算ノ起源ハ、實ニ人民ノ租稅承諾權ニ基クモノトス。蓋シ往古ニ在テ、君主ノ收入トシテ一國ノ經費ニ充テシ財源ハ、王室財產其一ナリ、特權ハ其二ナリ、人民任意ノ寄附ハ其三ナリ。然ルニ、國家漸次多額ノ經費ヲ要スルニ至リ殊ニ戰爭等ノ發生スルニ於テハ、君主ハ此等ノ財源ヲ以テ支フ可ラス、人民ヨリ收納スルニ任意ノ寄附以外租稅ヲ徵收シテ之ニ當テサル可ラス。而シテ此租稅徵收ノ權ヲ得ルニハ、人民ノ公選ニヨル議會ヲ召集シテ、其必要ト支途トヲ説明セサル可ラス。而シテ此説明ヲ與フルニハ、收入ト支出トヲ對比シテ現在ノ收入カ支出ヲ滿スニ足ラサルコトヲ證明セサル可ラス。是レ、即チ豫算ノ起源ナリ。斯ノ如クニシテ、立憲的豫算ハ其萌芽ヲ發シ、其後君權衰ヘテ君主ノ財產ト國家ノ財產ト分割セラレ、國家ノ歲出ハ君主ノ財產ト全ク別離スルニ至リテモ、此豫算制度繼續シテ、今日ノ如キ發達ヲ見ルニ至レリ。

第三、君主國ノ豫算ノ起源

英、佛、獨(李)漏西ヲ除キ其他多數ノ國ニ於テハ、以上ノ發達ヲ見タルニ反シ、李漏西ニ於テハ人民ハ其根據タルヘキ租稅承諾權ヲ有セサリキ。從テ豫算ノ起源ハ、茲

ニ存セスシテ、從來、君主ノ執リ來レル、財政計劃ニ在リ、此財政計劃ハ、立憲的性質ヲ帶フルニ至リ、憲法上豫算トシテ現出スルニ至レリ。

第四、英國豫算ノ發達

千二百十五年、ジョン王治世第十七年ニ發布セラレタル大憲章ハ、國王カ人民ノ承諾ナクシテ妄リニ租稅ヲ徵收セサル誓書ナリ、其第十二條及十四條ハ、議員ノ召集ト租稅ノ承諾權トヲ明記セリ、千六百二十八年ニ發布セラレタル權利請願モ、亦同一ノ趣意ヲ以テ成リ、其第十條ニ之ヲ明記セリ、然レトモ、當時ノ議會ハ其歳入ニ對シ概括的同意ヲ表セシニ止マリ、歳入歳出ヲ對比セル豫算ハ議會ノ關與セサル所ナリキ、然ルニ、千六百八十八年以後ハ、支出ノ内譯ヲ明ニシテ之ニ配當アジロツク文句ヲ附加スルコト、ナリ、議會ノ議決ヲ經タル金額ハ、之ヲ國會ノ同意シタル目的以外ニ用フルコトヲ得サルニ至レリ、是レ即チ豫算ノ起源ニシテ、降テ十八世紀ニ及ンテハ、益其制度發達シテ以テ今日ノ完美セル豫算ヲ見ルニ至レリ、現今英國ノ歳入中、法律ヲ以テ永久的ニ徵收スルヲ得ルモノハ、之ヲ固定資本ト稱シ、議會ノ議定ヲ俟タスシテ年々支出スヘキ經費ニ充ツルモノトス。

第五、佛國豫算ノ發達

佛國ハ、第十七世紀以來專制王權全勝ノ時代ニシテ、Parliamentナル語ハ高等裁判所ヲ指ス名稱ニ變シタル程ナリシカ、千七百八十九年ニハ、千六百十四年以來會ヲ召集セラレサル議會カ開會セラレ、議會ハ、ルイ十六世ニ對シテ租稅承諾權ヲ要求シ、次テ千七百九十一年ニハ、民主的憲法發布セラレテ、租稅ノ徵收ノコト亦確定セラル、ニ至レリ、而シテ其後ナポレオン第一世カ、千八百十年ニ發布シタル憲法ヲ見ルニ、國家ノ收入支出ノ總額ハ、一箇ノ法律案トシテ議會ニ提出シ、議會ハ其全體ニツキテ概括的決定ヲナスヘキ規定アリ、是レ、佛國ニ於ケル豫算制度制定ノ時代ニ屬ス、其後千八百十七年ノ憲法ハ、之ヲ廢シテ各省豫算毎ニ議定ヲ與フルコトトナシ、一層豫算ノ基礎ヲ鞏固ナラシメ、繼續シテ今日ニ至レリ、現今ニ於テハ、佛國豫算ノ科目ハ七八百ニ上リ、議定ノ法亦昔日ノ比ニアラス、唯豫算ノ效力ヲ過度ニシテ、歳入ヲ定ムルニ一年間效力アル豫算ヲ以テシ、又豫算成立セサレハ一切ノ歳出ヲナシ能ハサルカ如キ制度ヲ採ルハ、其欠點ト云ハサルヲ得ス。

第六、李漏西豫算ノ發達

千六百八十八年、フリードリヒ第三世ノ下ニ、首相クニールハウゼンノ編製シタル豫算ハ單ニ行政内部ノ規定タルニ止マリ、今日ノ所謂立憲的ノ豫算ニアラス、千八百二十一年ノ豫算ハ公表セラレタルモ、尙議會ノ協賛ナキモノニシテ、同シク今日ノ豫算ニアラス、李漏西國ニ於テ、公然議會ノ協賛ニ由テ成立シタル豫算ハ、實ニ千八百四十八年ヲ以テ嚆矢トス、同年發布ノ憲法ハ、豫算法ハ年々議會ノ協賛ヲ經ヘキモノナルコトヲ規定セリ、曰ク、凡ソ國家ノ歳入歳出ハ、毎年之ヲ豫定シ、以テ歳計豫算ヲ調製スヘシ、歳計豫算ハ毎年法律ヲ以テ之ヲ確定ス第九十ト

第三節 日本ノ豫算史

第一、明治以前

我國ニ於テ、明治以前既ニ決算制度ノ存在セシハ、往々文献ノ徵スヘキモノアリト雖モ、豫算ニ付キテハ之ヲ知ラス、唯大寶令中、賦役令ニ凡ソ丁ヲ雇ヒ役ハン者ハ、本司預メ當年作ル所ノ色目多少ヲ數ヘテ官ニ申セトアルヲ發見スルノミ野小

梓著國憲汎論ニ據ル、以下本節ハ同書及阪谷芳那、德川氏ノ時代ニ於テモ、未タ豫算氏著日本會計法要論(五—八一)ニ據ルモノ多シ 制度ノ實施ヲ見スト云フ。

第二、明治時代(第一期)

明治維新ノ始メニ當リテモ、尙豫算ナルモノナシ、明治四年ニ至リ、前年ノ歳出入ニ據リテ後年ノ歳出入ヲ豫測セシコトアリ、然レトモ、唯大藏省ノ便宜ニ出テ、一般ノ規定トナラサリキ、次テ明治六年、參議大隈重信舉ケラレテ、大藏省事務總裁トナルヤ、太政大臣ニ建議シテ豫算ノ必要ヲ説キ、明治六年、歳入歳出見込會計表ヲ作ル、之ヲ見ルニ、歳入ノ部ニ於テハ、第一、正租、第二、印紙稅以下第七迄ヲ通常歳入トシ、其他臨時歳入アリ、通計四千八百七十三万圓、歳出ノ部ニハ、第一、國債償却、第二、貫屬家祿賞典米以下第十迄ヲ通常歳出トシ、其他臨時歳出アリ、歳出通計四千六百五十九万圓ト稱ス、是レ實ニ我邦豫算ノ始メトス、翌七年ニモ、亦豫算表ヲ作り、以後年々之ヲ調製セリ。

明治十四年、會計法ヲ發布スルヤ、豫算ニ付テ規定ヲ設ケタリ、即チ、其第一條ハ豫算ヲ以テ會計ノ基本ナリトシ、第七條ニハ、豫算ハ各官省、院、使、廳、府、縣ノ申牒ニツ

キ、大藏卿之ヲ調理統計スルコトヲ規定セリ。又明治十八年ニ及ヒテハ、歳出入豫算條規ヲ定メ、更ニ豫算ノ完美ヲ圖レリ。

第三、明治時代(第二期)

明治二十二年、帝國憲法ヲ發布スルヤ、豫算ノ制度ハ明ニ此内ニ規定セラレ、更ニ會計法、會計規則ヲ公布シテ其詳細ノ事項ヲ規定セリ。現行ノ會計法並ニ會計規則ハ即チ是ニシテ、唯爾後多少ノ修正ヲ施シタルノミ。明治二十四年度ノ歳計豫算ハ、正式ニ議會ノ協賛ヲ經テ裁可公布セラレタル最初ノ豫算ニシテ、茲ニ至リテ、我國モ立憲的豫算ヲ有スルニ至レリ。

第二章 豫算論ノ範圍及分科

第一節 範圍及分科

第一、豫算論ノ範圍

豫算論ハ、元來、財政學中ノ一科トシテ論セラレ、又國法學中財務行政ノ一部トシテ論セラル。而シテ、此兩者ハ其觀察點相異ルヲ以テ、從テ其論スヘキ範圍ニ付テ

モ相異レリ。即チ、財政學ハ所謂經濟政策學ノ一科ナルヲ以テ、其豫算ヲ論スルニモ主トシテ財政上ヨリ觀テ、其利害得失ヲ斷セントスルニ在リ。然ルニ、國法學ニ於テハ、專ラ法理若クハ成法ノ上ヨリ豫算ヲ觀察スルニアルカ故ニ、其論スル所ハ豫算ノ性質、效力若クハ成文上ハ解釋ニ在リトス。

例之豫算提出ニ付テ云ハンニ、毎年豫算ヲ議會ニ提出スルハ如何ナル利益アルカ、其提出カ年度開始前ニ近キヲ要スルハ、財政上如何ナル理由ニ基クカハ、即チ財政學トシテ論スヘキ所ニシテ、之ヲ憲法上ノ規定ニ照シ、議會提出ノ時期カ前年中ニアルヲ要スルカ、前年度中ナレハ可ナリヤノ問題ヲ決スルハ、國法學ノ掌ル所ナリ。

以上ノ如ク、豫算論ハ觀察ノ異ルニ從ヒ、其論スヘキ範圍モ截然區別アルヲ要ス。然レトモ、實際上之ヲ論スルニ當リテ、斯ノ如キ區別ヲナスハ頗ル困難トスル所ニシテ、世上財政學トシテ豫算ヲ論スル書ニ國法上ノ見解多ク、國法學トシテ豫算ヲ論スル書ニ財政上ノ議論混入スルモノ多キヲ以テ、知ルヘシ。而シテ、此兩者ハ設令截然區分スルヲ得ルトシテモ、一般ニ豫算ヲ研究スル者ノ爲ニハ、寧ロ兩

者ヲ併合シテ論スルヲ以テ便利トス。故ニ本書ニ於テモ此方針ヲ採リ、財政學ノ見地ニ由ルヲ本則トシ、傍ラ國法上ノ見界ヲモ參酌スルコト、セリ。

第二、豫算論ノ分科

豫算論ハ之ヲ述フルニ種々ノ方法アルヘキモ、其成立上ノ順序ニ由ルヲ最モ便利トス。即チ豫算ノ準備、編製ニ始マリ、議會ヘノ提出、議會ノ協賛、君主ノ裁可ヲ論シ、豫算ノ施行、監督ニ終ルモノトス。本書ニ於テモ、亦此編別法ヲ採リ、

第一、豫算ノ沿革、本質

第二、豫算ノ準備

第三、豫算ノ形式

第四、豫算ノ提出

第五、豫算ノ協賛

第六、豫算ノ裁可公布

第七、豫算ノ施行

第八、監督制度

ノ順序ニ由リテ、論述セントス。而シテ、便宜上二ト三ヲ合セテ豫算前論ト名ケ、四

ヨリ六迄ヲ豫算本論ト名ケテ其成立ヲ論シ、七、八ヲ以テ成立後ノ事柄ニ及ヒ之ヲ豫算後論ト名ケ、而シテ此豫算ノ施行ハ、別ニ會計論トシテ一分科ヲナスカ故ニ、本書ニハ其大要ヲ述ルコト、セリ。

第二節 法規ノ種類

第一、根本法

歲計豫算ハ、一國ノ政務中最モ重要ナルモノニシテ、古來幾多ノ紛争ハ多ク之ニ關係スルコト、諸國ノ歴史ノ示ス所タリ。之ヲ以テ、諸國ノ憲法中、會計又ハ豫算ニ關スル規定ヲ包含セサルモノナシ。我帝國憲法モ、亦第六章會計ノ部ニ於テ豫算ニ付テ、其根本問題ヲ規定セリ。

第二、主法

以上ノ憲法ハ、唯豫算大體ノ原則ヲ舉クルニ止マリ、詳細ナル規定ヲ欠ク。故ニ何レノ國ト雖モ、其他ニ會計法ナル憲法附屬ノ法律アリテ、專ラ豫算及其他ノ會計事項ヲ規定セサルモノナシ。我國ニ於テモ、帝國憲法發布ト同時ニ、明治二十二年

四月ヲ以テ、現行會計法ヲ發布セリ、之ヲ豫算ニ關スル主法トナス。
第三、特別法及補助規程。

一六

以上ノ根本法及主法ヲ以テ、全般ニ通スル大體ノ規定略備ハルト雖モ、或ル特別ナル部分ニ於ケル特別法、並ニ施行手續方法ヲ規定セル詳細ナル補助規程ハ、數多アリテ之ヲ扶クルモノトス。今我國ニ於ケル此等ノ法規ノ主ナルモノヲ舉ク
レハ、

- (1) 會計規則、會計法ノ助法ナリ。
- (2) 議院法及議院規則、豫算議定ノ手續ヲ定ム。
- (3) 特別會計法規、即チ作業會計法、官設鐵道會計法、作業及鐵道會計規則、臺灣總督府特別會計法、官立學校及圖書館會計法、陸軍作業會計法、其他一々枚舉スルニ遑ナシ。
- (4) 歳入歳出豫算概定順序豫定經費算出概則、ハ、豫算ノ準備編製ニ付テ定ム。
- (5) 國稅徵收法及施行規則ハ收入ニ付テ規定シ、任拂命令委任規程會計年度開始前現金支出規則其他ハ支出ニ付テ定ム。

(6) 金庫ニ付テハ、金庫規則、金庫出納事務規程、國庫金出納上一時貸借ニ關スル件、金庫檢查規程等アリ。
又決算上、會計檢查院ニ付テハ會計檢查院法、會計檢查院事務章程アリ、又參考トシテ物品會計ニ付テハ、物品會計規則、官有財產管理規則等アリ。

第三章 豫算本質論

第一節 豫算ノ必要

凡ソ獨立ノ生計ヲ立ツル者カ、其收支ニ付キ多少ノ豫定ヲナシ、之ニ由テ日常ノ出納ヲ制約スルノ得策ナルハ言ヲ俟タサル所ニシテ、私人ノ經濟ニ於テモ亦然リ。然ルニ國家ノ財政ニ付テ、特ニ豫算ヲ必要トスル所以ハ、左ノ理由ニ基ク。

- (1) 國家ノ收入支出ハ、其額甚々大ナリ、勿論私人ニモ大ナル富ヲ存スル者ナキニ非スト雖モ、以テ國家ノ大規模ニ比較スヘクモアラス。
- (2) 一箇人自ラ財政ヲ掌ルトキハ、是レ自己ノ利害問題トシテ節約ヲ加フヘキハ論ナシ、サレト國家ノ場合ニハ、之ヲ掌ル者ハ箇人ニシテ、其間ニ前述ノ如

キ利害ノ密接ナル關係ナク、從テ浪費ニ陥ルヲ免レス。
 (3) 國家ノ政務カ多岐多樣ナルト同時ニ、國家ノ財政ハ極メテ錯綜、紛分シ、且緩急ノ度ヲ異ニスルモノナリ。故ニ一定ノ豫算ナクンハ大失策ヲ來スヲ免レス。

(4) 國家ノ計劃ハ長期ニ亘ルモノ多シ。是レ國家ノ生命無究ナルカ爲ニシテ、從テ其財政計劃ヲ一定シテ、之ニ適應セサル可ラス。

(5) 國家ハ絶對的ノ主權ヲ有ス。故ニ其爲スカ儘ニ放任スレハ、自然放恣ニ流ル、ニ至ル之ヲシテ一定ノ軌道ニ依リ、制抑ヲ加ヘテ統治ノ權力ヲ用ヒシムルニハ、豫算ヲ以テスルハ必要ナリ。

(6) 國家ハ私人ヨリ收入ヲ徵收シテ、支出ニ充ツルモノナレハ、以上述フルノ外、私人ニ對シテ豫算ヲ作り收支ヲ明ニスル政治上ノ義務アリ。是レ、亦豫算編製ノ一理由ナリ。

(7) 豫算ハ、一國財政ノ状態ヲ判斷スルニ必要ナル資料ナリ。政府ハ、之ニ由テ信用ヲ博シ、以テ諸種ノ事業ヲ内外ニ對シテ施スコトヲ得ヘシ。

是レ其大體ニ過キササルモ、以テ豫算ノ忽ニス可ラサルコトヲ知ルニ餘アルヘシ。

第二節 豫算ノ辭義

第一〇總說

豫算ナル語ハ佛國ニテハ通常「ビュジエー」(Budget)ト云ヒ、獨逸ニテハ通常「エター」(Etat)ト云フ。英國ノ公文書ハ佛國ト同シク、之ヲ「バゼット」(Budget)ト稱ス。今其語ノ沿革ニ付テ略述セン。

第一一 Budgetノ辭義

其意義ハ、古來大別シテ、三時期ヲ經過セリ、即チ、

(1) Budgetナル語ハ、モト「ケルト」語ニテ Budgetト云ヒ、佛語ニ變化シテ古來 Bougete 又ハ Bougetteト云ヘリ。而シテ當時ハ、革ノ袋ノ意味ニ用ヒラレタリ。

(2) 然ルニ「ノルマン」人ニヨリテ此語カ英國ニ傳播セラレ、ヤ、Budgetナル語ニ變化シ、革ノ袋ノ意義ヨリ轉シテ王家ノ財寶ノ意味トナレリ。蓋シ、當時ニ於テ、國王ハ其大臣ヲシテ年々政費ノ不定ナル部分ヲ紙ニ記載シテ袋ノ中ニ

入レ、議會ニ携帶シ、其袋ヨリ書類ヲ取り出シ、一々議會ノ承諾ヲ經サシメタルニ由ル。

(3) 然ルニ此語カ更ニ英國ヨリ佛國ニ移ルニ及ヒ、遂ニ今日ノ如キ豫算ノ意味ヲ有スルニ至レリ。而シテ、公共團體ノ財政ニノミ専用セラレシハ第十九世紀ノ始メナリトス。今日ニテハ、専ラ佛國及ヒ英國ニ行ハル。

第三〇。Etatノ辭義

Etatナル語ハ今日専ラ獨逸ニテ行ハル、所ナルモ、從來ハ佛獨兩國ニ行ハレタリ。

- (1) 佛國ニ於テハ、此語ハ元來拉典語ノ「レヂウス」(Redius)ヨリ來リ、之ヲ佛國ニテ財政上ノ用語トシテ計算書タルヲ意味スルニ至リシハ、第十五世紀ト十六世紀ノ間ニアリ。始メハ、單ニ官吏間ノ通用語タルノミナリシカ、第十七世紀ノ始メニハ、一度公文書ニ用ヒラレ、又ナボレオンノ時代ニハ Budgetニ代用セラレシコトアリ。但現今、一般ニ Budgetナル語ヲ用フルハ前述ノ如シ。
- (2) 獨逸ニテハ、第十七世紀ノ中頃ニ於テ、一般ノ通用語トシテ計算書ノ意味ヲ

有スルニ至レリ。當時出版セル諸家ノ著書ニ於テ之ヲ常用スルニ由テ知ルヘシ、而シテ此語ハ、今尙繼續シテ使用セラレ、公文書ノ通用語タリ。其他、伊太利ニテハ、以上二者ノ代リニ Progetto di Bilancio (Project of Balance)ナル語ヲ用フト云フ。

第三節 豫算ノ意義

第一〇。豫算ノ意義

豫算トハ、一國財政ノ豫測ニシテ、議會ノ協賛ヲ經テ、裁可セラレ、財政監督ノ爲ニ備フルモノナリ。今之ヲ分析シテ説明スレハ、

(1) 豫算ハ一國財政ノ豫測ナリ。

豫算ハ、見積リ計算タルコトヲ以テ其本質トス。豫算其者カ、直ニ法則タル性質ヲ有スルモノニアラス。然ルニ、議會ノ協賛ヲ經ルコト、ナセルカ爲メ、豫算ヲ以テ法律ナリト云フ説ヲ出スニ至レリ。

(2) 豫算ハ、議會ノ協賛ヲ經タルモノナリ。

是レ立憲的豫算トシテ必要ナル條件ニシテ、豫算ハ必ラス議會ノ協賛ヲ經サル可ラス。議會ノ協賛ヲ欠クモノハ、其形式ハ豫算タルニ十分ナルモ、以テ豫算トシテ目ス可ラス。

(3) 豫算ハ、裁可ニ依リ、財政監督ハ爲ニ備ヘラル。

豫算ハ、其本質ハ一箇ノ見積計算ニスキサルモ、君主ノ裁可ヲ經テ公布セラレ、ニ及ヒ行政ノ機關ニ對シテ、自由ノ效力ヲ生ジ、行政官ハ豫算ニ從ヒテ、財政ヲ調理シ、收支ヲ爲サ、ル可ラス。而シテ、其ノ裁可ヲ經ル迄ニハ、議會協賛ノ手續ヲ要スルカ故ニ、間接ニハ、議會モ亦行政官ニ向テ、財政ヲ事前ニ監督スル地位ニ在ルモノトス。

以上ハ、豫算ノ性質ト我憲法上ノ規定トヲ參酌シテ定義セルモノナリ。外國ニテハ、各沿革的ノ理由ト制度ノ精神トニ由テ、各豫算ノ意義異ル可シ。今次ニ、外國ノ學說ヲ參考トシテ、紹介スヘシ。

第二、豫算ニ關スル學說

(1) 法規說、豫算ハ、本來法律タルノ效力ヲ有スルモノニシテ、豫算ニ由テ人民

ハ權利義務ヲ取得スルコトアリト云フナリ。

又一步ヲ退キテ、豫算ハ本來法律タルノ效力ナケレトモ、議會ノ協賛ヲ經タルカ故ニ形式上、法律ト云フヲ得ヘシトナスモノアリ。

斯ノ如キ說カ、我國ニ適用セラレサルハ勿論ニシテ、我憲法ハ特ニ意ヲ用ヒテ、豫算ハ法律ヲ以テ定ムト云ハスシテ、議會ノ協賛ヲ經ヘシト規定セリ。

(2) 委任說、豫算ハ法規ニアラスト雖モ、議會カ内閣ニ財政ヲ行フノ全權ヲ與フル委任狀ナリ。故ニ豫算成立セサルトキハ、内閣ハ財政ヲ行フノ全權ナク、爲メニ自ラ其職ヲ辭セサル可ラサル結果ヲ生スルトナスモノナリ。

此說モ、我國ニ適用ス可ラサルモノニシテ、我國ニテハ政府ハ議會ノ委任ニ由リテ、財政ヲ行フニアラス。政府ハ政府トシテ當然之ヲ行フモノナリ。民主國ニ於テ、議院的内閣ヲ有スル國ニテハ、或ハ斯ノ如キコトモアルヘシ。

(3) 訓令說、豫算ハ法律ニアラサルモ、議會カ行政官ニ對スル訓令ナリ。而シテ豫算カ議會ノ議決ニ由テ決定スレハ、政府ハ豫メ責任ヲ免除セララル、コトハナル。豫算不成立トナリシ場合ニ、政府カ自己ノ計劃ヲ施行スルハ、豫メ責

任ヲ免ル、利益ヲ失フニ止マリ議會ノ事後承諾ニ由テ責任ヲ免ル、コトヲ得ヘシト。

是レ亦、政府カ直接ニ議會ニ對シテ進退ノ責任ヲ負フ國ニ於テ言フヘキ所ニシテ、我國ニ適用スルコトヲ得サルナリ。
以上ハ、外國ニオケル豫算ノ學說ニシテ、我國ノ制度上ニハ君主ノ裁可ニ依リ、財政監督ノ爲ニ備ヘラル、モノト見ルヲ以テ正當ナリト信ス。

第四節 豫算ト法令トノ關係

第一〇原則

豫算ト法令トノ關係ハ、前述セル「豫算ハ法令ニアラス」トノ一言ヲ以テ斷スルコトヲ得ヘシ、即チ豫算ト法令トハ各獨立シタルモノナルヲ以テ、豫算ヲ以テ法令ヲ廢止變更スルコト能ハサルト同時ニ、法令ヲ以テ豫算ヲ廢止變更スヘカラス。然ルニ此兩者ハ實際上ニ於テ、或一事項ヲ法令ヲ以テ規定スルト共ニ豫算中ニ見積ルコトアルカ故ニ、往々問題ヲ生スルナリ。

第二〇實際上ノ問題

實際上、豫算ト法令トノ關係ニ付テ問題ヲ生スルハ、議會ニ於テ豫算ノ協賛ヲナス際ニ在リ、即チ、

- (1) 法令既ニ成立セル場合ニ、豫算ヲ以テ之ヲ動かスコトヲ得ルヤハ第一ノ問題ナリ、例之、勅令ヲ以テ或官廳ヲ創設シタル場合ニ、議會ハ其經費ヲ否決シテ其結果勅令ヲ廢止スルヲ得ルヤト云フニ、然ラス。此場合ニハ其勅令ハ事實上一時實行スル能ハサルノミ、豫算ハ勅令其者ヲ廢止スルコト能ハス。而シテ其經費カ一旦議會ノ協賛ヲ經タル以上ハ、妄ニ之ヲ廢變スルヲ得サルハ、我憲法第六十七條ノ規定スル所ニシテ、後ノ説明ヲ見ルヘシ。
 - (2) 議會ハ、法令未タ成立セサルトキハ之ニ關スル豫算ヲ協賛スヘカラサルモノナルカ。此場合ニ於テモ二者獨立ノ原則ニヨリ、贊否何レニ決スルモ自由ナリ。一方ノ極端ニ走り、豫算ニ於テ協賛セスト云フカ如キハ、政府ノ不徳義ヲ責ムル政治論トシテハ兎ニ角、法理論トシテハ誤マレルモノナリ。
- 要之、兩者ノ關係ハ、往々誤解シ易キカ故ニ、宜シク注意シテ區別セサル可ラス。

第二編 豫算前論

第一部 豫算準備論

第一章 準備ノ機關

第一節 諸國ノ制度

第一〇。準備機關ト行政府。

法律案ノ準備並ニ提出カ、獨リ行政府ニ限ラレスシテ、議會ノ兩院亦之レヲ有スルコトハ、立憲諸國皆然ラサルハナシ。然ルニ豫算ニ關シテハ、豫算ヲ以テ法律ナリトスル制度ヲ採ルモノト然ラサルモノトヲ問ハス、一般ニ其ノ準備編製ヲ行政府ニ一任スルハ、少數ノ例外ヲ除キ、諸國ノ軌ヲ一ニスル所ナリ。是レ豫算ノ準備ハ、行政府ヲ以テ最モ適當トスル證憑トシテ見ル可シ。今試ニ其ノ理由ヲ列記スレハ、左ノ如シ。

(5) 理論上、豫算ノ施行者ハ、亦其準備者タルヘシ。

行政府ヲ
準備機關
トスル理
由

凡ソ事物ハ、其ノ計劃者カ施行ノ任ニ當ルヲ正當トス。然ラズンハ、計劃施行共ニ兎角無責任ニ流ル、ヲ免レス。豫算ノ場合ニ於テモ同様ニシテ、政府既ニ豫算ノ施行者タル以上ハ、同時ニ其ノ準備ヲナス可キモノタルヤ論ナシ。

(2) 實際上、豫算施行ノ責アル者ハ、亦其準備者トシテ適當ナリ。
コレ、豫算ノ施行者タル政府ハ、最モ財政ノ狀況ニ精通スレハナリ。然リ而シテ、國家ノ組織並ニ財政ハ錯綜複雑難究リナキカ故ニ、到底二三局外者ノ窺ヒ知ルコトヲ得サルモノナリ。勿論特殊ノ事項ニ付テハ、政府以外ノモノ亦之ニ精通スルコトヲ得ヘキモ、全般ノ事項ニ付テハ政府ヲ以テ最モ適任トセサル可カラス。

(3) 監督關係上、各分擔スル所アルヲ要ス。
議會ハ、豫算施行ノ監督權ヲ有スルモノナリ。政府ハ豫算施行ノ局ニ當ルモノナリ。兩者ハ固ク限局シテ混同スルコトヲ容サス。然リ而シテ、既ニ(1)及ヒ(2)ニ説クカ如ク、豫算施行ノ局ニ當ル者自ラ其ノ準備ニ任スルヲ以テ正當且便利トセハ、豫算ノ準備者ト監督者トモ亦分別シテ混同セシム可ラサル

英國ノメイ氏カ其著書ニ於テ政府ハ政費ヲ要求ス下院ハ之ヲ許諾ス上院ハ此許諾ニ同意ヲ爲スト言ヘルハ則チ政府ト議會トカ各異レル職責ヲ有スルコト(國法上ノ議論ハ別トシテ)ヲ言ヘルモノナリ。

第二諸國ノ制度(其一)
果シテ然ラハ諸國ノ制度ハ皆豫算ノ準備ヲ以テ行政政府ニ歸スルヤト云フニ、多少ノ例外アルヲ免レス、即チ英吉利、白耳義及ヒ合衆國ノ如キ是レナリ。

- (1) 政府準備制
- (2) 議會準備制

北米合衆國ハ法律上議會ハ豫算準備ノ責ニ任ス、即チ下院ニオケル收入委員及ヒ支出委員(共ニ常置委員トス)ハ、毎年國會開會ノ日ヨリ三十日ノ期間内ニ豫算ヲ調製シテ之ヲ下院ノ議ニ附ス、勿論合衆國ニ於テモ大藏大臣 (Secretary of Treasury) ナルモノアレトモ、其ノ職權ハ甚タ輕ク、唯行政上財務ノ監督ヲナシ出納ノ計算ヲナスニ止マルモノニシテ、直接ニ豫算調製ノ權ナク、若シ大藏大臣ニ於テ

新ニ租稅ヲ賦課スルノ必要ナルヲ見ルトキハ、收入委員ニ向テ、其ノ考按ヲ建議スルニ止マルナリ。

斯クノ如ク米國ハ一種ノ異例ヲナスモノ、如シ然レトモ仔細ニ考察スルトキハ、

- (1) 議會カ準備ノ權力ヲ行フハ、専ラ編製並ニ決定ヲナスコトニアリテ調査ニ及ハス準備ノ時期ニ三種ノ區別ヲ見ヨ、財政ノ調査ヲナシ豫算編製ニ關スル一切ノ材料ヲ蒐集シテ其ノ基礎ヲ成スハ、他ノ諸國ト同シク政府ノ手中ニアリ、
- (2) 又下院カ豫算ヲ編製スルニ當テモ彼ノ常置委員ハ大臣ノ出席ヲ求メテ之ニ參與セシム、而シテ委員ハ其ノ意見ヲ聞キ、又其ノ提案ニ基キテ豫算ヲ編製スルモノトス。

是ヲ以テ、米國ハ法律上議會準備制ヲ採ルト雖モ、其ノ實ハ勉メテ之レカ弊害ヲ救済スルノ道ヲ設ケタルモノト云フ可シ。

反之英國ハ法律上政府準備制ニ屬シ、議會準備制ヲ採ラス、然レトモ事實上ニ於テ豫算準備ノ決定ハ豫算準備ニ三期アル國會議員ニ屬スルヲ見ル、即チ支出豫

算ニ付テ英國ニ於テハ毎年十二月十五日過キニ既定支出豫算外ノ四通ノ支出豫算書ハ、各省大臣ヨリ大藏大臣ニ交付セラル。茲ニ於テ、此豫算ハ大藏總裁總理大臣自身之ヲ兼ス。及ヒ大藏大臣ノ下ニ組織セラレタル財務委員ノ審査ニ依リテ、決定セラル。モノトス。財務委員ハ、下院ノ議員四名ト書記官四名トニヨリ成立ス。斯クノ如クニシテ支出豫算決定スルニ至レハ、大藏大臣ハ之ニ對スル收入豫算ヲ調製シテ之レヲ下院ニ提出スルモノトス。

是ニ依テ之ヲ見レハ英國ハ名義上ハ兎ニ角、實際上ニ於テ多少議會準備制ヲ採ルモノナリトイフ可シ。

白耳義モ亦英國ト同シク、千八百八十三年以來、大藏省ニ豫算常議員ヲ設置シ、大藏次官議長トナリテ各省ノ歲計豫算ニ付テ審査決定ヲナスモノトス。

第三、諸國ノ制度(其二)

次ニ述フルハ豫算ノ政府準備制ヲ採レル諸國中ニ於テ、制度ヲ異ニスルコトナリ。即チ豫算ノ準備ニ付キテ、統一ノ方法ヲ採ルモノト、然ラサルモノトアルコトナリ。

(1) 豫算統一制
(2) 豫算割據制

惟フニ、國家財政ノ要ハ、其ノ經費カ能ク國家ノ目的ヲ成就スルニ耐ユルノミナラス、一方ニ於テハ節約ヲ加ヘテ冗費ヲ濫出セス、各部ノ費目各歩調ヲ同一ニシテ各其ノ目的ヲ達スルニアリ、之ヲ以テ、豫算ノ準備ニ統一機關アリテ、各省提出ノ原案ニツキテ取捨切裁スル所アルハ、極メテ重要ノコトナリト云ハサル可カラス。諸國ノ制度ニ付テ考フルモ、概ネ皆此ノ方法ニ由ラサルハナシ、即チ大藏大臣、内閣ノ閣議等ハ、常ニ此ノ權能ヲ有スルヲ見ルナリ。

露西亞

然ルニ、茲ニ異例トシテ舉ク可キハ、露西亞ナリ、同國ニ於テハ諸國ト其ノ制度ヲ異ニシテ、豫算割據制ヲ採レリ。即チ露國ノ豫算ハ、毫モ大藏大臣ニ關涉スルコトナクシテ、各省大臣ハ、其省ノ豫算ヲ直接ニ國務評議會(樞密院ノ種類)ニ提出ス。國務評議會ハ、各省大臣ノ提出セル豫算ヲ審議決定ス。大藏大臣ハ、唯其ノ決議及ヒ理由ニ基キテ豫算ヲ編製シ、之ヲ形式的ニ總決議ニ附シ、以テ帝國豫算ト稱ス。而シテ該評議員ハ、各大臣ヨリ提出セラレタル各省豫算ヲ、其ノ儘ニ承認スルヲ以

テ常例トス。
第四、我國ノ制度

我國ノ制度ハ、人ノ知ル如ク、豫算準備ニ關シテハ、政府準備制、豫算統一制ヲ採レリ。而シテ、其ノ統一ノ方法ニ付キテハ、前後二段ニ分チ、第一段ニ於テハ、各省大臣及ヒ歳入事務管理廳ノ調製セル歳入出概算書ニ付キ、大藏大臣ヲ經テ閣議ニ於テ之ヲ決定シ、第二段ニ於テハ、此歳入出總概算書ニ基キテ、各省大臣カ調製セル各省豫定經費要求書ニ付キ、大藏大臣ヲ經テ閣議ニ於テ之ヲ決定シ、茲ニ始メテ豫算準備ノ手續ヲ終リタルモノトシ、上奏ノ上、帝國議會ニ提出スルモノナリ、尙其ノ準備方法ニツキテハ、第四章ニ於テ述ントス。

第一節 大藏省論

第一、豫算ニオケル大藏大臣ノ地位

前節ニ於テ、豫算準備ニ關スル諸國ノ制度ヲ述ヘタリ、本節ニ於テ、聊カ大藏大臣ニ付テ論セント欲ス。他ナシ、大藏大臣ハ現今ニ於テモ豫算ニ關シ特別ノ地位ヲ

專制帝國時代

有スレハナリ。

往時專制帝國ノ時代ニ於テハ、其内閣ノ主腦大臣カ同時ニ財政上ニ關シテ全權ヲ有セリ。即チ當時ノ内閣大臣ノ間ニ於テハ、實際上顯著ナル權力ノ相違アリ、恰モ長官ト屬僚トノ關係ノ如キモノアリ、是ヲ以テ一省ノ大臣タルモノモ、主腦大臣ニ對シテハ毫モ自己ノ意思ヲ主張スルコト能ハス。即チ豫算ノ成立上ニ於テモ、主腦大臣ハ殆ント專制的權力ヲ以テ各大臣ニ臨メリ。彼ノ英國ニ於テ、古來大藏總裁ノ官ハ、常ニ内閣總理大臣ノ兼攝スル所ナリシカ如キ、亦此ノ結果ニ外ナラサルナリ。但シ多少ノ例外例之、佛國ノリシニ、リ、コルベール、ツルゴイノ如キハ、實ニ此種ノ政治家タリシナリ。

立憲的時代

然ルニ立憲的時代ニ進歩スルニ及テ、何レノ國ニ於テモ、以上ノ專制的思想ハ漸次排斥セラレ、コト、ナルニ至レリ。即チ一方ニ於テ、各大臣カ聯帶責任ヲ有シ、豫算ニ於テモ同一ノ責任者タルト同時ニ、他ノ一方ニ於テハ、各大臣ハ其ノ豫算ニ付テ同一ノ權利ヲ有シ、其ノ間ニ權力ノ差違ヲ認メサルニ至レリ。勿論現今ニ於テモ、多少其人ノ人格閱歷等ニ由リ勢力ノ差等アルモ、古代ニ於テ長官ト屬僚

現今

トノ間ノ如キ干係ハ、全然一掃セララル、ニ至レリ。從テ、大藏大臣ノ職務モ古代ニ於テ常ニ總理大臣ノ兼攝トシテ勢力ヲ揮フカ如キコト一變セラレテ、今ヤ唯各省豫算ヲ中央ニ統一整理スルコトニ止マルニ至レリ。

然レトモ現今、ニ於テモ大藏大臣ハ豫算ニ付テ頗ル重大ノ責任ト勢力トヲ有スルコトハ非定スルコト能ハス、即チ大藏大臣ハ、直ニ各省大臣ニ對シテ監督權ヲ有セサルヤ論ナシト雖モ、各省豫算ノ通觀權ヲ有スルカ故ニ、或ハ節約ノ方針ヲ取ル可キ希望ヲ陳フルコトヲ得可ク、或ハ極メテ必要ノ場合ノ外、新要求ノ提出ヲナサ、ルノ注意ヲ促スコトヲ得可シ。唯大藏大臣ハ、獨斷的ニ豫算ノ項目ヲ刪減シ若クハ正誤スルカ如キ權利ヲ有セサルナリ。斯クノ如キハ、宜シク各大臣ノ會議タル内閣ノ閣議ニ於テ多數決ヲ以テ決定スルノ外ナシ。

西人曾テ大藏大臣ヲ以テ多額ノ金ヲ負ヒテ旅行スル旅人ニ比シ、各省大臣ヲ以テ之ヲ道ニ要スル盜賊ニ比セリ。其意蓋シ大藏大臣ニハ非常ナル胆氣力量ナクンハ、盜奪ヲ免レサルヲ言ヘルナリ。之ヲ以テ、現今ニ於ケル大藏大臣ノ地位ハ設令昔時ノ如ク重大ナラサルニモセヨ、尙各大臣ノ間ニ一頭角ヲ現ハスノ地位ニ

在リ。從テ内閣ノ統一上、其技量聲望ニ依頼スルコト、決シテ尠少ト言フ可カラス。
第二、豫算ニオケル大藏大臣ノ職務

現今ノ大藏大臣ハ普通ニ豫算ノ準備ニ關シテ、三種ノ職務ヲ有ス。

(1) 其一ハ大藏省ノ長官トシテ、大藏省所管ノ歳出豫算ヲ編製スルニ在リ。

(2) 其二ハ全體ノ歳入豫算ヲ編製スルコトニ在リ、即チ其ノ歳入ニシテ自己所屬官廳ノ管轄スル所ナリトセハ各官廳ニ對シテコレカ材料ヲ收集シテ計算ヲナシ、又自己所管以外ノ官廳ノ收入ニ對シテモ、其ノ報告ニヨリテ適當ニ安排シ、以テ總歳入豫算ヲ編製セサル可カラス。

(3) 最後ノ職務ハ、各大臣ノ提出セル歳出豫算ト、自己ノ編成ニカ、ル歳入豫算トヲ連結参照シテ、一ノ總豫算ヲ編製スルコトニ在リ。此ノ場合ニ於テ、各省ノ要求額ニシテ多大ナランカ、種々ノ注意ト希望トヲ述ヘテ、其ノ反省ヲ求めルコトヲ得ルヤ、既ニ述フル所ノ如シ。

斯クノ如ク、現今文明國ニ於ケル大藏大臣ハ、豫算ニ付テ各大臣ヨリモ第二、第三ノ重大ナル責任ヲ負擔ス。然レトモ現今諸國ノ制度其ノ概ヲ一ニセス、或ハ北米

合衆國ニ於ケルカ如ク、大藏大臣ノ權限極メテ輕キモノアレハ、一方ニハ英國ニ於ケルカ如ク、方メテ中央集權的勢力ヲ有スルモノアリ。以上述フル所ハ、其ノ大多數ノモノニ付テ、大體ヲ述フルニ止マルコトヲ注意スヘシ。

第三、我國ニ於ケル大藏省ノ組織。

帝國ノ大藏省ハ、即チ財務ノ中央官廳ニシテ、其首腦タル者ヲ大藏大臣トス。大藏省ノ官制ニ由レハ、大藏大臣ノ職務ハ、政府ノ財務ヲ總轄シ、會計、出納、租稅、國債、貨幣、預金、保管物及ヒ銀行ニ關スル事務ヲ管理シ、府縣郡市町村及ヒ公共組合ノ財務ヲ監督スルニ在リ。

大藏大臣ハ、補助官トシテ次官、局長以下ノ官吏ヲ監督スルノ權アリ。大藏次官ハ一人ニシテ、大臣ヲ輔ケテ一切ノ財務及ヒ省中ノ庶務ヲ司ルモノトス。

大藏省ニハ、常設ノ機關トシテ主計局、主稅局及ヒ理財局ノ三局部アリ。各局一人ノ局長ト若干ノ書記官及ヒ屬ヨリ成ル。其ノ主トシテ豫算ニ關スルモノハ、即チ主計局ナリ。

(1) 主計局 ハ豫算決算ニ關スル事項、諸計算書ノ調製及ヒ検査ニ關スル事項、

ヒ地方自治團體ノ歲計監督ニ關スル事項ヲ掌ル。其ノ下ニ、豫算決算課及ヒ司計課ヲオク。

(2) 主稅局 ハ、國稅ノ賦課徵收ニ關スル事項、稅務ノ管理監督ニ關スル事項、民有地地種目變稅並ニ土地臺帳ニ關スル事項、稅關事項、大藏省所管稅外諸收入ニ關スル事項、地方自治團體ノ諸收入ニ關スル事項等ヲ掌ル。其ノ下ニ、內國稅課、關稅課、經理課ノ三課アリ。

(3) 理財局 ハ、國資ノ運用出納ニ關スル事項、國庫ノ出納管理及ヒ出納計算書ニ關スル事項、國債ニ關スル事項、貨幣ニ關スル事項、金庫ノ監督銀行ノ監督ニ關スル事項、地方財務及ヒ一般金融ニ關スル事項、地方自治團體ノ公債ニ關スル事項等ヲ掌ル。分課トシテハ、國庫、國債及ヒ銀行ノ三課アリテ、之ヲ分掌ス。

以上ノ外ニ特別官廳トシテハ造幣局、煙草專賣局等アリ。臨時ハ機關トシテハ臨時國債整理局ノ如キアリ。又地方特別ノ中級官廳トシテハ、五箇ノ稅關ト十八ノ稅務監督局並ニ若干ノ鹽務局アリ。更ニ下級官廳トシテハ、稅關支廳、稅關監督署、

稅務署等アリ。今豫算論ニ關係スル所少キカ故ニ、一々之ヲ掲ケス。

三八

第二章 豫算ノ年度

第一節 會計年度

第一〇會計年度ノ意義

會計年度或ハ豫算年度トハ、豫算ノ効力ヲ發生存續スル期間ヲ云フ。豫算ノ目的ハ前述ノ如ク、正確ニ會計ノ施行ヲナスニアリトスレハ、豫算ハ其ノ計劃ニ由テ施行セラルヘキ、或ル一定ノ期間ナカルヘカラス。是レ會計年度ナリ。其ノ長短ノ如キハ、固ヨリ國ニヨリテ差異アレトモ、豫算ト會計年度トハ、影ノ形ニ於ケルカ如ク、常ニ相隨伴スルモノナリ。是レ本編ニ於テ、先ツ會計年度ヲ説ク所以ナリ。

茲ニ注意スヘキハ、會計年度トハ、出納、整理、期間トハ、區別スヘキコト是レナリ。出納、整理期間ハ、唯便宜上會計ノ整理ヲナスヘキ餘裕ヲ與ヘタルモノニシテ、當然豫算ノ効力ヲ及ホスヘキ期間ニアラサルナリ。

第二〇會計年度ノ必要

(1) 會計年度ハ豫算施行上ニ必要トス

是レ會計年度ノ主要ナル點トス。若シ會計年度ノ區別ナカラシメンカ、豫定計劃ハ如何ニ整備スルモ之レヲ施行スル上ニ於テ、到底正確ニナスコト能ハサル可シ。即チ其ノ計算ニ重複ヲ生シ、或ハ事業ノ終始ニ不均衡ヲ生スルカ如キハ、自然ノ結果トシテ免ル可ラス。是レ箇人經濟ニ於テモ見ル所ニシテ、所謂營業年度ナルモノヲ設クルハ、吾人ノ知ル所ノ如シ。

(2) 會計年度ハ豫算準備上ニ必要ナリ

國家ノ生命ハ永遠不朽ニシテ、從テ國家財政ノ計劃ハ規模宏遠無究ナリ。然レトモ、一方ニ於テ國家ノ事業トシテナスヘキモノ無數ニシテ、從テ其ノ財政計劃ハ秩序アリ、緩急アリ、一系紊レサルコトヲ期セサル可ラス。若シ豫算準備上會計年度ノ區分ヲ度外視スルカ如キコトアラハ、秩序アリ次第アル精緻ナル財政ノ運用ヲ見ル能ハサルヤ、更ニ多言ヲ要セサルナリ。

第三〇會計年度ノ制度

會計年度ノ制度ハ之ヲ沿革ニ徴シ之ヲ天然ノ状態ニ顧ミルニ一箇年ヲ以テ限定スルヲ以テ普通トスルカ如シ。然ルニ實際ニ於テハ、必スシモ然ラス。

(1) 一年制度、是レ古來今日ニ於テモ最モ普通ニ行ハル、モノニシテ、文明諸國亦多クハ之レニ由ル。

(2) 二年制度、獨逸帝國中バイエルン、ザクゼン、ブラウンシュヴァイヒ、バーデン、ウルテンベルヒ等之ニ由ル。
(3) 三年制度、ヘッセン、ザクゼン、ソイマール、オルデンブルヒ等之ニ由ルウルテンブルヒモ、千八百七十一年ヨリ七十三年迄ハ之ニ由レリ。
(4) 四年制度、ザクゼン、コグルヒ、ゴータ及ヒルードルスタット、シュワルツブルヒ、ゾンデルスハウゼン等之レニ由ル。

(5) 六年制度、千八百六十八年迄バイエルン國ノ採ル所タリ。

我國ニ於テハ吾人ノ知ルカ如ク、帝國憲法第六十四條ニ於テ國家ノ歲出歲入ハ毎年豫算ヲ以テ帝國議會ノ協贊ヲ經ヘシトアルニ由リ、一年制度ヲ採ルコトヲ知ルヘク、又其ノ以前ニ於テモ、一年制度ニ

我國

一年制度

由リシコトハ財政史ノ示ス所ナリ。而シテ一年以内ヲ以テ會計期間トスルハ箇人經濟ニハ見ル所ナレトモ國家ニ於テハ之ヲ見ス。

第四、一年制度ト數年制度トノ得失

會計年度ハ、前述ノ如キ種々ノ制度中、一年ヲ以テ可トスルヤ或ハ數年ニ亘ルヲ可トスルヤハ、學者ノ往々論スル所ナリ。今其ノ言フ所ヲ聞クニ、曰ク

(1) 一年制度ハ豫算ノ沿革ニ適應ス。
既ニ第一編ニ於テ説クカ如ク、豫算ノ起源ハ租税ノ承諾權ニ基ツク。而シテ租税ノ承諾ハ毎年國會ヲ召集スルノ要素トナリシモノナレハ、一年制度ヲ採リテ毎年豫算ノ協贊ヲ要スルハ、是レ國會召集ノ左券ナリトイフナリ。然レトモ、現今ノ憲法ハ皆議會召集ノコトヲ明記スルカ故ニ、憲法ノ存スル以上、議會ノ召集ニ付テ疑ヲ挿ム者ナカルベシ。
(2) 一年制度ハ天然人事ノ必要ニ吻合ス。

蓋シ、季節ノ周廻ハ人事百般ノ事柄ヲ主宰シ、民間一般ノ取引ハ一年ヲ以テ

終期トスルヲ常トス。果シテ然ラハ收入支出ニ於テ、常ニ人民ニ密接ノ關係アル國家カ、同シク一年ヲ以テ會計年度トスルコト、亦社會人民ノタメニ望マシキコトナリ。

(3) 一、年、制、度、ハ、豫、算、ノ、計、劃、及、ヒ、施、行、ニ、必、要、ナ、リ、

豫算ノ計劃ハ、其規模永遠ニ亘レトモ、成ルヘク之ヲ區劃細分シテ、秩序アリ階段アリ當時ノ状態ニ適應スルモノタラシムヘシ。又之ヲ施行スルニ當リテモ、其ノ期間短クシテ粗誤脱漏ナキヲ期セサル可カラス。即チ豫算ノ計劃並ニ施行ニモ、原則トシテハ會計年度ノ長期ニ亘ルハ不便ナリト言ハサル可ラス。

(4) 一、年、制、度、ハ、豫、算、ノ、監、督、ニ、必、要、ナ、リ、

豫算ノ監督ハ、成ルヘク會計年度ノ短キヲ有利トス。而シテ此事タル、其ノ監督機關ノ何レナルヲ問ハサルナリ。若シ會計年度長キニ亘ルトキハ、其監督ハ自然困難ニシテ粗漏ナルヲ免レス、

然ルニ一年制度ノ欠點トシテ言フ所ヲ聞クニ曰ク。

數年制度論

(1) 一、年、制、度、ハ、不、經、濟、ナ、リ、

一年制度ヲ採用スレハ、自然議會ハ毎年召集セラレサル可カラス。之カ爲ニ議會ノ設備、議員ノ旅費日當等、頗ル多額ヲ要セサル可ラス。若シ數年一回之ヲ召集スルコト、セハ、其費額ヲ節約スルヲ得ヘシ。

又一步ヲ譲リ、費額ノ節約ハ論スルニ足ラストスルモ、毎年豫算ノ討議ヲ行ハシムル時間ヲ割キテ、之レヲ法律ノ議定ニ用ヒシメハ、法律ハ更ニ完備ナルコトヲ期シ得ヘシ。畢竟豫算ノ討議ニ多大ノ時日ヲ費ストキハ、議會ハ過渡ノ努力ノタメ、法律ノ議定ニ全力ヲ用フルヲ得ス、コレ時間的經濟ノ理ニ反ス。

(2) 一、年、制、度、ハ、豫、算、ノ、施、行、上、不、便、ナ、リ、

若シ一年制度ヲ嚴格ニ履行セシカ、其年度ノ收支ハ該年度内ニ整理シテ、次年度ト正確ニ區別セサル可ラス。是レ監督上ハ有利ナルヘキモ、施行上ニハ毫モ融通ノ點ナク、緩急相救フノ便ヲ欠ク。

要之、規模狭少ニシテ平靜ナル小國家ニ於テハ、或ハ數年制度ヲ施クノ却テ有益

結論

ナルヲ見ルコトアルヘシ。然レトモ、規模宏大ニシテ事業多忙、財政膨大ナル現今ノ國家ニ於テハ、一年制度ヲ採ルヲ以テ、何レノ點ヨリスルモ適當トセサル可カラス。唯其ノ欠點ハ、繼續費等ノ制度アリ、優ニ之ヲ補フコトヲ得ヘキナリ。

第二節 會計年度ノ開始

第一、諸國ノ制度

年度ノ開始ハ、何月ヲ以テ開始ス可キヤ。古來普通ノ慣例ニ由レハ、會計年度ハ曆年ト吻合シ、年度ノ開始ハ一月一日ヲ以テシ、終期ハ十二月末日ヲ以テスルモノナリ。然レトモ、會計上ノ必要ハ、遂ニ會計年度ノ開始ヲ特ニ選定スルニ至ラシメタリ。即チ現今諸國ノ制度ハ、左ノ如シト云フ。

- (1) 曆年制、即チ一月一日ヲ以テ始マルモノニハ、佛蘭西、白耳義、和蘭、奧太利、匈牙利、露西亞、瑞西、瑞典、希臘及ヒ南米諸國。
- (2) 四月一日制、ニハ、獨逸、李漏西、英國及ヒ丁抹等。
- (3) 七月一日制、ニハ、合衆國、伊太利、西班牙、葡萄牙、那威、墨耳其、カナダ、ブラシル

等。

(4) 十月十三日、ヲ以テ開始スルモノニハ、チニス。

(5) 十一月十日、ヲ以テ開始スルモノニハ、埃及。

而シテ、此等ノ差異ハ、各國共ニ沿革上竝ニ特別ノ事由ニ基ツクモノニシテ、理論ヲ以テ律スルコトヲ得ス。

第二、年度開始期ノ要件

前述ノ如ク、年度開始ハ各國ノ異ル所ニシテ、理論ヲ以テ一概ニ可否シ難シト雖モ、其ノ最モ有效ナルカ爲メニハ、左ノ如キ要件ヲ具備セサル可ラス。

(1) 年度開始期ハ、豫算議決ノ期ト遠カラサルコト。

豫算ハ財政計劃ニシテ一ノ豫測ニスキサルカ故ニ、豫算ノ議定期ト豫算ノ施行期トハ、相去ルコト遠カラサルヲ要ス。然ラスンハ、豫算ハ常ニ内外種々ノ事業ノタメニ左右セラレテ、當初ノ目的ヲ遂行スルコト能ハサルニ至ルヘシ。彼ノ追加豫算ノ濫出、豫備金支出ノ増加、事後承諾ノ發生等ハ、必ラス之レニ從ヒテ生スルニ至ルヘク、其國ノ財政ハ常ニ動搖齟齬スルヲ免レサル

可シ。

以上ノ結果トシテ、議會ノ召集期並ニ開期ト會計年度開始期トハ、常ニ密着ナル關係ヲ有スルモノナリ、即チ議會ハ召集期ト年度開始期トハ、甚シク遠カラサル代リ、餘リニ接近セシム可ラス、何トナレハ、遠近何レモ甚シキニ至ルトキハ、豫算ノ議定後年度開始ニ至ルノ時期頗ル隔絶スルニ至ル可ケレハナリ、例之、會計年度、一月一日ヲ以テ始マル制度ヲ採レルニ、議會ノ召集期ヲ十二月初旬ニスルカ如キコトアラハ、其ノ議定ヲ了ルニハ一月以後ニ亘ル可ク、爲ニ甲午提出ノ豫算ハ漸ク丙午ニ至ラサレハ施行スルコト能ハサルニ至ル可キナリ。

(2) 年度開始期ハ歲入饒多ノ時ナル可キコト、元來年度開始ノ時ニ當リテハ、最モ歲入ノ如何ニ付テ注意セサル可カラス、如何トナレハ、

(イ) 年度開始ノ時ニ於テハ、當該年度ノ經費ニ付テ仕拂ヲ要スルアルモ、收入ハ之ニ先チテ國庫ニ充滿スルモノニアラス、而シテ前年度ノ剩餘アル

モ、妄リニ之レヲ用フルコトヲ得ス。

(ロ) 若シ之ニ對スル歲入ナキトキハ、大藏省證券ヲ發行スルカ、一時借入金ヲナサ、ル可ラス、而シテ之レニハ利子ヲ附加セサルヲ得ス、爲ニ國庫ノ損失トナルニ至ルヘシ。

(3) 年度開始ノ期ハ民間ノ經濟狀態ヲ顧ルコト、

是レ亦年度開始ニ付キ、十分注意ス可キコトニシテ、人民產業ノ繁閑、市場ノ狀況等ヲ見テ、歲入ヲ徵收スルモ其負擔甚シキ困難ナク、市場ノ狀態ハ之ニ由テ影響セラレサル時期ナラサル可ラス。

若シ一國會計年度ノ開始期ニシテ不適當ナランカ、當ニ政府ノ豫算カ大打撃ヲ被リ、一國財政紊亂ノ基ヲナスノミナラス、國民ハ皆其ノ弊ヲ被ラサルヲ得ス、年度開始期ノ如キハ其影響、少ナルカ如クニシテ實ハ極メテ大ナリ。

第三、我國ノ制度

我國ノ年度開始期ハ、會計法第一條ノ定ムル所ナリ、曰ク
政府ノ會計年度ハ、毎年四月一日ニ始マリ、翌年三月三十一日ニ終ル。

我國開始年
度完全可
ラトス

蓋シ、我國ニ於テハ、議會ハ人民閑散ノ時即チ十一月又ハ十二月ノ交ヲ以テ召集セラレ、會期ハ三ヶ月ヲ以テ常トスルカ故ニ、前述セル第一ノ條件ニ適合スルモノナリ。然レトモ、我國ニ於テハ重要ナル歳入ハ七月以後ニカ、ルモノ多キヲ以テ(無論直接税ナリ)、四月一日ヲ以テ開期トスルトキハ、勢ヒ開始期ニ於テ大藏省ノ證券ノ發行多額ニシテ、且比較的長期ナラサルヲ得ス。此點ヨリ云フトキハ、我國ノ制度ハ完全ノモノト云フコトヲ得ス。

右ニ付テハ、曾テ第十回帝國議會ニ於テハ衆議院ニ於テ建議案ノ發議ヲ見ルニ至レリ。今參考ノ爲メ左ニカ、ク、

會計年度改正ニ關スル建議案

現行會計年度ノ規定ニ依レハ、會計年度ハ毎年四月一日ニ始マリ翌年三月三十一日ニ終ルモノトス。抑、政府カ先ニ該法ノ規定ヲ設ケラレタルモノ主トシテ當時財政上ノ便宜ニ出タルモノ、如シ。然レトモ、此ノ規定ノタメニ、從來政府ノ會計年度ト民間ノ決算季ト相一致セサルカ爲メニ、實際上ノ不便少カラス。又豫算ノ關係上、議會ハ十一月若ハ十二月ニ於テ開會シ、翌年二月若ハ三月ニ於テ閉會スルノ止ムヲ得サルニ至ル。此間恰モ新曆ノ節季ト舊曆ノ節季トニ跨リ、我國ノ慣例上一歳中ノ最多忙ナル時期ニ際シ、曾ニ憲法ノ規定ニ依レル會期ノ實際上ニ短

縮セラレ、ノミナラス、多用ノ人ヲシテ議員タルノ責務ヲ盡スコト能ハサルニ至ラシム。今若シ該會計年度ヲ改正ジ、七月一日ヲ以テ其始トシ、翌年六月三十日ヲ以テ其終トセハ、從來我國ノ慣例ト一致シ、諸般ノ不便ヲ除去スルヲ得ベシ。而シテ議會ハ三月ニ於テ開會シ、會期短縮ノ憂ナク、慎重ニ國事ヲ審議スルヲ得ム。政府モ亦之カ爲ニ豫算調製ノ便ヲ享クルコト少カラサルベシ。云々。

シカモ、政府ニ於テ今尙ホ以前ノ制度ヲ踏襲スル所以ハ、實ニ會計年度開始期ヲ變更スルノ困難ナルモノアレハナリ。

第四、年度開始期變更ノ困難

年度開始期ヲ變更スルハ、容易ナルカ如クニシテ、實際上極メテ難シ。何トナレハ、前述開始期ノ要件中ニ説キタル要件ハ、新會計年度ノ開始期ニ具備セラレハ、可キハ、勿論、新舊年度開始期間ハ、多ク會計上ノ困難ヲ來ス可ケレハ、ナリ。即チ臨時ニ收入トシテ巨額ノ金錢ヲ得タル時ニ非スンハ、其改正ハ得テ期ス可カラサルナリ。例之我國ニ於テハ、毎年六月ニハ巨額ノ公債ノ利子ヲ仕拂ハサル可カラス。我國ニ非ンハ、七月一日ヲ會計年度ノ開如何トモス可カラサルモノナリ。彼ノ佛國ニ

豫算前論 豫算準備論 豫算ノ年度 會計年度ノ開始

於テ年度ノ改正ヲ屢次企ツルニモ係ハラス、今ニ之ヲ決行スルコト能ハサル所以ノモノ故アルナリ(佛國ニテハ、千八百十七年ニ於テ既ニ改正ノ企アリ、下院ニ於テ此議ヲ決定セルモ、遂ニ成立スルニ至ラザリキ)

第三章 準備ノ時期

第一節 諸國ノ制度

第一〇〇〇〇三階級

豫算ハ、其ノ準備一切ヲ完成シテ議會ニ提出スル迄ニハ、種々ノ手續ヲ經ルモノニシテ、之ヲ大別スレハ、三階級トナスコトヲ得ヘシ。

- (1) 調査時期、コレ最初ノ時期ニ屬スルモノニシテ、豫算ノ構成ニ關シテ、一切ノ材料ヲ蒐集シ調査スル時代ナリ、之ヲ一家ノ建設ニ譬フレハ、木材ヲ處々ヨリ集メテ使用ノ設計ヲナスニ似タリ。
- (2) 編製時期、次テ來ルモノヲ、編製時期トス、即チ既ニ蒐集シ調査シタル材料ヲ基礎トシテ、一ノ家屋ヲ建築スルニ在リ。

(3) 決定時期、最後ニ既ニ編製シタル豫算ニツキテ決定スルナリ、恰モ建築シタル家屋ニ對シテ棟上ヲ行ヒ、一ノ人家タルヲ表示スルカ如シ、此ノ決定ニ由テ豫算ハ全ク形體ヲ具シ、議會ニ提出スルノ資格ヲ有スルニ至ルナリ。

第二〇〇〇〇制度

豫算準備時期ノ三階級ハ、何レノ國ト雖モ之ヲ採ラサルモノナシ、唯其ノ準備時期ノ長短ニツキテ差異アルノミ、而シテ多クノ國家ニ於テハ、議會ノ召集セララル以前三ヶ月乃至六ヶ月ニ於テ之レカ準備ニ着手シテ、召集ニ至ル迄ニ完結スルヲ常トス、例之、白耳義ニ於テハ三ヶ月ヲ要シ、英吉利ニ於テハ通常四ヶ月ヲ要スルカ如シ。

歐米諸國中、準備期間ノ最モ長キモノヲ佛蘭西トス、佛國ニ於テハ、豫算ノ提出ハ慣例トシテ多ク一月ノ初旬ニアリ、而シテ之レカ準備ニ着手スルハ、其ノ前々年ノ十月又ハ十一月ノ間ニアリ、之ヲ以テ、佛國ノ準備期間ハ、大體十四ヶ月ノ長キニ亘ルモノナリト云フ可シ。

我國ニ於テハ、各省ニ於テ、歲入出概算書ヲ調製スルハ五月三十一日迄ニシテ、閣

多數ノ國

佛國

我國

議ニ於テ總豫算全體ノ決定ヲナシ、印刷ニ着手シ議會提出ノ準備ヲナスハ十一月頃ニアリ。故ニ準備時期ハ前後合算シテ六ヶ月以上ヲ要スルモノト云フヘシ。

第三、追加豫算

以上準備時期ニ付テ説キシハ總豫算ナリ。追加豫算ハ止ムヲ得サル必要ニ應ジ、急劇ニ準備スルモノナルヲ以テ、其ノ期間短キハ固ヨリ言フヲ俟タサルナリ。

第二節 準備時期ニ關スル注意

第一、期間ノ短縮

豫算準備ノ時期ハ成ル可ク之レヲ短縮スルコトニ勉メサル可ラス。蓋シ豫算ハ財政ノ計劃ニシテ、全ク豫測ニスキサルモノナルカ故ニ、豫算ノ計劃ト豫算ノ施行トハ、サナキタニ齟齬ヲ生シ易シ。若シ此ノ齟齬ヲ少カラシメントセハ、豫算編製カ實質上ニ於テ確的ナルノミナラス、豫算準備着手ノ時期ト會計年度開始ノ時期トノ距離ヲ出來得ルタケ近接セシメサル可カラス。而シテ之レカ爲メニハ、豫算議定ノ期間ヲ短カラシムルヲ要スルハ勿論、之レカ提出ノ時期ヲモ早カラ

シメサル可カラス。而シテソノ最モ必要ナルハ、準備ノ期間ヲ出來得ルタケ短縮スルニアルナリ。但シ此ノ短縮カ餘リ極端ニ走リテ、實質ノ粗漏ヲ來スコトナカラシメンコトハ、更ニ言フヲ要セサルナリ。

第二、期間短縮ノ一方法

前述ノ如ク、準備期間ヲ短縮セムコトハ、豫算ノ正確ヲ維持スル上ニ於テ極メテ重要ナレトモ、之ヲ達スヘキ手段方法ハ如何、コレ決シテ容易ノ業ニアラス。吾人ノ見ル所ヲ以テスレハ、豫算ノ準備ニ多大ノ月日ヲ要スル一原因ハ、豫算ノ綱目甚タ浩瀚ニシテ、其ノ内容極メテ錯綜セルニアリ。故ニ今豫算ヲ大別シテ既定ノ歳出入(不動部分)ト自由議決ヲ要スル分(可動部分)トニ分テ、各款項ニ於テ唯自由議決ヲ要スル部分ノミニ付テ、編製準備ノ勞ヲ專ラニスルコト、セハ、大ニ手數ヲ省キテ時間ノ節約ヲナスヘキコトヲ信ス。而シテ斯ノ如キ方法ニ由リテ成レル豫算ハ、議會ニ於テ議決スル際ニモ大ニ便益ヲ與フヘキコトヲ信ス。

第四章 準備ノ方法

第一節 準備ノ方法

第一、形式の準備手續

我國ノ手

我國ニ於テハ、豫算ノ形式の準備手續ハ、左ノ順序ヲ履ムモノトス。其ノ規定ハ、明治二十二年六月閣令第十九號(明治二十六年閣令第二十六號)歳入歳出豫算概定順序並ニ會計規則ニアリ。

第一ニ、歳入ノ事務管理廳ハ、毎年度歳入概算書ヲ調製シ、各省大臣ハ、毎年度歳出概算書ヲ調製シテ、前年度五月三十一日迄ニ之レヲ大藏大臣ニ送附ス(第一條第三條)。大藏大臣ハ、各廳ノ歳入概算書及ヒ歳出概算書ヲ檢案シ、歳入出ヲ對照調理シ、歳入出總概算書ヲ調製シ、前年度六月三十日迄ニ之ヲ閣議ニ提出ス(第五條)。内閣ニ於テハ、前年度七月十五日迄ニ歳入出總概算書ヲ決定ス(第七條)。各省大臣ハ、内閣ニ於テ決定シタル各省所管經費毎項ノ概算額以内ニ於テ節約ヲ旨トシ、毎年度ノ各省豫定經費要求書ヲ調製シ、前年度八月三十一日迄ニ之ヲ大藏大臣ニ送附ス(第八條)。大藏大臣ハ、歳入ノ景況ヲ調査シ、各省ノ豫定經費要求書ニ基キ歳

入歳出總豫算ヲ調製シ、總豫算ノ首ニハ歳計全體ニ關スル説明ヲ付シ(會計規則第十四條)之ヲ内閣ニ提出スルナリ。閣議決定スルトキハ之ヲ印刷ニ付シテ、帝國議會ニ提出スルモノトス。今之レヲ表記スレハ左ノ如シ。

調製者(決定者)	受送者	書名	期限
歳入事務管理廳	大藏大臣	歳入概算書	五月三十一日迄
各省大臣	同上	歳出概算書	同上
大藏大臣	内閣	歳入出總概算書	六月三十日迄
内閣(決定)			七月十五日迄
各省大臣	大藏大臣	各省豫定經費要求書	八月三十一日迄
大藏大臣	内閣	歳入歳出總豫算	十月頃迄
内閣(決定)			十一月頃迄

第二、實質的準備方法

豫算ノ實質的準備方法ニ關シ、原則トシテ掲クヘキモノニ箇アリ、即チ左ノ如シ、

(1) 豫算普遍主義

豫算前論 豫算準備論 準備ノ方法 準備ノ方法 豫算ノ普遍

- (2) 豫算正確主義
- (3) 豫算均衡主義

豫算ノ準備ヲシテ其宜シキヲ得セシメンカ爲ニハ、準備機關タル國務大臣、殊ニ大藏大臣ノ技量卓拔ナル可キハ論ヲ俟タス。又準備期間ノ長短其宜シキニ適ス可キモ論スルヲ要セスト雖モ、之ニ加フルニ、豫算ノ實質カ以上列記シタル要件ヲ能ク具備スルモノナラサル可カラズ、是レ余輩カ更ニ節ヲ新メテ説明セントスル所以ナリ。

第二節 豫算ノ普遍

第一〇〇 概説

豫算普遍主義トハ、豫算ノ收入支出全般ニ亘リテ、根本的ニ國家ニ屬スルモノト王室又ハ地方團體ニ屬スルモノトヲ區別シテ、彼此混同スルコトヲ避ケ、嚴格ニ其ノ間ニ畛域ヲ設クルコトヲ云フ。今日ニ於テハ、此ノ事タルヤ尋常一樣ノ事タルカ如キモ、之レヲ豫算ノ沿革史ニ徵スレハ、決シテ古代ヨリ行レタルモノニア

往古

テスシテ、寧ロ常ニ此ノ主義ニ反シタルヲ見ル。即チ古代封建ノ世ニ於テハ、王侯ハ其ノ領地收入、特權收入等ヨリ得タルモノヲ以テ王室ノ經費ニ充テ、其ノ剩餘ヲ以テ一般ノ國費ニ供シタルカ如キ、全ク宮中府中ノ區別ナクシテ、國家財政ノ畛域ヲ無視シタルモノト云ハサル可カラズ、而シテ現今ニ於テモ、獨逸帝國內ノ小國ニ於テハ、其ノ痕跡ヲ存スルモノ少カラズト云フ。

第二〇〇 國家豫算ト地方團體豫算トノ混同

現今ニ於テ、此豫算普遍主義ニ反スル著シキ實例ハ、國家豫算ト地方團體豫算トヲ混同シ、國家豫算中ニ、本來ノ性質上國家ノ權利義務ニ屬セサル事項ヲ挿入スル點ニアルナリ。元來國家事業ト地方團體ノ事業トハ大體ニ於テ區分アリ、然ルニ近代諸國ノ趨勢ハ、當然地方團體ニ屬スヘキ業務或ハ經費ヲ以テ、國家財政中ヨリ支辨セシメントスルニアリ、而シテ此ノ事タル、議會ノ侵害ヲ馴致セルコト多シト云ハサル可ラス（所謂分取主義ナルモノ）、彼ノ名ヲ地方費補助ニ籍リテ、妄リニ國庫ノ金ヲ以テ地方ノ事業ヲ成サシメントスルモノ、如キハ、最モ戒ム可キコトナラスヤ。

第三節 豫算算定法(其二)

第一、豫算算定法

豫算ヲ算出スル方法ハ、前述セル

(1) 豫算均衡主義

(2) 豫算正確主義

ノ二者ヲ必要トス。此二者ハ恰モ鳥ノ雙翼ノ如ク、彼此相補足掩護スルモノニシテ、一ヲ捨ツ、他ニ依ルコトヲ得ス。先ツ本節ニ於テ、豫算ノ均衡ヲ論シ、次節ニ於テ豫算ノ正確ニ及フ可シ。

第二、豫算收支ノ均衡

豫算ハ、其ノ全體ニ於テ收入支出平均ヲ得テ、一方ニ偏セサルコトヲ要ス。是レ箇人經濟ト異ル所ニシテ、箇人經濟ニ於テハ收入ノ支出ニ超過スルハ多々益佳ナリ、收支ノ權衡ヲ得テ、剩餘ヲ生セサルカ如キハ、決シテ稱スヘキコトニ非サルノミナラス、寧ロ非難スヘキナリ。之ニ反シテ、國家財政ニ於テハ、收入ノ總額カ大ニ

箇人經濟トノ差

二種ノ制度

支出ノ總額ニ超過スルカ如キハ、徒ニ人民ノ膏血ヲ絞ルモノトシテ擯斥セサル可カラス。況ンヤ施設スヘキ業務巨多ナルニモ關セス、袖手シテ事業ヲ經營セス爲ニ過多ノ剩餘ヲ見ルカ如キニ至リテハ、爲政家ノ無能ヲ大ニ叱斥セサル可ラス。然レトモ、又他ノ一方ニ偏シテ、支出カ常ニ收入ヲ超過スルカ如キハ、コレ國家破産ノ源ニシテ最モ戒メサル可カラス。

斯クノ如ク收支ノ一方ニ偏倚スルハ、國家財政上、策ヲ得タルモノニアラスシテ、常ニ其ノ均衡ヲ得ルヲ以テ原則トスト雖モ、收入カ少シク支出ニ超過シテ少額ノ剩餘ヲ見ルカ如キハ、決シテ批難スヘキニアラサルノミナラス、寧ロ稱揚スヘキナリ。今諸國ノ實蹟ニ付テ見ルニ、

(1) 純粹ニ收支均衡主義ヲ採ルモノニハ、獨逸諸邦殊ニ孛漏西及ヒ瑞典ノ如キアリ。

(2) 少額ノ收入過剩主義ヲ採ルモノハ、英米佛伊及ヒ白耳義ノ諸國トス。但シ米國ノ如キハ、豫算上ニ於テ以上ノ主義ヲ採ルニ關セス、決算ニ於テハ更ニ巨額ノ過剩ヲ見ルヲ常トシ、佛國ノ如キハ、決算ニ至リ寧ロ收入ノ不足ヲ見ルニ

至ルコト少カラスト云フ。
第三、皮相的豫算ノ均衡

前述ノ如ク、豫算ノ均衡ハ豫算算定上ノ必要條件ナリ。然レトモ、之レト同時ニ、皮相的豫算收支均衡ノ極メテ危険ニシテ悪ム可キモノナルコトヲ知ラサル可カラス。然ルニ古來庸劣ナル財政家局ニ當ルトキハ、多ク此ノ弊害ニ陥リテ、或ハ自家ノ過失ヲ陰掩センカタメ、或ハ自己ノ功名ヲ成サンカ爲メニ、有意無意ニ此ノ手段ニ出ツルモノ少カラサルヲ見ル。一國ニシテ若シ一度此ノ惡習ニ感染センカ、財政ノ健康ハ忽ニシテ破レン、最モ戒メサル可カラス。現今ニ於テモ、彼ノ埃及、土耳其等ノ貧弱國ニ於テハ、財政上ノ弱點ヲ蔽ヒ、外國ノ信用ヲ買ハンカ爲メニ、往々此ノ手段ヲ用フルニ見ル。

第四、豫算評價ノ高低

豫算ハ斯クノ如ク全體ニ於テ均衡ヲ得サル可カラストセハ、其ノ各個ノ收入支出ヲ評價シテ豫算ヲ準備スルニ當リ、其ノ評價ヲ寧ロ高ク見積ル可キヤ、果タ低ク見積ルヘキヤハ頗ル考慮スヘキ問題ニ屬ス。

(1) 經費豫算ノ評價ハ多クニ過ク可カラス。若シ豫算ヲ過剩ニ見積ルトキハ官吏ハ其ノ全額ヲ消費シ去ルノ傾向アルヲ免レス。安リニ豫算ニ餘裕アラ

シムルカ如キハ、是レ浪費ヲ教フルモノナリ。

(2) 經費豫算ノ評價ハ少クニ過ク可カラス。若シ初メヨリ強ヒテ豫算ヲ少額ニ見積ルトキハ、豫算施行ノ際ニ當リ、豫備費使用ノ請求續起シテ、常ニ金庫ノ空乏ヲ訴フルニ至ラシムルノミナラス、追加豫算發生シテ財政計劃ノ統一ヲ破ルニ至ルヘシ。

(3) 收入豫算ノ評價ハ多クニ失ス可カラス。是レ財政家ノ常ニ陥ル所ノ過失ニシテ、殊ニ間稅收入ニ於テ其ノ著シキヲ見ル。蓋シ何レノ國ト雖モ、人民カ租稅ノ増加ヲ請求スルカ如キハ夢想スル能ハサル所ニシテ、常ニ負擔輕減ヲ呼號シツ、アルノ状態ニアルカ故ニ、財政者ハ、常ニ直接稅ノ負擔ヲ輕減スル代リニ一方ニ間稅ノ評價ヲ故意ニ巨額ニシ、以テ豫算表上ニオケル收支ノ均衡ヲ維持セントスルモノ、比々皆之レナリ。是レ一國財政ノ基礎ヲ固フスルニ付テ、最モ戒メサル可ラス。

(4) 收入豫算ノ秤價ハ少キニ失ス可カラズ。是レ前者ニオケルカ如キ弊害ヲ見スト雖モ之ヲ極度ニ濫用スレハ豫算一部ノ隱蔽ト同様ナル結果ヲ生スヘキナリ。

要之豫算ノ見積リハ經費收入共ニ多キニスキ又ハ少キニ失スルヲ忌ム然レトモ收入豫算ニ於テハ寧ロ其ノ秤價ヲ少シ宛小ナラシムルヲ要ス何トナレハ天災地變又ハ社會ノ景況等不時ノ出來事ニ由リテ收入ノ豫算カ豫想ニ違セサル場合決シテ少カラサレハナリ茲ニ於テカ次ノ二原則ヲ生ス

(1) 經費ノ見積ハ過不及ナキヲ要ス。

(2) 收入ノ見積ハ寧ロ控ヘ目ニ秤價スルコトヲ要ス。

而シテ經費カ豫算以外ニ多額ニ達シタル場合ノ如キハ豫備費ノ設備アリテ少シモ不便ヲ感セサルナリ。

第四節 豫算算定法(其二)

第一〇〇豫算ノ正確

二箇ノ原則

豫算ノ算定カ正確ナルヲ要スルヤ論ナキ所ニシテ若シ豫算ノ基礎正確ヲ欠クトキハ豫算ハ全ク其ノ效用ヲ有セス何トナレハ豫算ハ財政ノ豫測ニシテ收支決算ノ根底ヲナスモノナレハナリ。

此ノ豫算ノ正確ヲ期センカ爲メニハ諸國ニ於テ各種秤價法ヲ有ス今其ノ大略ヲ下ニ記スヘシ。

第二〇〇諸國ノ制度

豫算ノ秤價法ハ國ニヨリテ各其慣習ヲ異ニスト雖モ之ヲ大別スルトキハ左ノ三種トナルヘシ。

(1) 純客觀秤價法。即チ純粹ニ事實ニ由リテノミ見積リヲ立ツルモノ

(2) 主客觀秤價法。即チ主トシテ事實ニ由リテ見積リヲ立ツルモ其ノ間ニ主觀的推定ノ意見ヲ容ルモノ

(3) 主主觀秤價法。即チ客觀的事實ヲ參考トスルモ毫モ之レニ束縛セラレハコトナク大藏大臣並ニ財務當局者ノ意見ニヨリテ立案シ過去及ヒ現在ノ事實ハ之レカ考量ノ材料タルニスキサレモノ。

佛國ノ如キハ曾テ第一ノ主義ヲ採リシモ、此ノ方法タルヤ全ク機械的ニシテ、變通ノ妙用ナキカ於ニ、漸次其ノ價ヲ損シ、唯歲出ノ或ル確定的性質ヲ有スル部分ニノミ採用セラル、ニ至レリ。

現今主トシテ用ヒラル、ハ第二及ヒ第三ノ主義ナリ。兩者ハ唯其ノ主トスル所ヲ異ニスルノミニシテ、言ハ、程度ノ差異ニスキス。獨逸ノ如キハ前者ニ依リ、英國ノ如キハ後者ニ依ルカ如シ。此ノ二者ハ、之レヲ第一ノ方法ニ比較スレハ進歩シタルモノナルコト言ヲ俟タス、彼ノ佛國ノ學者スツールム氏カ言ヘル如ク、嗣眼カ豫算秤價ノ骨髓ナリトセハ、(同氏著豫算論百五十六頁)機械的ノ算定カ事實ニ基ツケル考慮ニ讓ラサル可ラサルヤ知ル可シ。

但此兩者ノ優劣如何ト問ハ、吾人ハ一概ニ論定スルコト能ハス。豫算ノ大部分ニ付テハ固ヨリ客觀的秤價ヲ主トセサル可カラサルモ、彼ノ間稅ニ至リテハ、時ト場合ニ由リ何レカ適中ス可キヤハ茲ニ論定スルコトヲ得ス。畢竟大藏大臣其人ノ技量ニ由ルノ外ナシ。唯第二ノ主義ハ大ナル危險ヲ冒サ、ルコトヲ得ルノミ。

豫算ヲ以テ、純主觀秤價法ニ由ル可シトハ、理論上ハ兎ニ角事實上アリ得可ラサル説ナリ。何トナレハ、豫算ハ國家最大ノ主要事務ニシテ机上ノ空論ヲ容ル、ノ餘地ナケレハナリ。

第三、佛蘭西方式(自働方式)

(1) 方法、千八百十五年以來行ハル、所ニシテ、主トシテ歲入、ハ見積リニ供セラル。其ノ方法ハ全然前年度計算ノ結果ヲ採用シ更ニ推測ヲ加ヘサルモノナリ。

(2) 欠點、トシテ舉ク可キモノ、左ノ如シ。

(イ) 其ノ働キタルヤ全ク機械的ニシテ、收入ニ對スル變遷ノ狀態ヲ知ラサルコト。

(ロ) 其ノ主眼トスル所、常ニ過去ニアリテ將來ノ見積ヲ全ク眼中ニオカサルコト。

(ハ) 殊ニ此方式ノ短所ハ、間稅ノ如キ收入増加ノ急激ナルモノニ於テ著シ。佛國ノ第二帝政時代ニ於テハ、之レカ爲ニ常ニ四千万乃至五千万フランノ

收入過剩ヲ見ルニ至レリト云フ。而シテ此ノ過多ノ剩餘カ誘致スル弊害ハ、既ニ屢論セル所ナリ。

(3) 然レトモ此ノ方法ト雖モ多少ノ長所ナキニアラス。

(イ) 豫算ノ見積リカ、數字的材料ニ由リテ確實ニ限制セラル、カ故ニ、寧ロ用心ニ過キ迂遠ナリトノ譏アルモ、輕佻危險ノ虞少シ。

(ロ) 財政ノ現在ト將來トヲ相接近連鎖セシムルヲ得ルコト。

(ハ) 豫算編製ノ手續簡單ナルコト。

要之、此ノ方式ハ變通ノ道ニ欠クルヲ以テ、其ノ利ハ以テ其ノ害ヲ蔽フニ足ラス、第四、佛蘭西方式(其二)

斯クノ如ク、自動方式ハ豫算評價ノ良法ニアラサルヲ以テ茲ニ所謂遞増方式(英、*stème des Majorations* ヲ案出スルニ至レリ。

(1) 由來、此方法ハ、佛國第二帝政ノ時代ニ採用シタル所ニシテ、第二帝政ノ廢滅ニ歸スル迄行ハレ、其ノ後久シク行ハレサリシカ、千八百八十年代ヨリ再ヒ採用スル所トナリ以テ今日ニ及フ。

(2) 方法、前年度ノ計算ノ結果ニ基礎ヲオクコト、自動方式ニ同シト雖モ、之ニ加フルニ商業貿易ノ膨脹及ヒ一般社會上ノ原因ヲ考量シテ増減スル所アルモノナリ。

レオン・セイ方式 (M. Leon Say)

(1) 由來、千八百七十年後、第三共和政府ハ遞増法ヲ廢シテ、之ニ代ルニ從來ノ自動式ヲ以テセシカ。佛國ノ豫算編製ハ、人ノ知ルカ如ク頗ル長期ヲ費シ、議定ニモ多クノ月日ヲ費スカタメニ。自動方式ヲ採用シタル結果トシテ經濟社會急激ノ進歩ト共ニ年々巨額ノ剩餘ヲ國庫ニ見ルニ至リ。議會ハ之ニ對シ、不健全ナル追加要求案ヲ提出シテ止マス。茲ニ於テカ、千八百八十二年、大藏大臣レオン・セイ氏ハ一種ノ考案ヲ實施スルニ至レリ。

(2) 方法、氏ハ自動方式ノ機械的ナルヲ斥ケタルト同時ニ、遞増方式ノ動モスレハ客觀的位置ヲ離ル、ニ鑑ミル所アリ、主トシテ基礎ヲ客觀的事實ニ置キ最近五ヶ年間ノ平均計算ヲ根據トシ、之レニ加フルニ將來ニ於テ豫算施行ノ爲ニ生ス可キ變動ヲ加味セントスルニアリ。

(3) 結果。然ルニ、惜ヒ哉此ノ好方案モ、事實上良結果ヲ生スルコト能ハス。千八百八十三年度ノ豫算ハ、六千六百六十万フランノ欠損ヲ生スルニ至リ、僅カニ一年間採用スルノミニテ止ミス。

第五、獨逸方式。

以上ノ如ク、佛蘭西ニ於ケル前年度計算ノ結果ヲ利用スル方法ノ欠點アルヲ見ルヨリシテ、各國ノ財政家ハ皆此ノ欠點ヲ補ハンコトニ苦心セリ。獨逸ニ於テ採用セラレシモノハ、其一ナリ。

(1) 其ノ基礎トシテ、通常ノ場合ニハ三年、平均ノ計算ヲ採レリ。其ノ趣旨ハ自働式遞増式ノ如ク基礎ヲ一ケ年ニ採ルハ不確實ノ虞レアリ。又五年、七年平均トイフ如ク時期長キニ失スレハ、經濟社會ノ進歩ト遠カルノ虞レアリト云フナリ。

(2) 但シ、三年ノ平均數ニ由テ豫算變動ノ趨勢ヲ容易ニ推知シ難キカ如キ特別的變動豫算ノ編製ニハ、五ケ年平均數ヲ以テ基礎トスルコト。

(3) 以上ノ材料ヲ基礎トシ、之ニ依リテ將來ノ趨勢ヲ推シテ豫算金額ヲ定ムル

コト。

(4) 變動ヲ生スルコト少キ固定豫算科目ニハ推測ヲ加ヘサルコト。學者之ヲ稱シテ推測方式(Die Genetische Methode)ト云フ。一例ヲアクシハ左ノ如シ

字漏西山林行政第二項第三十二、三目(千八百九十七年度)

費目	千八百九十三年度	千八百九十四年度	千八百九十五年	平均數	千八百九十七年度豫算
材木賣却費等	一一七九、七三〇	一八七、一三三	一九一、九七六	一八六、二八〇	一八五、〇〇〇
印刷費	六六、一五三	五九、七五九	六一、五三三	六〇、九九七	六四、九〇〇

第六、我國ノ制度。

收入豫算ニ付テハ一定ノ規定ナシト雖モ、大體ニ於テ獨逸ノ方式ニ基キ、通常三年間ノ平均數ヲ本トシ、之レニ多少ノ手加減ヲ加フルモノ、如シ。

經費豫算ニ付テハ豫定經費算出概則(明治二十二年ヲ以テ定メラル、大略左ノ如

- (1) 經費中給與ニ屬スルモノハ、一人當リノ給額ヨリ積算シ、定員アル者ハ定員ヲ限度トシ、定員ナキ者ハ前年度四月一日ノ現員ヲ標準トス。
 - (2) 經費中物件ニ屬スルモノハ、一箇當リノ費用ヨリ積算シ、規定ノ箇數アル者ハ規定ノ箇數ヲ限度トシ、規定ノ箇數ナキモノハ前々年度以前三箇年度間ニ實際使用ニ供シタル箇數ノ平均ヲ標準トス。
 - (3) 國債償還ノ金額(定期アルモノヲ除ク)ハ、財政ノ都合ニ依リ、其利子及ヒ手数料ヲ定規ニ據リテ之ヲ豫算スルコト。
 - (4) 法律命令契約ニ據リ支出スヘキ總金額ノ定マリタルモノハ、其總金額ヲ以テ豫算額トスルコト。
 - (5) 前各條ニ據ル可カラサル經費ハ、最モ適實ノ方法ヲ以テ豫算シ、其計算ノ基ク所ヲ示スコト。
- 此等ノ規定ハ、ヨク精密ニ定メタルモ尙多少改正ヲ施スヘキ點ナキニシモアラサルヘシ。

第七〇。豫算金額ノ單位。

尙茲ニ附加シテ一言スヘキハ、豫算ノ金額ヲ見積ルニハ、宜シク單位ヲ以テ單位トシ以テ見ル者ノ便利ヲ計ル可キコトナリ。何トナレハ、設令詳細ニ計算スルモ到底豫算ト現計トハ一致ス可カラサレハナリ。但シ不變的性質ヲ有スル豫算科目ニ至リテハ之ヲ例外トス可キヤ勿論ナリ。

第二部 豫算形式論

第一章 總論

第一節 豫算形式ノ原則

第一〇。總說。

豫算ハ、其ノ實質形式共ニ宜シキニ適ハサル可ラサルヤ論ナシ。然リ而シテ、其ノ實質ニ付テハ既ニ前述セルカ如ク豫算ハ(1)普遍ニシテ(2)正確ニ且收支ノ均衡ヲ得サル可カラス。然ラハ豫算ノ形式ニ付テハ、如何ノ要件ヲ必要トスルヤト云

フニ。

七二

- (1) 體裁ノ明了
- (2) 體裁ノ簡單
- (3) 同一ノ形式
- (4) 事項ノ集中

ノ如キハ、其ノ最ナルモノナリ、以下順ヲ遂フテ簡單ニ記述スヘシ。
第二體裁ノ明了。

豫算ハ一國財政ノ總覽ニシテ、其ノ事項頗ル複雑ナルカ故ニ、其體裁ノ最モ明白ニシテ、一目瞭然タルヲ要スルコト論ナシ、此ノ目的ヲ達センカ爲ニ、何レノ國ト雖モ、種々ノ形式分類ヲ用ヒサルモノナシ、例之、豫算ヲ經常臨時ニ分ツカ如キ、又支出豫算ニツキ各省ヲ本位トシテ分ツカ如キ、細分スルニ款若クハ項ヲ以テスルカ如キ、是レナリ。

吾人カ現行我國ノ豫算ニ付テ望ム所ハ、更ニ一步ヲ進メテ、歲出ヲ既定部ト自由決議ニ任スル部分トニ分ツニアリ、斯クノ如クスルトキハ、豫算ノ議決ヲ經可キ

部分一目瞭然トナリテ、豫算議定ノ場合ニ便益スル所蓋シ尠少ナラサル可キナリ。

第三體裁ノ簡單

豫算ハ左ナキタニ浩濬ノモノナレハ、成ル可ク煩ヲ避ケテ簡ニ就カシムルコトヲ要ス、之ヲ非常ニ大部ナルモノトシ、人ヲシテ其煩ハシキニ堪ヘサラシムルカ如キハ、最モ拙ト云ハサル可ラス、彼ノ佛國ノ豫算ノ如ク、紙數々千ヲ超ヘ且其内容頗ル錯雜ヲ極ムルモノ、如キハ、以テ範トスルニ足ラサルナリ。

第四同一ノ形式

各省ニ分割セル豫算款項ノ體裁ハ、成ル可ク同一ノ形式ヲ採ルヲ以テ便ナリトス、若シ必要ナラサルニ、妄リニ省毎ニ全ク其ノ體裁ヲ更ヘ、參照比較ニ便ナラサラシムルカ如キハ、最モ戒メサル可カラス。

然リト雖モ、他ノ極端ニ走り、事物ノ活勢ニ通セス、強ヒテ不便ヲ忍ヒテ各同一ノ形式ニ適合セシメントスルカ如キハ、亦不可ナリト云フ可シ、要之、同一ノ形式ニ從フ可シトハ、大體ノ主義ヲ指示シタル迄ニシテ、繩墨ニ縛セラレタル不通ノ説

ヲ立ツルニハアラサルナリ。
第五事項ノ集中

豫算中同一若クハ類似ノ事項アリテ、之レヲ併合スルニ差支ナキ限リハ成ル可ク事項ノ集中ヲ計ル可シ。例之、我國ニ於テ豫備費ヲ一箇所ニ集中シテ、百万圓若クハ二百万圓ト云フカ如クニ定メタルハ、分割主義ヲ採ルモノニ比シテ優レルモノト云フ可シ。然レトモ、此ノ集中主義タルヤ未タ完全ニ應用セラレサルカ如シ。例之、機密費ノ如キハ其ノ最多額ヲ内閣ニ集中シテ、他ニハ必要ニ應ジテ少額ノ費用ヲ分配シオクモ可ナルヘク、殊ニ修繕費若クハ休職給ノ如キハ集中主義ヲ採用スルノ急務ナルヲ見ル。蓋シ斯クノ如クスルトキハ、當ニ豫算ノ體裁上可ナルノミナラス、併セテ冗費ヲ節スルコトヲ得レハナリ。

我國ニテ
改良スヘキ
點

第二節 豫算ノ制度

豫算ノ制度ハ、國ニ依リテ其編製方法ニ種々アリ。今吾人ハ本節ニ於テ大體上各國ノ豫算制度ノ異ル所ヲ示シ、更ニ章ヲ改メテ我國ニ於ケル豫算編製ノ種類ヲ

説カントス。

第一、一年豫算制ト數年豫算制(附十二分一豫算制)

是レ會計年度ニ由ル區分ニシテ、會計年度カ一年間ナルトキハ其ノ豫算ヲ稱シテ一年豫算ト云ヒ、會計年度カ數年ニ亘ルトキハ、其ノ豫算ヲ稱シテ數年豫算ト云フ。而シテ現今文明國一般ニ採用スルハ前者ニシテ、後者ハ唯獨逸帝國中ノ小邦ニ於テ之ヲ見ルノミ。

茲ニ附加シテ説明スヘキハ、彼ノ佛國ニ於テ行ハル、十二分一假豫算制ナリ。十二分一假豫算制トハ、乃チ前會計年度ノ終リニ於テ、尙ホ本年度ノ豫算ヲ議會カ議了セサル場合ニ於テ、一ヶ月丈ケニ即チ一年ノ丈ケ未タ議了セサル豫算ヲ執行スルヲ許スコトヲ云フ。故ニ此豫算方法ニ由レハ、數年豫算制ニ反シ、一年ヨリモ短キ期間ノ豫算ヲ執行スルコト、ナルナリ。

第二、總額豫算制ト分類的豫算制

總額豫算制トハ、古代ニ於テ稀ニ行ハレタル所ニシテ、豫算ヲ定ムルニ單ニ其ノ總額ヲ示スノミニシテ、其ノ内譯ヲ示サ、ルモノヲ云フ。此ノ粗雜ナル方法ハ、唯

壓制政治家ノ武器トシテ、一時採用シタルニ止マリ、永久ニ行ハレシニアラス。一般ニ豫算ト云ヘハ、其ノ分類ノ粗密煩簡若クハ體裁ノ善惡ハ別トシテ、必ラス分類、類的豫算ヲ指スコト、ナレリ蓋シ斯ノ如クナラサレハ、豫算ノ財政計劃タル效用ヲ發揮スルニ由ナケレハナリ。太古ニハ希臘、近古ニハ拿破第一世ノ如キ此ノ制ヲ採レリ。

第三、概計豫算制ト純計豫算制

概計豫算制トハ、一方ニ國家ノ總歲出ヲ計上シ、他ノ一方ニハ國家ノ總歲入ヲ計上シテ、豫算ヲ編製スル制度ニシテ、其ノ歲入ハ即チ國家全體ノ收入ヲ包含シ、之カ爲ニ要シタル作業費、徵稅費等ヲ控除スルコトナク、一切ノ收支ヲ其儘ニ計算セルモノナリ。反之純計豫算制トハ差引勘定セル殘額ノミヲ計上セル豫算制度ナリ。換言スレハ、其ノ收入ニ於テハ作業費、徵稅費等ヲ控除シタル殘額即チ純收入ノミヲ計上シ、又其ノ支出ニ取テモ之ヨリ生シタル收入額ヲ控除シタル殘額即チ純支出ノミヲ計上シタルモノナリ。

沿革上ノ觀察

今之ヲ沿革上ヨリ觀察スルトキハ、往古ハ即チ純計豫算制ヲ採リ漸次概計豫算

制ニ變シテ、遂ニ今日ノ如ク概計豫算制ヲ以テ、殆ント文明國一般ノ通則トスルニ至リシモノナリ。蓋シ往古ニ於テ收入ノ國庫ニ納附セラル、ヤ先ツ地方ノ行政費ハ其ノ總收入ヨリシテ各自ノ徵稅費、行政費等ヲ引キ去リテ、其ノ剩餘ヲ以テ中央政府ニ送附シテ國庫ニ納ムルノ有様ナリキ。是レ中央ト地方ト今日ノ如ク十分ナル連絡ノ存セサル當時ニ於テ、止ムヲ得サル事ナリシナルヘシ。然ルニ、其後政治上、國民的統一ノ風潮ハ、財政上ニモ國庫統一ノ主義ヲ胚胎スルニ及ヒ、凡テノ收入ハ一度ハ必ラス國庫ニ集中セラレ、更ニ國庫ヨリシテ全國ニ對スル支出ヲナスコト、ナリ、乃チ茲ニ純計豫算制カ變シテ概計豫算制ト變スルニ至リシモノナリ。

諸國ノ制度

之ヲ諸國ノ歴史ニ徵スルニ、佛國ニ於テハ千八百十八年迄、普魯國ニ於テハ千八百五十年迄、英國ニ於テハ千八百五十八年迄、バイエルン國ニ於テハ千八百六十八年迄、純計豫算制ニ依リシモ爾後之ヲ改正スルコト、ナリ、其他奧太利、伊太利並ニ獨逸諸聯邦等ヨリテ純計豫算制ニヨル、皆之レヲ採用スルニ至リ、唯瓦敦堡、李遜、曷仙等ノ小國ニ於テ、尙舊時ノ慣習ヲ墨守スルヲ見ルナリ。

我國ニ於テハ、概計豫算制ヲ採ルコトハ、會計法ノ明ニ規定スル所ナリ。會計法第二條ニ曰ク。

租税及ヒ其ノ他一切ノ收納ヲ歳入トシ、一切ノ經費ヲ歳出トシ、歳入歳出ハ總豫算ニ編入スヘシ。

同法第十二條第二項ニ曰ク

國務大臣ハ、其ノ所管ニ屬スル收入ヲ國庫ニ納ムヘシ、直ニ之ヲ使用スルコトヲ得ス。

純計豫算
ノ排斥
理由

斯クノ如ク、純計豫算制ノ現今排斥セラル、所以ハ主トシテ(1)豫算ハ統一及通觀ヲ妨クルコト、(2)並ニ豫算ニ表ハル、金額少ナキカ爲ニ財政ノ膨脹ヲ隱蔽スルハ虞アルコト等ニ存ス。

第二章 本邦豫算ノ形式

第一節 總豫算

第一〇〇〇 總豫算

其意義

總豫算 (Das Hauptetat, Das Generelle Budget) トハ、本來部分的ノ豫算ニ對スル語ニシテ、又特別豫算若クハ追加豫算ニ對シテモ稱ヘラル、即チ系統的ニ綜合セラレ、常ニ議會協賛ノ標的トナル、主的豫算ナリ、其ノ綜合的ナルハ部分的ノ各省豫算ト異ル點ニシテ、主的地位ヲ占ムルハ特別豫算ト異ル所ナリ、又常ニ議會開會ノ始メニ提出セラレテ協賛ノ標的トナルハ、追加豫算ト異ル點ナリトス。

斯クノ如ク總豫算ハ殆ント豫算ノ全部ヲ蔽ヒ最モ重要ナルモノナルカ故ニ、通常ニ豫算ト云ヘハ總豫算ヲ指スコトニ解セラル、場合多シ、彼ノ學者カ總豫算ヲ以テ、或ハ凡テハ豫算ハ豫算 (Etat zu den allen übrigen Etats) ト云ヒ、或ハ全財政ハ反射鏡 (Spiegelbild der gesamten Finanzwirtschaft) ナリト云フカ如キヲ以テモ知ル可シ。

近世ノ傾向

蓋シ、近世ノ豫算統一主義ハ、益豫算ヲシテ一處ニ集中セシメ、以テ世人ヲシテ一國財政ノ全體ヲ通觀セシムルニ便ナルノ傾向ニ進メリ、從テ、總豫算ハ今ヤ殆ント凡テノ豫算ヲ網羅スルカ如キ有様ナリ、然レトモ、沿革及ヒ便宜上、尙ホ僅少ノ例外ヲ存セリ、即チ、特別豫算及ヒ追加豫算ノ如シ、而シテ將來ニ於テハ、此等ノ例

外ハ益其範圍ヲ減縮セントスルモノ、如シ。
第二、各省豫定經費要求書

茲ニ附加シテ説クハ獨逸學者ノ所謂部分豫算 (Teilbudget) 是レナリ。部分豫算ハ、我國ニ於テハ即チ各省豫定經費要求書ナルモノニシテ、之ヲ完成豫算ノ一種類ト看做サス。單ニ豫算編製ノ手續トシテ、各省大臣ノ要求セル文書ニスキス。從テ總豫算ノ議會ニ提出セラル、場合ニモ、各省豫定經費要求書ハ、單ニ添附文書トシテ附加セラル、ニ過キササルナリ。

第二節 特別會計

第一、其意義

特別會計或ハ特別豫算 (Das Neben Etat, Das Specielle Budget) トハ、總豫算ニ對スル語ニシテ、國家カ特殊ノ經營ヲナスノ必要ニ因リ、特別ノ經濟ヲナスカ爲ニ、一般會計(總豫算)ヨリ分離シテ收支ヲ計上スル豫算ノ謂ナリ。

特別會計ハ、斯クノ如ク國家カ特殊ノ經營ヲナスノ必要ニ迫ラレテ、一般會計ヨ

可設ハ不
可ナリ

リ分離シテナス所ノモノナレハ、漫リニ之レヲ設定スルハ不可ナリ。若シ妄リニ之レカ設定ヲ許サハ、豫算統一ノ主義ハ益其力ヲ失フモノト云フヘシ。

第二、其沿革

往古ニ於テハ、特別會計ノ制度ハ上述セル純計豫算ノ制度ト相並ヒテ盛ンニ行ハレタリ。蓋シ當時ニ於テハ、財政ノ統一主義未タ行ハル、ニ至ラス。新タナル財源ヲ起スハ、常ニ或ル新目的ノタメニ提供セラル、ヲ常トセリ。斯クノ如クニシテ無數ノ特別會計ハ設定セラレ、而シテ各特別會計ニ剩餘アルトキハ中央金庫ニ納附スルコト、セリ。

要之、當時ニ於テハ、特別會計ノ制ハ純計豫算制ト相提携シテ財政上ノ一原則タリキ。然ルニ其後豫算統一ノ主義カ漸ク認めラル、ニ及ヒ、純計豫算制カ其光ヲ失ヒタルカ如クニ、特別會計ノ制度モ漸次其範圍ヲ減縮スルニ至レリ。然レトモ、其現狀タルヤ純計豫算制カ殆ント文明國中ニ消滅セルニ反シ、尙何レノ國ト雖モ多少ノ特別會計制度ヲ有セサルモノナシ。是レ特殊ノ事業ニ於テハ、一般會計ヨリモ却テ便利ナルモノアレハナリ。

第三〇其場合

特別會計ノ存立ヲ許容スヘキ範圍ハ、左ノ如シ。

- (1) 沿革的ノ理由。 既ニ久シク特別會計トシテ取扱ヒ來レルモノヲ一旦廢止シテ、一般會計ニ組入ル、コト、セハ、却テ比較参照等ニ不便ナリトスル場合、然レトモ斯クノ如キ事情アルノミニテ、他ノ必要ナキ場合ニハ、成ルヘク勇斷ヲ以テ之ヲ廢止スルニ力メサル可ラス。
- (2) 政治上ノ理由。 新タナル事業ニシテ、政治上紛争ノ原因トナルノ虞レアル場合、斯クノ如キ場合ニハ、一般會計ヨリ分離シテ特殊ノ計算ヲ有セシムルヲ便利トス。
- (3) 財政上ノ理由。 即チ償金特別會計又ハ各種公債特別會計等ノ如ク、財政上一定ノ目的ヲ有シ、此ノ目的以外ニ使用スルヲ嚴禁スヘキ場合。
- (4) 作業上ノ理由。 是レ其ノ最モ普通ナルモノニシテ官設鐵道特別會計ノ如キハ其ノ顯著ナルモノナリ。蓋シ、諸般ノ作業ハ經濟的ナラサル可ラス、又其ノ永久ニ亘ル施設ノ安全ヲ計ラサル可ラス、而シテ此ノ目的ニ應スルニハ、

特別會計ノ缺點

特別會計ノ制度ニ由リ、獨立的ノ地位ヲ有スルヲ必要トスルナリ。

然リト雖モ、特別會計ナルモノハ(1)本來ノ性質上豫算ノ通觀ト統一ヲ破ルモノタルノミナラス、(2)不知々々ノ間ニ豫算ヲ膨脹セシメ、シカモ議會ノ監視ハ之レニ寛大ナルカ如キ缺點アリ、(3)又特別會計ヲ嚴格ニ應用スルトキハ、國家ニ非常ノ事變アリ兵亂凶荒等大ニ費用ノ必要ヲ感スル場合ニ於テモ、之レカ流用ヲ許サスシテ却テ不急ノ工事ニ充ツルカ如キコトナシトセス。故ニ斯クノ如キ場合ニ於テハ、應急ノ規定ヲナスノ要アルヘシ。例之、日露戰爭ノ爲メニ政府ニ於テ臨時事件費支辨ニ關スル法律案ヲ第二十一回議會ニ提出シタルカ如キハ、其ノ一例トス。同法第一條ニ曰ク、

臨時事件費支辨ノ爲、政府ハ、一時借入金ヲ爲シ、國庫債券ヲ發行シ特別會計ニ屬スル資金ヲ繰替使用シ、及ヒ公債ヲ募集スルコトヲ得。

第四〇我國ノ制度

會計法第二條ハ、既ニ述タル如ク、一切ノ收納ヲ歲入トシ一切ノ經費ヲ歲出トシ、歲入歲出ハ總豫算ニ編入スヘキコトヲ規定スト雖モ、同法第三十條ニ於テ、特別

ノ例外規定ヲ設ケタリ。曰ク

特別ノ須要ニ因リ、本法ニ準據シ難キモノアルトキハ、特別會計ヲ設置スルコトヲ得。

特別會計ヲ設置スルハ、法律ヲ以テ之ヲ定ムヘシ。

第二項ニ其ノ設置ヲ法律ヲ以テスヘシト規定セルハ、特別會計ハ例外ノ事柄ナレハ、其設置ヲ鄭重ニ取扱フノ趣旨ニ外ナラス。

現今我國ニ現存セル特別會計ハ、其ノ數五十二上レリ、其大要左ノ如シ。

(一) 内務省所管。

(1) 臺灣總督府 (2) 臺灣官設鐵道用品資金 (3) 臺灣鐵道建設及改良費 (4) 戶口調査費

(二) 大藏省所管。

(1) 造幣局 (2) 印刷局 (3) 煙草專賣局 (4) 大藏省預金利子 (5) 特別資金 (6) 貨幣整理資金 (7) 軍艦水雷艇補充資金 (8) 災害準備基金 (9) 教育基金

(三) 陸軍省所管。

(1) 東京砲兵工廠 (2) 大坂砲兵工廠 (3) 千住製絨所

(四) 文部省所管。

(1) 東京帝國大學 (2) 京都帝國大學 (3) 東京高等師範學校以下直轄諸學校其ノ數二十九 (4) 帝國圖書館

(五) 農商務省所管。

(1) 製鐵所 (2) 森林資金

(六) 逓信省所管。

(1) 官設鐵道 (2) 官設鐵道用品資金 (3) 電信燈臺用品製造所

惟フニ、此等ノ特別會計中、或ハ一般會計ニ編入スヘキモノアルヘク、或ハ數個ノモノヲ合併シテ一トナスヘキモノモアルヘシ、其箇々ニ對スル意見ノ如キハ、茲ニ之ヲ述フルコトヲ得ス。

第三節 追加豫算

第一、其意。

追加豫算 (Nachtragsetat) トハ、總豫算又ハ特別豫算編製後ニ於テ必要ヲ生シタル場合ニ、總豫算又ハ特別豫算ノ補充トシテ編製セラルル豫算ヲ云フ之ヲ以テ。

(1) 追加豫算ハ管ニ總豫算ニ對スルモノ、ミニアラシテ特別豫算即チ特別會計ニ對スルモノアリ。前者ヲ稱シテ總豫算追加ト云ヒ、後者ヲ稱シテ特別會計追加ト云フ。

(2) 追加豫算ハ、總豫算又ハ特別會計ノ編製後ニ於テ必要ヲ生シタル場合ニ編製スルモノナリ。故ニ多クノ場合ニ於テハ議會ニ提出スル時期モ、當該總豫算若クハ特別會計ヨリモ後ル、ヲ常トス。然レトモ、必スシモ凡テノ場合ニ於テ然リト云フニアラス。即チ其ノ提出ニ於テハ同時ナルコトハ往々是レアリ、但シ其ノ編製ノ時期ハ同時ナルコトヲ許サス。若シ斯クノ如キコトアリトセハ、妄リニ豫算ノ膨脹ヲ隱蔽セントスル手段ニ過キスシテ、之ヲ濫用セルモノナリト云ハサルヲ得ス。

(3) 追加豫算ハ總豫算若クハ特別會計ノ補充若クハ延長トシテ編成セラレタルモノナリ。是レ特別會計ト異ル所以ナリトス。

蓋シ特別會計ニ於テハ始メヨリ總豫算ト全ク分離スルノ必要アリテ、殊ニ分立セシメタルモノナリ。故ニ兩者ハ、其ノ素質ニ於テ異レリト云フヘシ。然ルニ追加豫算ニ於テハ始メヨリ總豫算ト分離スルノ必要アリテ分立セシメタルモノニアラスシテ、後ニ至リ止ムヲ得ス。總豫算ノ補充トシテ編製シタルモノナリ、故ニ兩者ハ、其ノ素質ニ於テ異ル所ナシ、從テ特別會計ノ如クニ豫算ヲ複雑ナラシムルモノニアラサルナリ。

第二、我國ノ制度。

會計法第二條ハ、豫算統一主義ヲ宣言シ、租稅及其ノ他一切ノ收納ヲ歲入トシ、一切ノ經費ヲ歲出トシ、歲入歲出ハ總豫算ニ編入スヘキコトヲ規定シ、第三十條ニ於テ、特別ノ需要ニ因リ本法ニ準據シ難キコトアル場合ニ於テ、特別會計ヲ設置スルコトヲ得ルヲ規定ス。而シテ追加豫算ハ極メテ必要ニシテ止ムヲ得サル場合ノ外、議會ニ提出スヘカラサルコトヲ規定セリ。同法第五條第二項ニ曰ク、必要避クヘカラサル經費、及法律又ハ契約ニ基ツク經費ニ不足ヲ生シタル場合ノ外、追加豫算ヲ提出スルコトヲ得ス。

而シテ編製及ヒ提出ノ形式ノ如キハ、當該總豫算又ハ特別會計ト異ル所ナシ。他
ナシ、追加豫算ノ性質ハ、補充若クハ延長ニ外ナラサレハナリ。
猶ホ追加豫算ノ提出ニ付テハ、豫算提出論ノ部ニ於テ特ニ論スル所アルヘキカ
故ニ、彼此參照スヘシ。

第四節 繼續費

第一、其意義

帝國憲法第六十八條ニ曰ク、

特別ノ須要ニ因リ、政府ハ豫メ年限ヲ定メ、繼續費トシテ帝國議會ノ協賛ヲ
求ムルコトヲ得

ト、即チ繼續費 (Fonds für forlaufende Ausgaben) トハ、特別ノ須要アル場合ニ於テ、毎
年度豫算ハ協賛ヲ經可キ原則ノ例外トシテ、豫メ年限ヲ定メ數年度ニ亘ル所要
金額ヲ其始メニ於テ協賛ヲ經テ、其年限内ハ事業ヲ繼續シ得ルモノナリ。故ニ一
般ノ豫算ヲ以テ一年豫算トセハ繼續費ハ則チ數年豫算ナリト云フ可シ。

第二、其場合

繼續費ヲ以テ支辨ス可キ場合ハ、官廳ノ新築、河川ノ修築、港灣ノ改築、砲臺ノ建築、
鐵道ノ改良、大學ノ創立等ノ如ク、大規模ノ工事又ハ創設ヲナスニ當リ、到底一箇
年内ニ結了セサル場合ニ於テ生スルモノナリ。蓋シ斯クノ如キ場合ニ於テ、帝國
議會ノ協賛ヲ經ルコト能ハサルカ爲メニ、當初ノ計劃ヲ中斷若クハ中止スルカ
如キコトアラハ、國家財政上非常ナル損失ニ歸スルノミナラス、斯カル大規模ノ
工事ニハ、又長期ニ亘ル契約ヲ箇人ト締結セサル可ラサルモ、豫メ繼續事業トナ
サスシテ毎年豫算ノ協賛ヲ經ルコトヲ要ストセハ、到底長期ニ亘ル契約ヲ締結
スルコト能ハサレハナリ。之ヲ以テ、憲法ハ豫メ繼續費ナル項ヲオキ、以テ此等ノ
弊害ヲ補ハントスルナリ。

繼續費ハ、斯クノ如ク一般豫算制度ノ例外規定タルカ故ニ、之カ設置ヲナサンニ
ハ十分ニ注意シテ、萬止ムヲ得サル場合ニ限ルヘシ。妄リニ之ヲ設置スルカ如キ
ハ、財政ノ屈伸力ヲ減殺スルモノトシテ大ニ慎ムヘキナリ。

第三、其性質

以上ヲ以テ繼續費ノ大體ヲ説明セルモ、尙足ラサルヲ恐レ更ニ其性質ヲ論究スヘシ。

(1) 繼續費ハ、總豫算、追加豫算、特別會計中ニ包含セラレ、

繼續費ハ、追加豫算又ハ特別會計ノ如クニ總豫算外ニ分立スルモノニアラスシテ、總豫算中ノ一部ヲ成スモノナリ。加之、追加豫算特別會計中ニモ之ヲ包含スルコトアリ。唯年度割ヲ定メタル場合ニ於テ、之ヲ改メサル以上ハ、更ニ協賛ヲ經ルノ要ナキノミ。

(2) 繼續費ハ、其性質上臨時經費ノ部ニ屬ス。

繼續費ハ、之ヲ綜合シテ考フレハ、數年ヲ以テ結了スヘキ事業ニ充ツルモノナリ。故ニ其ノ年限ハ、設令ヤ、長期ニ亘ルトスルモ、經常費タルノ性質ヲ有スルコト能ハサルナリ。

(3) 繼續費ハ、唯年限ト總額ヲ定ムルハ、ミニテハ、不可ナリ。

繼續費カ、豫メ其ノ年限ト總額トヲ定メテ協賛ヲ經ヘキモノタルヤ論ナシト雖モ、之レアラハ則チ足レリト云フ可カラズ、必ラス、年割額ヲ定メサル可

年割額ヲ定ムルノ必要

カラス。蓋シ年割額ノ定メナキハ、豫算ノ財政計劃タル性質ニ副ハサルノミナラス、實際上各省大臣ノ交迭若クハ無謀ナル所置ノタメニ、計劃未タ央ニシテ經費盡クルノ嘆ヲ發セシムルコトナシトセス。加之我會計法ニ付テ言ハ、第二十二條

數年ヲ期シテ竣功スヘキ工事製造、及其ノ他ノ事業ニシテ、繼續費トシテ總額ヲ定メタルモノハ、毎年度ノ仕拂殘額ヲ竣功年限マテ遞次繰越使用スルコトヲ得。

(4) 繼續費ハ、當初ニ於テ年度割ヲ定ムルハ、要ナシ。

當初繼續費ノ年限ト總額トヲ定メタル場合ニ於テ、併セテ其ノ年度割ヲ定ムルカ如キハ、從來我國ノ慣例トシタル所ナレトモ、善良ナル制度ニアラス、何トナレハ斯クノ如クスルモ到底當初ノ計劃通りニ遂行スルコトハ不可能ナルノミナラス、之カ爲メ却テ浪費ノ傾向ヲ生シ常ニ年度割ヲ費消シ盡スノ虞レアリ。且ツ又一方ニ於テハ繼續費ハ之ヲ公債ニ求ムルコト多キカ

故ニ、公債募集ニ際シテ其募集額ヲ豫知セシムルカ爲メ不便少カラサレハナリ。

(5) 繼續費ハ、毎年、次年度ノ年割額ヲ定ムルヲ良シトス。

議會解散ノ場合

此ノ方法ニ依ルトキハ、一方ニ於テ當初ニ年割額ヲ定ムルカ如キ迂愚ノ計ニ陥ルコトナク、又一方ニ於テ年限ト總額トノミヲ定メテ一切他ヲ顧ミサルカ如キ疎漏ノ譏ヲ免ル、コトヲ得可シ、而シテ能ク其時ノ狀況ニ應ジテ臨機ノ計劃ヲナスコトヲ得ヘシ、唯此ノ方法ニツキテ論者ノ反對スルハ、議會解散ノ場合ヲ奈何ト云フニアリ、然レトモ議會解散ノ如キハ變例ニシテ常例トナス可ラサルノミナラス、此ノ場合ニ於テモ前年度豫算施行ノ方法ノ存スルアリ、又以テ大ナル不便ナカルヘキナリ。

年割額全廢論

我政府ニ於テハ、從來當初ニ年度割ヲ定メタル慣例ヲ不便トシ、更ニ全ク年度割ノ羈絆ヲ脱却セントスルモノ、如シ、斯ノ如キハ、他ノ極端ニ出シモノニシテ本法ノ穩當ナルニ如カサルナリ。

第五節 豫備費

第一其意義

帝國憲法第六十九條ニ曰ク

避クヘカラサル豫算ノ不足ヲ補フ爲ニ、又ハ豫算ノ外ニ生シタル必要ノ費用ニ充ツル爲ニ、豫備費ヲ設クヘシ。

又會計法第七條ニ曰ク、

豫算中ニ設クヘキ豫備費ハ、左ノ二項ニ分ツ、

第一豫備金、

第二豫備金、

第一豫備金ハ、避クヘカラサル豫算ノ不足ヲ補フモノトス。

第二豫備金ハ、豫算外ニ生シタル必要ノ費用ニ充ツルモノトス。

由是觀之、豫備費(Reservefonds)ハ各豫算總豫算、追加豫算、特別會計中ニ存シテ、天災地變其他豫メ測知スヘカラサル出來事ニ對スル費用ヲ支辨センカ爲ニ設ケタルモ

其統一

ノナリ。是レ實ニ止ムヲ得サルモノニシテ、何レノ國ニテモ此制ヲ採ラサルハナシ
 第二、豫備費ノ統一及金額
 豫備費ハ、豫算統一主義ニ從ヒテ、成ル可ク一所ニ集中シテ設置スルヲ可トス。蓋
 シ斯クノ如クセスシテ各省ニ存置スルコト、セハ、勢ヒ各自其ノ不足ノ際ニ處
 スヘキ責任ヲ思ヒテ多額ヲ要求シ、從テ豫算ノ膨脹ヲ來セハナリ。故ニ豫備費ハ
 之ヲ一所ニ集中シ、必要ノアル度毎ニ各省大臣ヨリ請求シテ之ヲ支出ス可キモ
 ノナリ。我國ニ於テモ、亦此制度ヲ採レリ。

豫備金ハ、大藏大臣之ヲ管理ス(第十六條)

是レ會計規則ノ定ムル所タリ、

又豫備費ノ金額ハ、強テ多額ニ見積ルノ要ナシト雖モ、又強テ少額ニ限ルモ不可
 ナリ。蓋シ斯クノ如クスルモ、必要止ムヲ得サル場合ニハ、其他ノ方法ニ由リテ支
 出セサルヲ得サレハナリ。又議會ニテ之ヲ協賛スル場合ニモ然リ。要之、豫備費ハ
 從來ノ經驗ニ由リ適當ト認ムル額ヲ以テスルヲ可ナリトス。
 其他豫備金支出ニ關スル事項ノ如キハ、豫算施行論ニ至リテ説ク所アルヘシ。

金額ノ多

第三章 豫算ノ分科

第一節 總論

第一、豫算分科ノ必要

既ニ第一章ニ説ケルカ如ク、現今ノ豫算ノ形式ハ皆分類の豫算制即チ分科式
 (Filiation)ヲ採用スト雖モ、往時ニ於テハ往々總額の豫算制即チ唯金額ノミヲ示
 セル豫算ノ存立ヲ見タルコトアリ。之ヲ近クシテハ彼ノ拿破崙第一世ノ時ニ當
 リテハ、此總額の豫算制ニ由リ豫算ノ總計額ヲ國會ニ提出シ、國會ハ八億又ハ九
 億フランクヲ支給スルノ議ヲ決シ、而シテ政府ハ布告ヲ以テ之ヲ諸官省ニ配賦
 セリ。又同國ノ王政復古ノ初メニ於テモ、略々其法ヲ同フシ、一ノ簡單ナル表ヲ製
 シ、之ニ國債費、官省費ト其ノ總額ヲ示シ、以テ國會ニ提出セリ。然ルニ千八百十七
 年五月二十五日ノ條例ヲ以テ、此法ヲ改メ、各其ノ總額ヲ各科目ニ配分スヘキコ
 ト、ナセリト云フ。

佛國ニ於
 ル總額豫
 算

斯クノ如キ豫算ノ形式ハ、專制的ノ豪傑ノ出ルアリテ國會ノ權能ヲ無視シタル

場合ニ探ル所ナルカ、然ラスンハ古代人智ノ未タ進歩セサル未開ノ時代ニ存立スヘキモノナリ、豫算ヲ以テ財政ノ計劃トナシタル以上ハ、其ノ豫算ハ歳入出共ニ出來得ルタケ精密ニ分類シテ議會協贊ノ便益ト行政官遵守ノ徑路トヲ知ラシメ、併セテ天下ノ公衆ヲシテ國家財政ノ狀況如何ヲ知ラシムルハ、誠ニ緊要ノ事ニ屬ス。

第二、豫算分科ノ大別

(1) 歳入及歳出。

豫算ハ、何レノ國ニ於テモ、先ツ分チテ歳入及歳出トナサ、ルモノナシ。是レ總豫算、追加豫算、特別會計ヲ通シテ同シキ所ナリ、而シテ豫算ノ體裁トシテ歳入歳出ノ順序如何ハ第三節ニ於テ之ヲ説クヘシ。

(2) 經常及臨時部。

豫算ハ歳入歳出ニ大別シタル後、更ニ各部ヲ經常及ヒ臨時ニ分チテ、經常歳入、臨時歳入、經常歳出及ヒ臨時歳出トスルハ、現ニ我國ノ探ル所ナレトモ、諸國皆然ルニアラス。之ヲ大別スレハ、

(イ) 直接ニ歳入出ヲ、經常及臨時部ニ大別スルモノハ、ニハ、我國并ニ伊太利、露西亞等アリ、字漏西ノ歳出部モ、亦之ニ倣フ。

(ロ) 豫算ヲ三箇ニ大別シテ (1) 普通歳入 (2) 普通歳出 (3) 臨時豫算トセルモノニハ、佛國并ニ曷仙國ノ如キアリ。

(ハ) 歳入歳出ハ、二大部ヲ各數個ニ類別シ、其内ノ一款トシテ臨時支出若クハ臨時收入ヲ包含セシムルモノアリ、此ノ制度ヲ採ルモノ頗ル多シ、例之、英國ノ歳出ニ付テ見レハ、第一ニ國債其他ノ既定支出ヲ記載シ、次ニ陸海軍省、文治行政、司法行政、國民教育等所謂自由議決ノ行政費ヲ記載シ、最後ニ臨時ノ經費ヲ記載スルヲ見ルナリ。

而シテ、此ノ大別ヲ更ニ小分シテ、款項目等トナシ、立法科目ト行政科目トヲ設クルハ、各國皆同一ナリト雖モ、其ノ實質内容ハ、其國ノ狀態ニヨリテ分類スルモノニシテ、固ヨリ理論ヲ以テ一定スルコトヲ得サルナリ。

第二節 立法費目

第一〇總說

歳入歳出共ニ前節ノ大別ノ外ニ更ニ小分シテ款項トナスト雖モ其ノ重要ノ點ニ於テハ大ニ異レリ。歳入ノ部ニ於テ款項ニ分ツハ唯便宜上ノ分類ニシテ大ナル關係ヲ有スルモノニアラスト雖モ歳出ノ部ニ於テハ大ニ注意スヘキ點ナリトス。故ニ本節ニハ専ラ歳出ノ部ニ付テ説カントス。

第二〇縦切及ヒ横切

歳出ハ經常臨時共ニ先ツ之ヲ分チテ所管別トスルヲ常トス所謂縦切ナルモノ是レナリ而シテ其ノ所管ハ大體ニ於テ行政上ノ各省ヲ基礎トスト雖モ必スシモ其範圍ヲ同一ニセス。例之内閣帝國議會會計検査院行政裁判所ノ如キ行政組織ヨリ云フトキハ固ヨリ獨立シテ特別ナル地位ヲ保ツト雖モ豫算上ニ於テハ之レヲ大藏省所管トスルカ如シ。

此ノ所管別ハ更ニ分チテ款トス。款ハ分類モ亦縦切ナルヲ通例トス。例之外務省所管ヲ分チテ第一款外務本省第二款在外公館トシ陸軍省所管ヲ分チテ第一款陸軍本省第二款軍事費第三款憲兵費第四款靖國神社寄附金トシ司法省所管ヲ

所管別

項

分チテ第一款司法本省第二款裁判所第三款監獄費トスルカ如キコレナリ。此ノ款ハ更ニ小分セラレテ數個ノ項トナル。項ハ通例目的ヲ以テ分ツモノトス。例之俸給及諸給、應費、修繕費、死傷手当、賠償及訴訟費、旅費、雜給及諸給諸手当等トスルカ如キ是レナリ。此ノ分類法ヲ稱シテ横切ト云フ。其ノ横切ト云フ所以ハ例之俸給ニ付テ見レハ一省内ノ一局ト他局トノ區別ナク凡テ其目的ニ付テ綜合シテ一項ヲナスモノナレハ所管別ヲ以テ縦切トセハ目的別ハ恰モ地層ノ如キ觀ヲナセハナリ。

第三〇立法費目

以上款項ニ至ル迄ハ豫算ニ記載セラレタル分類ニシテ會計法第十二條ハ之ニ付テ規定シテ曰ク。

國務大臣ハ豫算ニ定メタル目的ノ外ニ定額ヲ使用シ又ハ各項ノ金額ヲ彼此流用スルコトヲ得ス。

ト故ニ此等ノ各款項ハ各獨立シテ他ト相干渉スルコトヲ得ス而シテ之カ爲ニ議會ハ各項ニ付テ其ノ増減ヲ議決スルモノナリ是レ立法費目ノ稱アル所以ナ

立法費目

リ、諸外國モ亦皆此ノ制度ヲ採ラサルモノナシ。
 學者或ハ立法費目ニ對シテ行政費目ナル名稱ヲ唱フルモノアリ、其ノ行政費目トハ、更ニ項ヲ分チテ行政上ノ便宜ノタメ、目若クハ節等トスルモノニシテ、勿論豫算ノ上ニ表ハレス、其添附文書タル豫定經費要求書ニ現ハル、モノナリ、此ノ行政費目ハ、專ラ行政上ノ便宜ノタメニ用ヒタル分類ナルヲ以テ、彼此流用スルハ固ヨリ妨クル所ニアラス。

第三節 豫算分科ニ關スル注意

第一款 分科ノ大小

第一〇其利害

分科ノ大小粗密ハ大ニ注意セサル可カラス。蓋シ分科粗大ニ失スルトキハ、彼此流用ノ範圍大ニシテ行政官ヲ檢束スルノ效力薄弱ニ、從テ弊害其間ニ生シ、不急無用ノ事ニ有用ノ財ヲ糜スルコトナシトセス、反之分科緻密ニ失スルトキハ、行政官ハ活動ノ餘地ナク、其結果行政ノ施設ニ伴フコト能ハサルノミナラス、行政

官ハ斯クノ如キ結果ヲ恐レテ勢ヒ豫算ヲ膨脹スルコトヲ免レサルナリ。
 要之、豫算分科ノ大小ハ、其事小ナルカ如クニシテ、豫算ノ伸縮并ニ活動ニ影響スルコト大ナリ、故ニ最モ注意シテ、其ノ中ヲ得ンコトヲ勉メサル可ラス。

第二〇我國ノ事例

我國ニ於テハ、一般會計ノミニテ款項ノ數殆ント百七八十款九百項ヲ有ス、而シテ之ニ對シテ其款ノ數ヲ増加スヘキ議論起リタルコト尠カラス、第十四第十五議會ニ現ハレタル建議案ノ如キ其一ナリ、曰ク

國家ノ歲計豫算ハ、費途ヲ明確ニシ、併セテ費金流用ノ緊縮ヲ期スルニ在リ、然ルニ從來ノ豫算中、陸海軍々事費及裁判所費ノ三款ハ、他ノ各款ニ比シ其區域廣闊ニ過キ、從テ豫算案及決算ノ調査ニ際シ不便尠カラサルノミナラス、流用ノ度過度ニ失スルノ弊ヲ免レス云々。

而シテ案ヲ具シテ其ノ款ノ區分ヲ示セリ、今其ノ言フ所ヲ見ルニ、亦一理ナキニモアラス、今後財政ノ膨脹スルニ從ヒ宜シク研究スヘキ問題ナリトス。

第二款 分科ノ固定

次ニ注意ヲ要スヘキハ、分科ハ常ニ之ヲ一定スヘキカ、又ハ變更ヲ加フ可キヤノ問題ナリ。而シテ大體ニ付テ云ハ、分科ハ、款項共ニ成ルヘク、妄リニ變更ヲ加ヘサルヲ良シトス。然ラスンハ參照對比ニ付テ不便ヲ感スルコト多ク、從テ豫算ノ議定及其ノ他ノ場合ニ於テ頗ル遺憾ノコトアルヘシ。

然リト雖モ、豫算ハ行政ノタメニスルモノナレハ、行政組織ニシテ變更スルカ、或ハ其分類カ不便有害ノ事實アルコトヲ認ムルトキハ、宜シク之ヲ改正スルニ躊躇スヘカラス。吾人ノ茲ニ述ルハ唯原則トシテ妄リニ變改ス可カラサルヲ云フノミ。

第三款 歳入歳出ノ順序

最後ニ論究スヘキハ、豫算ニ記載スヘキ順序ハ、歳入歳出何レヲ先ニス可キヤノ問題ナリ。之ニ付テハ諸國ノ制度ハ一様ナラス。

- (1) 歳入ヲ先ニスルモ、ハニハ英國、露國、伊太利、奧太利、洪牙利、索漏西其他獨逸ノ諸國アリ。

其可否

- (2) 歳出ヲ先ニスルモ、ハニハ佛蘭西、獨逸帝國、奧洪合同國等アリ。

而シテ我國ノ如キハ、前者ノ制度ヲ採レリ。今之レヲ理論上ヨリ觀察スルトキハ、後者ハ國家的經濟ノ性質ニ合シ、歳出ヲ基ト前者ハ私人的經濟ノ主義ヲ取ルモノナリトス。然レトモ、此順序問題ノ如キハ、全ク便宜的ノモノニシテ、現今ノ如ク歳入豫算簡單ニシテ歳出豫算浩濶ナルニ於テハ、却テ前制度ヲ採ルヲ以テ便利トスヘキカ如シ。今參照ニ便スル爲メ、吾邦豫算ノ目次ヲ掲ク。

〔明治三十八年度歳入出總豫算〕

豫算

- 第一條 明治三十八年度歳入總額ヲ若干圓、歳出總額ヲ若干圓ト定ム。其款項ノ金額ハ、別冊甲號歳入豫算歳出豫算ニ據ル可シ。
- 第二條 別冊乙號所掲ノ費途ハ、各其規畫スル所ニ隨ヒ明治三十八年度以降ノ繼續費ト爲シ、若クハ既定ノ總額年限金額ヲ改定ス。
- 第三條 明治三十八年度歳出豫算中、別冊丙號所掲ノ費途ハ、年度末支出殘額ヲ翌明治三十九年度ニ繰越スルコトヲ得。
- 第四條 明治三十八年度ニ於テ發行スル大藏省證券最高額ハ、若干圓トス。

豫算前論 豫算形式論 豫算ノ分科 豫算分科ニ關スル注意

歲入經常部

- 第一款 租稅十四項
- 第二款 印紙收入(二項)
- 第三款 官業及官有財產收入(十二項)
- 第四款 雜收入(九項)
- 第五款 預金利子收入(二項)
- 第六款 (一項)

歲入經常部合計

歲入臨時部

- 第一款 官有物拂下代(六項)
- 第二款 雜收入(五項)
- 第三款 地方分擔納附金(一項)
- 第四款 償金收入(一項)
- 第五款 森林資金收入(一項)
- 第六款 一時借入金(二項)

第七款 前年度繰入金(一項)

歲入臨時部合計

歲入總計金

歲出經常部

第一款 皇室費(一項)

外務省所管

第一款 外務本省(十一項)

內務省所管

第一款 神宮費

第二款 神社費及國幣社例祭幣帛料(二項)

第三款 內務本省(十項)

第四款 衛生試驗所(八項)

第五款 傳染病研究所(九項)

大藏省所管

第一款 大藏本省(九項)

第二款 國債(二項)

第三款 恩給諸祿(八項)

第四款 內閣(八項)

第二款 在外公館十七項

第六款 警視廳(十項)

第七款 北海道廳(十八項)

第八款 府縣(二十三項)

第九款 地方費(六項)

第五款 樞密院(五項)

第六款 貴族院(六項)

第七款 衆議院(六項)

第八款 會計検査院(五項)

豫算前論 豫算形式論 豫算ノ分科 豫算分科ニ關スル注意

- 第九款 行政裁判所(五項)
- 第十款 稅關(十一項)
- 第十一款 內國稅徵收費(十一項)
- 第十二款 文官試驗費(三項)
- 第十三款 文官懲戒諸費(三項)
- 第十四款 國資運用費(三項)
- 第十五款 諸拂瓦及缺損補填金(二項)
- 陸軍省所管
 - 第一款 陸軍本省(九項)
 - 第二款 軍事費(二十二項)
 - 海軍省所管
 - 第一款 海軍本省(七項)
 - 司法省所管
 - 第一款 司法本省(八項)
 - 第二款 裁判所(九項)
 - 文部省所管
 - 第一款 文部本省(十四項)
 - 第二款 震災豫防調査會(四項)
 - 第十六款 製造煙草輸出交付金(一項)
 - 第十七款 樟腦及樟腦專賣費(二項)
 - 第十八款 釀造試驗費(二項)
 - 第十九款 橫濱港維持費(八項)
 - 第二十款 軍艦水雷艇補充基金繰入(一項)
 - 國庫豫備金(二項)
 - 第三款 憲兵費(十四項)
 - 第四款 靖國神社寄附金(一項)
 - 第二款 軍事費(二十三項)
 - 第三款 監獄費(八項)
 - 第三款 測地學委員會(第四項)
 - 第四款 中央氣象臺(八項)

- 第五款 緯度觀測所(七項)
- 第六款 醫術及藥劑師試驗費(八項)
- 第七款 諸學校及圖書館支出金(三十二項)
- 農商務省所管
 - 第一款 農商務本省(十三項)
 - 第二款 特許局(七項)
 - 第三款 林區署(八項)
 - 第四款 礦山監督署(七項)
 - 第五款 農事試驗場(九項)
 - 第六款 水產講習所(八項)
 - 第七款 蠶業講習所(八項)
 - 逓信省所管
 - 第一款 逓信本省(十項)
 - 第二款 逓信費(八項)
 - 第三款 航路標識費(六項)
 - 歲出經常部合計金
 - 歲出臨時部
 - (以下略之)
 - 第八款 府縣立師範學校長俸給及諸給(二項)
 - 第九款 普通教育費(二項)
 - 第十款 實業教育獎勵費(三項)
 - 第八款 生糸検査所(八項)
 - 第九款 馬匹改良費(八項)
 - 第十款 種牛改良費(八項)
 - 第十一款 工業試驗所(七項)
 - 第十二款 檢査事業費(一項)
 - 第十三款 補助費(二項)
 - 第十四款 花蓮検査所(七項)
 - 第四款 船舶海員費(九項)
 - 第五款 商船學校(九項)
 - 第六款 北海道官設鐵道事業費(五項)

豫算前論 豫算形式論 豫算ノ分科 豫算分科ニ關スル注意

乙號

第一

在清國公使館新築費

金貳拾五萬圓

內

金貳拾壹萬貳千五百圓

金參萬七千五百圓

此改定年額左ノ如シ

明治三十八年度

金壹萬七千五百圓

金壹萬七千五百圓

明治三十九年度

金貳萬圓

既定總額

明治三十七年度迄支出額

明治三十八年度支出額

款營繕費

項在清國公使館新築費

款營繕費

項在清國公使館新築費

第二

利根川修築費

金八百四萬五千六百九十四圓

內

既定總額

丙號

第一

金六百八十八萬千八百九十九圓

金百拾六萬四千六百五圓

此改定年額左ノ如シ

明治三十八年度

金參拾八萬參千七百七拾壹圓

金參拾八萬參千七百七拾壹圓

明治三十九年度

金六拾萬圓

金六拾萬圓

明治四十年度

金拾八萬八百六十三圓

金拾八萬八百六十三圓

說明

前記ノ費途ハ明治二十年度ヨリ同三十八年度ニ至ル繼續費ナルモ工事經畫ノ變更ニ依リ明治三十八年以降前掲ノ如ク年限及年割額ノ變更ヲ要ス但明治三十八年度ニ於テ要スル金額ハ之ヲ議出臨時部内務省所管第二款第八項ニ掲ケ

(以下略之)

明治三十七年度迄支出額

明治三十八年度支出額

款土木事業費

項利根川修築費

款土木事業費

項利根川修築費

款土木事業費

項利根川修築費

歳出臨時部外務省所管第一款警備費第一項
在清國公使館新築費

説明

時局ノ關係上豫定ノ如ク工事ノ進捗ヲ爲ス能ハサル虞アルヲ以テ年度内支出了スル
時期シ難シ依テ本年度ノ支出殘額ヲ翌年度ニ繰越使用スルヲ要ス

第二

歳出臨時部陸軍省所管第二款軍事費第三項

修繕費

説明

東北地方及北海道ニ於ケル營造物ハ頗ル多數ニシテ之カ修繕ハ冬季積雪多キ爲メ自融
解ノ期ニ至ラサレハ工事ニ着手スルコト能ハサルヲ以テ年度内支出了スル時期シ難
シ依テ本年度ノ支出殘額ヲ翌年度ニ繰越使用スルコトヲ要ス

第三

歳出經常部陸軍省所管第二款軍事費第十四項

演習費

説明

演習ハ年時ヲ畫シテ一定スヘカラサルモノアリ依テ本年度ノ支出殘額ヲ翌年度ニ繰越
使用スルヲ要ス
(以下略之)

第三編 豫算本論

第一部 豫算提出論

第一章 提出ノ時期

第一節 毎年ノ提出

第一諸國ノ制度

原則

豫算ハ、毎年議會ニ提出ス可キコトハ文明立憲國ノ一般ニ採ル所ノ原則ニシテ、
諸國ノ憲法ニ明記セラル。例之

李漏西憲法第九十九條ニ曰ク、凡ソ國家ノ歳入歳出ハ毎年之ヲ豫定シ以テ歳
計豫算ヲ調製ス可シ、歳計豫算ハ毎年法律ヲ以テ之ヲ確定ス。

トセルカ如シ。

例外

然リト雖モ、此ノ原則ニ對シテ尙幾多ノ例外ナキニアラス。

- (1) 二年一回制ヲ採ルモノニハ、索遜(千八百六十八年法律第三十八條)巴威倫(千八百六十五年)巴典

(憲法第五) 十 四年一回制ヲ採ルモノニハ、ザクゼンワイマル(憲法第三)、ザクゼンアンテンブル(十 八年百 五十 法律五)

(2) 三年一回制ヲ採ルモノニハ、ヘッセン(憲法第六)、ザクゼンワイマル(憲法第三)、ザクゼンアンテンブル(十 八年百 五十 法律五)

クゼンアンテンブル(十 八年百 五十 法律五)

(3) 四年一回制ヲ採ルモノニハ、ザクゼン、コブル(憲法第九)、ゴータ(憲法第九)、ルードルス(憲法第九)、

タット、シニワルツブルヒ、ゾンデルスハウゼン(憲法第十四)

蓋シ豫算ヲ毎年議會ノ協賛ヲ經セシムルハ、即チ議會ノ行政監督權ヲ最モ緊切ニ行フ所ニシテ、豫算ノ性質并ニ沿革ノ證明スル所ナリ。之ヲ以テ此ノ制度タル一國ノ自治團體ニ於テモ亦原則トシテ行ハル、ヲ見ル、前掲ノ如キ例外ハ、蓋シ獨逸帝國内ニ於テノミ見ル所ニシテ、其ノ國家財政ノ範圍狭小ニシテ收支ノ狀態平靜ナルカ爲メノ一變體トシテ見ルノ外ナシ。
第二、我憲法ノ解釋

帝國憲法第六十四條モ、亦此ノ原則ヲ認メタリ。曰ク

國家ノ歳出歳入ハ毎年豫算ヲ以テ帝國議會ノ協賛ヲ經ヘシ

此ノ「毎年」ナル文字ニ付テハ、二様ノ解釋アリ。曰ク豫算期間説及ヒ協賛時期説コ

豫算期間

レナリ。

豫算期間説ニ由ルトキハ、此ノ條文ヲ以テ毎一年即チ十二月間ノ豫算ハ協賛ヲ經ヘシトイフニアリ。故ニ十月又ハ十五月間ノ豫算ヲ調製シテ協賛ヲ經ントスルハ違憲ナリトスルモノナリ。

然リト雖モ

(1) 此ノ説ニ由リテ條文ヲ解釋スレバ、毎年「ナル文字」ハ「歳入歳出」ナル文字ト重複ノ嫌アルノミナラス。

(2) 或ル事情ノタメニ會計年度ヲ變更スルノ必要ニ迫ルトキハ、其ノ過渡期ニ際シテ十二月ヨリモ長キ期間若ハ短キ期間ノ豫算ヲ提出スルハ、違憲ニシテ憲法ノ改正ヲ要スルコト、ナルヘシ。是レ豈ニ解釋ノ正鵠ヲ得タルモノナランヤ。

斯ノ如ク「毎年」トハ豫算ノ期間ノ長短ヲ指スモノニアラストセハ、之ヲ以テ議會ハ協賛ヲ經ヘキ時期ヲ定メタルモノナリトセサル可ラス。即チ獨逸帝國内ノ或ル國家ニ於ケルカ如ク、二年三年又ハ四年ニ一回ノ豫算ヲ提出スルコトヲ禁

協賛時期

豫算本論 豫算提出論 提出ノ時期 毎年ノ提出

止シタル意味ト解セサル可カラス。

- (1) 第一説ニ由レハ、毎年トハ、會計年度ヲ指スモノナリト云ヒ。
- (2) 第二説ニ由レハ、毎年トハ、單ニ曆年ニ從ヒ、各年ト云フノ意義ニ外ナラ、スト

會計年ノ意ナリ

吾人ハ寧ロ前説ヲ取ルモノナリ。何トナレハ

- (1) 憲法第六十四條ノ解釋ヲ論者ノ如クセハ、協賛ヲ經ヘシナル文字ハ提出スヘシト改メサル可カラス。論者ハ文字ハ文字通りニ解釋スヘシト云ヒ乍ラ、自ラ之ヲ破ルモノニアラスヤ。
- (2) 憲法第六十六條皇室經費毎年ノ支出、並ニ第六十八條繼續費年限ノ限定ノ如キモ、亦之ヲ證明シテ餘リアリ。論者ノ説ノ如クスルトキハ、斯クノ如キ場合ニモ曆年ニ從ハサル可ラサルコト、ナルヘシ。是レ自ラ求メテ究屈ニ解シ、常例ニ達セントスルモノナリ。
- (3) 又實際ノ必要上ヨリ見ルモ、豫算ヲ十二月中ニ提出スルヲ要スルノ理由ナ

シ、豫算ハ遅クトモ年度開始前ニ議了シ、多少ノ準備時日ヲオクヲ便利トス。而シテ此ノ事タル十二月中ニ提出スルヲ要件トセサルコト、我國ノ常例ノ明示スル所ナリ。

- (4) 論者ハ又憲法第四十一條及會計法第五條ニ由リ、議會ハ毎年之ヲ召集スヘク、而シテ豫算ハ議會集會ノ始ニ於テ提出スヘキモノナルニ由リ、豫算ハソノ年内(十二月中)ニ提出スルヲ要スト云フ。是レ論者ハ議會ノ召集ト開會トヲ混同セルモノナリ。召集ハ勿論該年内ニナサ、ルヲ得サルモ、開會ハ明年一月ナルモ憲法上何等ノ差支アルコトナシ。

要之、論者ノ解釋ハ全ク文字ニ拘泥セル機械的ノモノニシテ、何等ノ必要事由ヲ語ラサルモノナリトセサル可ラス。

第三、毎年提出制ノ價值
前記ノ如ク、毎年提出制ハ議會ノ行政監督ノ權能上最モ緊切ナル制度ナリ。然ルニ或ハ曰ク、毎年議定ノ制天下應當ノ法ナリト雖モ、議會タルモノ間、其ノ權ヲ濫用シ、爲メニ一國ノ政治ヲ滯留スルコトナキニアラスト。而シテ其ノ實例トシテ

豫算本論 豫算提出論 提出ノ時期 毎年ノ提出

舉クル所ハ、即チ北米合衆國ニ於テ、千八百七十七年大統領ヘースガ議會ト衝突シタルタメ、陸軍維持費ノ議定ヲ了ヘスシテ閉會シタルタメニ、士官兵士ニ給與スヘキ金額ヲ支拂フコト能サリシコトナリ。然リト雖モ、吾人ヲ以テ見レハ、此ノ如キ事例ハ、合衆國憲法カ不完全ニシテ、凡テ議會ノ議定セシ所ノ經費ニアラサレハ一切支拂フコト能ハサリシカ故ニシテ、毎年豫算ヲ議定スルノ罪ニハアラサルナリ。議會カ權能ヲ濫用スルハ愼ムヘキコトタルモ、之ヲ防クニハ前年度豫算施行ノ制、不動費自由費區分ノ制等アリテ、諸國ノ憲法法律之ヲ定メタリ。毎年提出ノ制度ハ少シモ政治ヲ滯セシムルモノニアラスシテ、文明國ノ通則トシテ最モ必要ナルモノナリ。

第二節 年度開始前ノ提出

第一〇〇年度開始前ノ提出

豫算ハ財政ノ豫測ニシテ、會計年度ハ即チ豫算施行ノ期間ナルカ故ニ、豫算ノ提出及ヒ議定カ年度開始前ナラサル可ラサルコトハ自然ノ道理ニシテ、諸國ノ制

度モ亦之レヲ明言セリ。例之、

獨逸帝國憲法第六十九條ニ曰ク、帝國歲計豫算表ハ、年度ノ開始前ニ於テ左ノ原則ニ依リ法律ヲ以テ確定ス

ハ其ノ一例ニシテ、我國ニ於テハ會計法第五條ニ之レヲ規定セリ。曰ク、

歲入歲出ノ總豫算ハ、前年ノ帝國議會集會ノ始ニ於テ之ヲ提出スヘシ(第一項)

茲ニ前年ノ帝國議會トハ豫算所屬年度ノ前年度ノ議會ノ意ニ解スヘシ。例之明治三十九年度ノ豫算ハ三十八年度ノ議會集會ノ始メニ提出スヘキモノナリ。故ニ強チ三十八年中ニ提出スルコトヲ必要トセス。議會ノ召集カ三十八年ノ年末ニ迫リタル場合ニ於テハ、議會ノ召集ハ必フス年内ニ行ハサル可ラス、或ハ三十九年ノ一月ニ於テ(三十八年度)提出スルコトモアリ得可キナリ。

第二〇〇年度開始ニ接近セシムルコト
豫算ハ財政ノ計劃ナルカ故ニ、其ノ豫定ト施行トノ間ニ力メテ期間ヲ短縮シテ齟齬尠カラシメンコトヲ要ス。是レ豫算調製ノ部ニ於テモ説明シタル所ニシテ、

豫算本論 豫算提出論 提出ノ時期 年度開始前ノ提出

佛國

從テ豫算ノ提出モ、其ノ議定ニ必要ナル期間並ニ若干ノ施行準備ノ期間ヲ除キ、成ル可ク豫算ノ所屬年度ニ接近セシメサル可ラス。

今諸國ノ實例ニ付テ見ルニ、最モ此ノ原則ニ背馳セルモノヲ佛國トス。佛國財政史ノ述フル所ニヨレハ、千八百三十年以後ニ於テハ、僅ニ數年ヲ除クノ外、前年ノ一月以後ニ豫算ヲ提出セシコトナシ。佛國ノ會計年度ハ一月一日ヲ以テ始ル。十二月ニ提出セシコトアリ。千八百三十六年度ノ豫算ハ、千八百三十四年十二月下旬、千八百四十二年ノ豫算ハ、千八百四十年十二月下旬、千八百四十六年ノ豫算ハ、千八百四十四年十二月下旬ニ提出セリ。拿破翁第三世ノ時ニ至リテモ、ソノ提出ハ前年ノ一二月ノ候ニアルヲ常トシ、稀ニ三四月ニ提出セシコトアリ。同帝廢位ノ後ハ、種々ノ事情アリテ豫算ノ提出少シク後レ、千八百七十六年度ノ豫算ハ千八百七十五年五月ニ、千八百七十七年度ノ豫算ハ千八百七十六年三月ニ提出セリ。然ルニ當時ノ輿論ハ之ヲ以テ多少ノ進歩トナサス。尙政府カ議院ノ審議討論ヲ厭ヒ、之ヲ避ケント欲セシモノ、如ク却テ之ヲ憤レリ。之ヲ以テ、政府ハ再ヒ豫算ノ提出ヲ速カニシ、千八百七十八年度ノ豫算ハ千八百七十七年一月十一日

白耳義伊太利

我國

ニ提出スルニ至レリ。而シテ現今ニ於テモ、尙此ノ慣例ニ由リテ依然舊習ヲ墨守スルヲ見ルナリ。彼ノ有名ナル財政學者ルロア、ボリー氏ノ如キハ、此ノ點ニ付テ大ニ歎息シ、宜シク現今ノ會計年度ヲ改メテ七月トナシ。佛國ハ毎年一月第二大會ノ日トナス。コレト以テ豫算ノ提出ト其所屬年度トノ間隔ヲ近ツカシムヘシト憲法ニ明記セラレト。以テ豫算ノ提出ト其所屬年度トノ間隔ヲ近ツカシムヘシト論シ、爾後實際ニ於テモ此ノ議論ノ起リシコト屢々ナルモ、尙未タ改正セラル、ニ至ラサルナリ。

佛國ヲ外ニシテ、上記期間ノ長キモノニハ白耳義ト伊太利トヲ舉ケサル可ラス。白耳義ハ、其ノ會計年度ハ一月一日ヲ以テ始マルニ關セス。豫算ノ提出ハ前年ノ二月頃ニシテ約十ヶ月ヲ隔テ、伊太利ノ會計年度ハ、毎年七月一日ヲ以テ始ムルモ、豫算ノ提出ハ十一月頃ニアリテ約八ヶ月ヲ隔ツトイフ。

我國ニ於テハ、豫算ノ提出ハ十一月下旬ヨリ十二月ノ交ニアリ。而シテ會計年度ノ始期ハ、前ニ述シ如ク、毎年四月一日ヲ以テ始マルカ故ニ、其ノ中間ノ時日ハ四ヶ月ニ過キス。此ノ點ハ、歐米諸國ニ比シテ遜色ナキノミナラス、寧ロ誇ルコトヲ得ルモノナリ。

追加豫算

第三、追加豫算及特別會計

會計法第五條ノ規定ハ、歳入歳出ノ總豫算ニシテ、追加豫算及ヒ特別會計ハ之レニ入ラス。追加豫算ハ曾テ説明セル如ク、總豫算ノ補充トシテ提出スルモノナレハ、前年ノ帝國議會集會ノ始メニ提出スルコトヲ要セス、多クノ場合ニ於テハ後日ニ至リテ提出スルモノナリ。

特別會計

特別會計ニ至リテハ、會計法第五條ノ範圍内ニアラスト雖モ、各特別會計法ハ歳入歳出ノ總豫算ト共ニ前年度ノ議會ノ始メニ提出スヘキコトヲ規定ス。例之

作業會計法ニハ、政府ハ毎年各作業所特別會計ノ歳入歳出豫算ヲ調製シ、歳

入歳出ノ總豫算ト俱ニ之ヲ帝國議會ニ提出スヘシ(第六條)

官設鐵道會計法ニハ、政府ハ毎年鐵道事業ノ歳入歳出豫算ヲ調製シ、歳入歳

出ノ總豫算ト俱ニ之ヲ帝國議會ニ提出スヘシ(第五條)

ト規定セルカ如シ。其他各特別會計法ミナ之レヲ規定セリ。

第四、豫算外國庫ノ負擔トナルヘキ契約ヲナス件

此ノ契約ニ關スル件ハ、文字ノ表ハス如ク豫算ニアラスト雖モ、帝國憲法第六十

二條第三項ニ依リ帝國議會ノ協賛ヲ經サル可カラズ、而シテ其ノ提出ハ總豫算ト俱ニ議會開會ノ始メニスルヲ我國ノ慣例トス。

第二章 提出ノ物體

第一節 提出ノ物體

第一、概説

帝國議會ニ提出スヘキ豫算ノ範圍ハ、廣汎ニシテ及ハサル所ナク、毫モ限局セラレ、ナシ。故ニ其ノ歳入タルヤ、法律ニ本ツクモノナルト行政上ノ處分ニ因ルモノナルトヲ問ハス(憲法第六十二條)其ノ歳出タルヤ、總豫算(一般會計)タルト追加豫算ナルト特別會計ナルトヲ問ハス、又不動的ノモノタルト自由決議ノ性質ヲ有スルモノタルトヲ問ハス(憲法第六十七條)ハタ繼續費タルト然ラサルトヲ問ハサルモノナリ。此等ノ一切ノ歳出入ハ舉ケテ議會ニ提出セサル可カラズ、但其ノ議定ノ上ニツキテ若干ノ制限アルノミ。

第二、提出ノ物體ト協賛ノ物體

豫算本論 豫算提出論 提出ノ物體 提出ノ物體

諸國ノ例

茲ニ注意スヘキハ豫算提出ノ物體ト協賛ノ物體ト必スシモ同一ハモハニアラサルコト是レナリ。豫算ハ前述ノ如ク財政ノ計劃ニシテ全般ヲアケテ議會ニ提出スルモノナルモ、議會カ之レヲ協賛スルニ當リテハ、自由ニ廢除削減ス可ラサル性質ノモノアリ。又設令廢除削減セサル能ハサルニ非サルモ、之レカ爲ニ弊害ヲ醸スコト重大ナルモノアリ。此等ノモノハ、之ヲ協賛ノ物體ノ範圍外ニオキテ保護スルコト當ヲ得ルモノナルハ論スル迄モナシ。今諸國ノ實例ニ徴スルニ

(1) 二者合一ノ制ヲ採ル著名ノ國ハ佛蘭西ニシテ、一度千七百九十一年ノ憲法ニ於テ永久資金ハ否決スルヲ得サルコト、定メシモ、間モナク之ヲ廢止シ、現今ニ於テハ純然タル合一制ヲ採レリ。而シテ其ノ弊害ノ大ナルハ後ニ之ヲ説明スヘシ。

(2) 多數ノ國家ニ於テハ、協賛ノ物體ハ提出ノ物體ヨリモ制限セラレ、例トス、即チ豫算中、永久歳入永久費用ヲ認メテ、妄リニ議會ヲシテ干與セシメサルモノナリ。

我國

我國ニ於テ、此ノ範圍外ニ屬スルモノハ、即チ皇室費(憲法第六十六條)及ヒ繼續費

(憲法第六十八條)ナリ。然レトモ此二者モ會計法第五條ノ所謂總豫算中ニ包含セラレ、前年ノ帝國議會ノ始メニ提出セラル、ヤ、他ノ豫算ト些ノ異ナル所ナキモノトス。

第二節 追加豫算濫出ノ弊

第一〇〇 概説

追加豫算ハ、既ニ説明セル如ク、總豫算ノ補充、若クハ延長ト云フ可キモノニシテ、止ムヲ得サル場合ニ提出スヘキモノタルヤ、其ノ性質上明カナリ。然ルニ實際ノ上ニ於テ、提出者ハ往々其ノ權能ヲ濫用シテ妄リニ追加豫算ヲ提出シ、甚シキニ至リテハ、總豫算編製若クハ提出ノ時既ニ追加豫算ノ提出ヲ期シ、人目ヲ引クノ費目ヲ削除若クハ減少シ、後日ニ至リ種々ノ口實ヲ設ケテ之レカ通過ヲ圖ラントスルモノアリ。抑追加豫算ノ濫出ハ

- (1) 一、國、財、政、ノ、總、覽、ヲ、妨、ケ、及、ヒ
- (2) 經、費、膨、脹、ノ、結、果、ヲ、生、セ、シ、ム

ルモノニシテ最モ慎マサル可カラス。是レ殊ニ本節ヲ設ケテ論述セントスル所
以ナリトス。

第二、佛國ノ事例。

追加豫算濫出ヲ以テ名アルモノヲ佛國トナス。千八百七十三年豫算委員報告、千
七百三十九號中ニ記スル所ヲ見ルニ、千八百七十二年度ノ歳計ニ於テ議決セシ
所ノ追加豫算ハ、九百四十八万八千二百二十二フランニ達シ、歳入超過額千三万六千
七百五十フランハ殆ント剩餘ヲ生セス。而シテ次期ノ國會ニ於テ、同年度ノタメ
ニ追加豫算ヲ議決セシモノ、一月三十一日マテ六百十二万五千六百七フラン其
他千九百六十万九千四百四十九フランノ追加モ許可セラレテ、當初ノ豫算ニ於テ
ハ凡ソ一千万フランノ歳入超過ナリシモ、遂ニ凡ソ二千五百万フランノ歳入不
足ヲ生セリト云フ。而シテ佛國カスクノ如キ弊害ヲ醸成セル大原因ハ、各議員ニ
豫算發案權ヲ有セシムルカ爲メ、各自己ノ利益ヲ計ルカタメ争フテ豫算ニ追加
ヲ加アルヲ以テナリト云フ。尙此ノ事ニツキテハ後ニ論スル所アルヘシ。

第三、我國ノ制度。

我國ニ於テ追加豫算ニ關シテ制限規定ヲ設ケタルハ、明治三十五年法律第四十
七號ヲ以テ會計法第五條ニ第二項ヲ追加シタルヲ始メトシ、其ノ以前ニ以テハ
之レニ關スル規定ヲ欠ケリ。爲メニ明治三十二年度ノ如キハ實ニ十七箇ノ追加
豫算ヲ議決シタルノ實例アリ。而シテ其ノ追加豫算ナルモノヲ見ルニ、往々強テ
豫算ヲ分割シタルモノナシトセス。茲ニ於テカ以上ノ立法ヲ見ルニ至リシモノ
ナリ、其規定ニ曰ク、
必要、避ク、ヘカラサル、經費、及、法律、又、ハ、契約、ニ、基、ツ、ク、經費、ニ、不、足、ヲ、生、シ、タ、ル、
場、合、ハ、外、追、加、豫、算、ヲ、提、出、ス、ル、コ、ト、ヲ、得、ス、

政府ノ解

然ルニ其後第十七回議會及ヒ第十八回議會ニ至リ、右規定ノ解釋ニ關シ、政府當
局者ト衆議院議員トノ間ニ意見ノ衝突ヲ見ルニ至レリ。
政府當局者ハ曰ク追加豫算ヲ提出シ得ヘキ場合ハ

- (1) 必要避クヘカラサル經費ノ場合
 - (2) 法律又ハ契約ニ基ツク經費ニ不足ヲ生シタル場合
- ノ二者ヲ包含ス。故ニ苟クモ政府カ認メテ以テ必要避クヘカラサル場合トスル

豫算本論 豫算提出論 提出ノ物體 追加豫算濫出ノ弊

トキハ即チ追加豫算ノ提出アリ得ヘシト廣義ニ解釋セリ。
然ルニ豫算委員ハ曰ク、追加豫算ヲ提出シ得ヘキ場合ハ

(1) 必要避クヘカラサル經費ニ不足ヲ生シタル場合、
(2) 法律又ハ契約ニ基ツク經費ニ不足ヲ生シタル場合、

是レナリ。之ヲ換言セハ、第一ノ場合ハ第一第二豫備金ヲ以テ支出シ得ヘキ性質
ノモノニ限ラレサル可カラス、從テ法律若クハ契約ニヨラサル新事業ノタメニ
追加豫算ヲ提出スルカ如キハ、其ノ制限ヲ犯セルモノナリト云フニアリ。

吾人ヲ以テ見ルニ、此ノ二箇ノ解釋中前者ハ追加豫算ニ制限ヲ設ケタル精神ヲ
不當ニ擴張シタルモノニシテ、條文ノ正當ナル解釋トシテハ後者ヲ採ラサルヲ
得サルナリ。

第四、追加豫算濫出ノ原因

追加豫算濫出ノ原因ハ諸國ノ制度ニ由リテ各相異ナリ、其ノ數マタ多カルヘキ
モ、今試ミニ其ノ重ナルモノヲアクレハ左ノ如シ。

(1) 政府カ總豫算ヲ編製スル術疎漏ナルカ、又ハ故意ニ疎漏ナラシメタルトキ、

(2) 國會議員カ、各豫算ノ發案權ヲ有スル場合、例之佛國ノ如シ、我國ニ於テ

(3) 豫算準備ノ時期カ非常ニ長キ場合、此ノ期間長ケレハ長キホト追加豫算ノ
提出ハ益増加ス。

(4) 豫算議定ノ期間カ非常ニ長キヲ要スル場合、此ノ期間長ケレハソレ丈ケ追
加豫算提起ノ危險アリ。

(5) 款項流用ノ範圍狹隘ニ失スル場合、
(6) 歲計ノ剩餘過大ナル場合

故ニ追加豫算ハ、一方ニ於テ規定ヲ以テ提出シ得ヘキ場合ヲ制限スルト同時ニ、
他ノ一方ニ於テハ以上ノ原因ニツキテ一々救済ノ方法ヲ熟慮セサル可カラス。

第三章 提出ノ方法

第一節 提出ノ手續

豫算提出ノ手續ハ、諸國ノ間ニ多少ノ差異アルモ、大體ニ於テ一致セリ。即チ

(1) 各大臣、箇々ニ提出セシテ統一制ヲ採ルコト

既ニ豫算調製ノ部ニ説明スルカ如ク、其ノ調製ハ諸國共ニ多ク統一制ヲ採ルカ故ニ、其ノ結果トシテ提出モ亦統一制ヲ採ルナリ。蓋シ各大臣箇々ニ提出スルコト、セハ、其ノ各自豫算ノ間ニ齟齬スル點ヲ生シ易キノミナラス、一國財政ノ概數上形式ノ統一ヲ保シ難ケレハナリ。

(2) 豫算ハ提出ハ、一、二、ノ大臣政府ヲ代表シテ提出ス。現今我國ノ慣例トシテハ、内閣總理大臣及ヒ大藏大臣連署シテ提出スルモノトス。其ノ形式左ノ如シ

明治三十八年度歳入歳出總豫算案並明治三十八年度各特別會計歳入歳出豫算案

右

勅旨ヲ奉シ帝國議會ニ提出ス
明治三十七年十一月三十日

内閣總理大臣 爵 氏 名
大藏大臣 爵 氏 名

惟フニ、豫算ハ各大臣カ其ノ責ニ任スヘキモノナルニ由リ各大臣連署シテ帝國議會ニ提出スヘキモノナルカ如シ。然レトモ、一方ヨリ考フレハ、豫算全

豫算外國
庫負擔ト
ナルヘキ
契約

體ニ付キテ之ニ通曉シ其ノ編製施行ノ統一の職務ヲ有スルモノハ大藏大臣ニシテ、各大臣ノ首班トシテ政府ノ行働ニ關シ統一の職分ヲ負フモノハ内閣總理大臣トス。從テ政府ヲ代表シテ統一の豫算ヲ提出スル者ヲ前二者トスルハ不可ナキノミナラス、大體ノ説明ノ任ニ當ル上ヨリ見テ最モ適當ナリト云フヘシ。

(3) 豫算ハ前ニ衆議院ニ提出ス。是レ憲法第六十五條ノ規定ニシテ、其ノ詳細ノ點ハ豫算協賛論中ニ於テ説カントス。

豫算提出ノ手續ハ大要斯クノ如キモ、豫算外國庫ノ負擔トナルヘキ契約ヲナスヲ要スル件ニ付テハ、ソノ提出者ハ總理、大藏ノ二大臣ニアラスシテ各大臣ノ連署ヲ以テスルモノトス。是レ此ノ場合ニ於テハ箇々ノ契約ハ各獨立セルモノニシテ、統一の概觀的ノ手續ヲ要セサルカ故ニ、特ニ前記二大臣ノ連署ヲナサシムルノ必要ヲ見サレハナリ。

第二節 豫算ノ説明

豫算本論 豫算提出論 提出ノ方法 豫算ノ説明

第一款 概論

第一、豫算説明ノ必要

凡テ議會ニ提出セラル、モノハ、法律案タルト其ノ他ノモノタルトヲ問ハス、皆理由書若シクハ説明書ヲ附シテ立法ノ趣旨ヲ明了ニシ、議定ノ資材ニ供センコトヲ期ス。然リ而シテ歳計豫算ニ於テハ、殊ニ此ノ説明ヲナスノ緊要ナルヲ見ル、而シテ其ノ理由ハ

(1) 豫算ハ事項一國ノ財政ニ亘リテ、大體ノ要點組織並ニ其ノ理由ヲ知ルノ容易ナラサルコト。

(2) 豫算ハ、彼此ノ關係比照スヘキモノ、前後ノ時期考較スヘキ點極メテ多ク、説明ナケレハ了解ス可カラサルコト。

(3) 豫算ハ、其ノ一款一項ト雖モ往々重大ノ意味ヲ含蓄スルモノナルコト。

(4) 議員若クハ委員カ攻究審査スルニ當リテ、由テ以テ自己ノ意見ヲ定ムヘキ參考資料タルヘキモノヲ要スルコト

ニアリ之ヲ一言セハ、豫算ニハ必ラス理解スヘキ説明ト參考スヘキ資料ヲ附スルヲ要ス。豫算單獨ノ提出ハ其ノ用ヲナサ、ルナリ。

第二、豫算説明ノ種類

豫算ヲ説明スヘキモノハ、口頭説明ト文書説明トニ分ツコトヲ得ヘシ。即チ豫算提出ノ際大藏大臣ノナス財政演説ハ前者ニ屬シ、會計法ニ規定セル添附書類ハ後者ニ屬ス。

第二款 口頭説明

第一、口頭説明ノ必要

文書説明ハ古クヨリ行ハル、所ニシテ、其ノ必要ナルコト云フヲ要セスト雖モ、其ノ大體ニ亘ル要點ノ如キハ豫算提出ト同時ニ口頭ヲ以テ説明セハ、最モ輕便ニシテ且解シ易カルヘシ。故ニ文明諸國多クハ此ノ例ニ由ル。但シ此ノ口頭説明ニモ單ニ朗讀ニ由ルモノト、財務當局者自身ノ演説ヲ以テスルモノトノ區別アリ。而シテ目的ヲ達スル上ニ於テ、後者ノ前者ニ優ルヤ言フ俟タス。

第二〇〇諸國ノ實例

英國

口頭説明ノ最モ著シキ實例ハ英國ニシテ、所謂豫算演説 (Budget Speech) ナルモノ是レナリ。此ノ演説ハ管ニ豫算ノ説明ヲナスノミナラス、豫算自カラモ亦多少豫算演説ヲ以テ補充セラル。其ノ演説ハ即チ大藏大臣ノナス所ニシテ、大抵年度開始ニ切迫シタルトキ、或ハ時トシテハ年度開始後ニ之ヲナス。其ノ内容ハ來年度豫算ノ大要ニシテ、前年度ノ決算、來年度歳出入ノ豫算、及ヒ議會ノ協賛ヲ經ヘキ租税ノ増減、若クハ他ノ會計上ノ變動ニ關スル説明等ニ及ヒ、滔々數時間ニ及フヲ常トス。但シ此ノ演説ハ別ニ官廳ヨリ公布スルモノニアラスシテ、唯議會ノ諸演説ヲ報告スル「ハンサード」議會討議録中ニ之レヲ見ルコトヲ得而シテ此ノ豫算演説ノ英國ニ特有ナルハ、下院ノ議場ニ於テ試ムルニアラスシテ委員會ニ變形シタル時ニ於テナスヲ常トスルニ在リトス。

獨、塊

其他獨逸ニ於テハ第一ニ國王ノ名ヲ以テ財政上一般ノ景況ヲ朗讀シ、其ノ後數日ヲ經テ豫算ノ討議ヲ始ムルトキニ大藏大臣自ラ口頭ノ説明ヲナスモノトス。澳、太利ニ於テモ亦口頭ノ説明ヲナスノ前ニ財政ノ景況ニ關スル文書ヲ朗讀ス

佛國

ルヲ常トス。只佛、蘭、西、及ヒ白、耳、義ニ於テハ、現今ニテハ別ニ口頭説明ナルモノナク、文書ノ説明ヲ以テ足レリトスルカ如シ、併シ佛國ノ如キハ以前ニ於テハ口頭説明ヲナシタル時代少カラサリキ。

第三〇〇我國ノ慣例

我國ニ於テモ、議會開設以來口頭説明ノ制ヲ採用シ、衆議院ニ於テハ、開會ノ始メ豫算案提出後ノ議場ニ於テ、内閣總理大臣ノ施政方針ノ演説ノ後ヲ承ケテ大藏大臣演壇ニ立チテ提出豫算大體ノ要點ニツキテ説明ヲナシ、尙ホ議員ノ質問ニ應シテ答辯スルヲ例トシ、貴族院ニ於テモ豫算送付後ノ議場ニ於テ大藏大臣ハ同シク財政ノ演説ヲナスヲ常トセリ。

第三款 文書説明

第一〇〇概説

我國ニ於テ、文書説明ハ會計法及ヒ會計規則ニ定ムル所ニシテ、之ヲ分テ二トス。

豫算本論 豫算提出論 提出ノ方法 豫算ノ説明

(1) 冒頭説明 會計規則第四條ニ定ムル所ニシテ、總豫算ノ首ニ歲計全體ニ關スル説明ヲ付スルモノトス。

(9) 添附文書 會計法第六條ニ定ムル所ニシテ、更ニ之ヲ分チ二トス。

(イ) 各省ノ豫定經費要求書。

(ロ) 其年三月三十一日ニ終リタル會計年度ノ歳入歳出現計書。

以下順ヲ追フテ説明スヘシ

第二〇 冒頭説明

前述ノ如ク、總豫算ノ首ニ附スル歲計全體ニ關スル説明ニシテ、現在ノ計劃ト過去ニ對スル比較並ニ將來ノ見込等ヲ概括シテ説明スルモノナリ。冒頭説明ノ記載方式ノ順序左ノ如シ。

明治三十八年度歳入歳出總豫算説明

第一章 歳入歳出

明治三十八年度歳入歳出總豫算ニ計上スル所ノ歳入ハ若干圓、歳出ハ若干圓ニシテ、歳入歳出相對照比較スレハ若干圓ノ有餘ヲ見ル。右ノ外歳出豫算中陸海軍軍事費ハ時局ノ變化如何ニ依リ圓ヨリ増減アレヘシト雖モ現在ノ經費

ニ依レハ約若干圓ノ不用殘額ヲ生スルノ見込ナリ

第二章 歳入

明治三十八年度歳入ハ若干圓ニシテ、其經常部ニ屬スルモノ若干圓、其臨時部ニ屬スルモノ若干圓ナリ、之レテ前年度豫算ニ比較スレハ云々。歳入増減ノ重要ナル事項ヲ擧クレハ、經常部ニ於テハ何々ニ於テ若干圓ヲ増加スト雖モ何々ニ於テ若干圓ヲ減少スルヲ以テ差引若干圓ヲ増加シ臨時部ニ於テハ何々ニ於テ若干圓ヲ増加スト雖モ何々ニ於テ若干圓ヲ減少スルヲ以テ差引若干圓ヲ減少ス云々。

第三章 歳出(以下説明ヲ略ス)

第四章 繼續費(同上)

第五章 補助費(同上)

第六章 繰越(同上)

第七章 國庫豫備金及大藏省證券(同上)

第三〇 各省豫定經費要求書

(1) 添付ノ目的 元來總豫算ハ豫算全體ニ通シテ簡明ニ記載スルヲ以テ目的トスルカ故ニ、歳入歳出、經常臨時ノ區分並ニ各款項ノ區分アルニ過キス。各項ニ關シテ其ノ由テ來ル所ヲ説明セス。然ルニ各省豫定經費要求書ハ各省大臣カ經費入用ノ理由ニツキ細目ニツキテ一々説明セルモノナレハ、以テ

各項金額ノ基礎ト必要ノ理由トヲ知ルコトヲ得ヘク、添付書類中最モ要用ナルモノナリトス。

(2) 其ノ内容、是レ會計規則第九條第十條ニ記載スル所ニシテ、各省ノ豫定經費要求書ハ經常臨時共ニ款項ニ區分シ、更ニ各項中所要ノ金額ヲ各目ニ區分シ、尙ホ必要ノ場合ニ於テハ番號ヲ以テ之ヲ細分シ、又經費所要ノ理由、計算ノ基ク所ヲ示スモノトス。

尙ホ各省ノ豫定經費要求書ニハ、各省所管經費全體ニ關スル説明及ヒ各款各項ノ説明ヲ付ス。

(3) 其ノ形式、試ニ明治三十八年度外務省ノ部ヲ例示スレハ左ノ如シ、先ツ説明ヲ記シ後ニ要求書ヲ記スヲ例トス。

外務省所管豫定經費要求書説明

明治三十八年度外務省所管豫定經費要求書ニ於テ算定スル所ノ

歳出經常部ハ

二、三六六、七〇九、〇〇〇

歳出臨時部ハ

四五、六二五、〇〇〇

ニシテ

本年度豫定經費要求高合計ハ

二、四一二、三三四、〇〇〇

ナリ今之ヲ

前年度豫算高合計

二、四五八、三七八、七九八

ニ比較スレハ

四六、〇四四、七九八

ヲ減少ス

本年度歳出經常部

二、三六六、七〇九、〇〇〇

ヲ以テ

前年度歳出經常部

二、二九八、九四六、七九八

ニ比較スレハ

六七、七六二、二〇二

ヲ増加シ

本年度歳出臨時部

四五、六二五、〇〇〇

ヲ以テ

前年度歳出臨時部

一五九、四三二、〇〇〇

ニ比較スレハ

一一三、八〇七、〇〇〇

ヲ減少スルカ故ニ前記

豫算本論 豫算提出論 提出ノ方法 豫算ノ説明

一三七

ノ減少ヲ見ル
 款項ノ説明
 第一款外務本省
 本年度要求高
 一六四、七五五・〇〇〇

ヲ以テ
 前年度豫算高
 一八五、二五六・〇〇〇
 ニ比較スレハ
 二〇、五〇一・〇〇〇

ヲ減少ス之レ
 第二項 廳費ニ於テ前年度ニ於テ新設セシ在長沙領事館等ノ爲メ通信運搬ノ費用ヲ要スルニ依リ
 一八〇・〇〇〇

ヲ増加スト雖モ
 第一項 俸給及諸給ニ於テ官制改正ノ爲メ定員減少其他ニ依リ
 五、一一八・〇〇〇

ヲ減少シ
 第六項 旅費ニ於テ前年度ノ如ク主任官吏ノ歐米出張旅費ヲ要セサルニ依リ

ヲ減少シ
 第七項 雜給及雜費ニ於テ前項説明ノ如ク主任官吏ノ歐米出張手當ヲ要セサルニ依リ
 一一、〇〇〇・〇〇〇

ヲ減少シ
 第十一項 常設中裁々判所費分擔金ニ於テ前年度實際ノ仕拂高ニ依リ算出セサルニ依リ
 五六三・一〇〇

ヲ減少シ
 合計
 二〇、六八一・〇〇〇

外務省所管（豫定經費要求書）

歳出經常部	科	目	三十八年要求額	前年度豫算額	比較ノ差
第一項 俸給及諸給	第一款 外務本省		一四六、七五五・〇〇〇	一八五、二五六・〇〇〇	一九、五〇一・〇〇〇
			六七、二五〇・〇〇〇	七三、三六九・〇〇〇	五、一一九・〇〇〇

第二項 廳費	第一目 勅任俸給	一九,〇〇〇,〇〇〇	一九,五〇〇,〇〇〇	〇	五,〇〇〇,〇〇〇
	第二目 委任俸給	三三,一〇〇,〇〇〇	三三,〇〇〇,〇〇〇	〇	三,〇〇〇,〇〇〇
	第三目 判任俸給	二五,〇〇〇,〇〇〇	八〇,〇〇〇	〇	〇
	第四目 退官賜金	八〇,〇〇〇	八〇,〇〇〇	〇	〇
	第五目 死亡賜金	四三,〇〇〇	四三,〇〇〇	〇	〇
第一目 備品費	第一目 備品費	三,〇五〇,〇〇〇	三,〇五〇,〇〇〇	〇	〇
	第二目 圖書及印刷費	四,三九九,〇〇〇	四,三九九,〇〇〇	〇	〇
	第三目 筆紙墨文具	二,八〇八,〇〇〇	二,八〇八,〇〇〇	〇	〇
	第四目 消耗品	三,〇六一,〇〇〇	三,〇六一,〇〇〇	〇	〇
	第五目 通信運搬費	五,三三三,〇〇〇	五,一五六,〇〇〇	一,〇〇〇,〇〇〇	〇

第三項 修繕費	第六目 旅券調製品	一,七六〇,〇〇〇	一,七六〇,〇〇〇	〇	〇	
	第一目 各所修繕	四,六八一,〇〇〇	四,六八一,〇〇〇	〇	〇	
	第四項 死傷手當	第一目 死傷手當	一〇,〇〇〇	一〇,〇〇〇	〇	〇
		第一目 訴訟費	一〇,〇〇〇	一〇,〇〇〇	〇	〇
	第五項 賠償及訴訟費	第一目 訴訟費	一〇,〇〇〇	一〇,〇〇〇	〇	〇
第一目 訴訟費		一〇,〇〇〇	一〇,〇〇〇	〇	〇	
第六項 旅費	第一目 內國旅費	一,七六四,〇〇〇	一,三,七六〇,〇〇〇	〇	三,〇〇〇,〇〇〇	
	第二目 外國旅費	五,六八一〇〇	五,六八一〇〇	〇	〇	
第七項 雜給及雜費	第一目 外國旅費	一,三三六,〇〇〇	一,三三六,〇〇〇	〇	一,一七〇,〇〇〇	
	第二目 外國旅費	一,三三六,〇〇〇	一,三三六,〇〇〇	〇	〇	

第一目 給與	八五、〇〇〇	三、八六、〇〇〇	〇	〇	三、〇〇〇,〇〇〇
第二目 雇員給	三、七、〇〇〇	三、七、〇〇〇	〇	〇	〇
第三目 備人料	六、八、〇〇〇	六、八、〇〇〇	〇	〇	〇
第四目 被服費	〇	〇	〇	〇	〇
第五目 雜費	二、七、〇〇〇	二、七、〇〇〇	〇	〇	〇
第八項 備外國人諸給	一〇,〇〇〇,〇〇〇	一〇,〇〇〇,〇〇〇	〇	〇	〇
第九項 電信料	一〇,〇〇〇,〇〇〇	一〇,〇〇〇,〇〇〇	〇	〇	〇
第十項 宴會費	五,〇〇〇,〇〇〇	五,〇〇〇,〇〇〇	〇	〇	〇

第四、歳入歳出現計書

(1) 解説 其ノ年三月三十一日ニ終リタル會計年度ノ歳入歳出現計書トハ、例之明治三十八年度ノ總豫算ヲ提出スルニ當リ、三十七年三月三十一日ニ終リタル會計年度即チ三十五年度ノ歳入歳出現計書ナリ。

茲ニ其ノ年「ト云フハ正確ニ云ヘハ當ラサル場合アリ。即チ豫算ノ提出カ一月ニ至リシトキ是レナリ。故ニ此ノ法文ヲ改メテ其ノ年度ニ最モ近キ會計年度ノ歳入歳出現計書」トナスヲ正シトス。然レトモ多クノ場合ニ豫算ハ十二月中ニ提出セラル、ヲ以テ、議論ヲ生スル虞レ少シ。

(1) 添付ハ目的。豫定經費要求書ハ、經費所要ノ理由計算ノ基ツク所ヲ示スモノナルニ反シ、歳入歳出現計書添付ノ目的ハ豫算ノ議定審査上議員ノ参考ニ供スルニアリ。而シテ前年度ノ決算ハ未タ添付スルコト能ハサルヲ以テ

「其ノ年」

第十一項 常設仲裁裁判所費分擔金	九、三、〇〇〇	一、八八、〇〇〇	〇	〇	五、〇〇〇,〇〇〇
第一目 常設仲裁裁判所費分擔金	九、三、〇〇〇	一、四八、〇〇〇	〇	〇	五、〇〇〇,〇〇〇

前年度ニオケル現計書ヲ以テスルノ外ナシ是ノ現計書ハ翌年ノ豫算ヲ調査スル上ニ於テ最近ノ狀況ヲ伺フニ足ルヘキ適切ノ參考書タルナリ

(3) 調製ノ基礎ハ大藏省ニ備ヘタル主計簿ニ據リ大藏大臣之カ調製ノ任ニ當ルモノトス(會計規則第十四條)

(4) 其ノ内容 歳入歳出現計書ニハ總豫算ニ定メタル區分ニ從ヒ其ノ年三月三十一日ヲ以テ終リタル年度ニ屬スル歳入歳出ノ八月三十一日ニ於ケル(明治十五年勅令第五百三十六號ヲ以テ七月三十一日改メタリ)左ノ事項ノ現計ヲ示スヘシ

歳入ノ部

- (イ) 歳入豫算額(其ノ年度内ニ於ケル歳入ノ豫定額)
 - (ロ) 調定歳入額(調査ノ上收シタルヘキ歳入ノ確定シタル額)
 - (ハ) 收入済歳入額(現ニ收入シタル額)
 - (ニ) 不納缺損額(明治三十五年勅令第二百號ヲ以テ追加セザル額)
 - (ホ) 收入未済歳入額(未ニ收入シタル額)
- 〔備考(イ)ト(ロ)ト(ハ)ト(ニ)ト(ホ)トハ多ク相異ナルヲ常トシ(イ)ト(ロ)ト(ハ)ト(ニ)ト(ホ)トハ(ロ)ト符合スルモノトス〕

歳出ノ部

- (イ) 歳出豫算額(其ノ年度内ニ於ケル歳出ノ豫定額)
 - (ロ) 豫算決定後増加歳出額(追加豫算ノ額)
 - (ハ) 任拂命令済歳出額(實際任拂命令出シタル額)
 - (ニ) 翌年度繰越額(翌年度ヘキ繰越額)
 - (ホ) 歳出残額(明治三十五年勅令第二百號ヲ以テ追加セシメシテ歳出ノ残額ナリ)
- 〔備考(イ)ト(ロ)ト(ハ)ト(ニ)ト(ホ)トハ(ロ)ト符合シタルニ同シ〕

(4) 其ノ形式 試ニ明治三十八年度ノ豫算ニ添付セル現計書ノ一部ヲ例示スレハ左ノ如シ

明治三十六年度歳入歳出現計書緒言

明治三十六年度歳入歳出現計書ハ明治二十二年法律第四號會計法第六條第二項……ニ據リ明治三十六年四月一日ヨリ始マリ翌明治三十七年三月三十一日ニ終リタル會計年度ニ屬スル歳入歳出ノ同年八月三十一日ニ於ケル大藏省ニ備ヘタル主計簿ノ現數ヲ以テ之ヲ調製スルモノナリ

本現計書ニ掲ケル歳入歳入總額ハ若干圓ニシテ之ヲ該年度ノ歳入豫算額若干圓ニ比較スレハ若干圓ヲ減少ス又其任拂命令済歳出總額ハ若干圓ニシテ之ヲ該年度ノ歳出豫算額若干圓ニ

比較スレハ若干圓ヲ減少ス前記收入濟歲入額ノ前記仕拂命令濟歲出額ニ超過スル金額ハ若干圓ナリトス

明治三十六年度歳入

科 目	歳入豫算額	調定濟歲入額	收入濟歲入額	不納缺損額	收入未濟歲入額
第一款 租 稅	一五三,四〇〇,五四一,〇〇〇	一四七,一六五,四九四,七四一	一四六,一五七,九〇六,五八一	四二,四八九,六五三	五九五,〇八九,六九〇
第一項 地 租	四六,八四五,九七一,〇〇〇	四七,一〇一,〇四九,四五五	四六,八七二,八六五,〇七二	二,六七四,〇〇九	二五,九六九,九四四
第二項 所 得 稅	六,二〇九,八〇九,〇〇〇	八,二七七,三五九,九七七	八,三三四,一五二,一〇〇	一三,〇〇八,四五五	二,〇六六,四三三
第三項 營 業 稅	六,六〇四,〇〇〇,〇〇〇	七,〇九一,〇四三,五五一	七,〇四八,三六〇,三六八	一九,三五〇,七九六	二三,四三三,三八七
第四項 酒 稅	六三,八〇五,一〇三,〇〇〇	五三,四五四,九一一,九三三	五二,八二〇,八四二,一九三	三六九,一七三,〇〇〇	二六四,八九三,四九六
第五項 醬 油 稅	三,三三八,四九九,〇〇〇	三,五五四,六七九,三六六	三,五四四,五二八,一八六	六二六,六〇〇	八二〇,九二二
第六項 砂糖消費稅	六,〇〇七,〇〇五,〇〇〇	六,九四二,九六八,九三七	六,九四二,九六八,九三七	〇	〇

明治三十六年度歳出

第七項 賣藥營業稅	二六,九七六,〇〇〇	二二,六七六,五〇〇	二〇,一一〇,〇六七	八七〇,三六三	六,七二〇
第八項 礦 業 稅	七四,〇九一,〇〇〇	八三,五四三,六一	八〇,六一五,一六一	七,〇二七,二八	四,七五七,五一一
第九項 取引所稅	一,〇八七,一八〇,〇〇〇	八二,五六〇,三〇〇	八二,五六〇,三〇〇	〇	〇
第十項 兌換銀行券發行稅	一,一四五,四一六,〇〇〇	八二五,六〇二,九七〇	八三三,六〇二,九七〇	〇	〇
第十一項 沖繩縣酒類出港稅	一五四,四二〇,〇〇〇	三〇六,三三三,七〇〇	三〇六,三三三,七〇〇	〇	〇
第十二項 噸 稅	三六,三五〇,〇〇〇	四三〇,五三〇,〇〇〇	四三〇,五三〇,〇〇〇	〇	〇
第十三項 關 稅	一七,〇五五,六一一,〇〇〇	一七,四三三,六五四,八八八	一七,三七八,〇三三,八三八	一四二,三八五	五四,二二〇,六五五
第十四項 舊稅追納	〇	三,七九九,九三六	二,一〇四,五〇〇	一,五〇九,四四六	一四九,八八二

科 目	歳出豫算額	豫算決定後増加歳出額	仕拂命令濟歲出額	翌年度繰越額	歳出殘額
-----	-------	------------	----------	--------	------

豫算本論 豫算論 提出ノ方法 豫算ノ説明

外務省所管									
第一款 外務本省	一八五,五六〇〇	一四,三三,三〇〇	二九八,九七四,三三三	〇	一〇,六〇,七六八				
第一項 俸給及諸給	七三,三六九,〇〇〇	〇	七二,五三四,二七	〇	八四,六八				
第二項 廳費	一〇,一四,〇〇〇	〇	一九,八三四,八六	〇	二七八,五二四				
第三項 修繕費	四,六八,〇〇〇	〇	四,六六一,六九八	〇	一一,〇〇〇				
第四項 死傷手当	一〇,〇〇〇	〇	〇	〇	一〇,〇〇〇				
第五項 賠償及訴訟費	一〇,〇〇〇	四,三三,〇〇〇	四,一四二,六七	〇	一六七,七三				
第六項 旅費	一三,七六四,〇〇〇	〇	七,七八四,二六	〇	五,九八,五七四				
第七項 雜給及雜費	一七,八〇七,〇〇〇	〇	一四,九六六,六三八	〇	二,八四〇,三三				
第八項 借外國人諸給	一〇,〇〇〇,〇〇〇	〇	一〇,〇〇〇,〇〇〇	〇	〇				
第九項 電信料	二〇,〇〇〇,〇〇〇	一,一〇,〇〇〇,〇〇〇	一八〇,〇〇〇,〇〇〇	〇	〇				

第十項 宴會費	五,〇〇〇,〇〇〇	〇	四,九九九,四七五	〇	〇
第十一項 常設仲裁裁判所費分擔金	一,四八五,〇〇〇	〇	一,〇三三,九三五	〇	四三二,〇六五

第五、特別會計及追加豫算ノ添付文書

以上本款ニ於テ述フル所ハ、總豫算ニ關スル添付文書タリ、次ニ特別會計並ニ追加豫算ニ添付スル文書ニツキ簡單ニ述ヘントス

(1) 特別會計添付文書

是ハ其ノ各所管大臣カ

(イ) 歳入歳出ノ豫定計算書

(ロ) 其年三月三十一日ニ終リタル會計年度ノ受拂勘定表及ヒ

(ハ) 同シク其年三月三十一日ニ終リタル會計年度ノ固定資本價格増減表

ヲ調製シテ、特別會計ノ提出ニ際シ之ニ添付スルモノトス、コノ事ハ例之作業及ヒ鐵道ノ特別會計ニツキテハ、明治二十三年勅令第二十三號作業及鐵道會計規則第六條乃至第八條ニ之ヲ規定セリ。

(2) 追加豫算添付文書

追加豫算ニ付テハ我國ニテハ、

(イ) 歳入豫算追加明細書

(ロ) 豫定經費追加要求書

ノ二者ヲ参照トシテ添付スルコト慣例トナレルカ如シ

第六、豫算外國庫ノ負擔トナルヘキ契約ニ關スル添付文書

右ニ付テハ、我國ニテハ参照トシテ各省ニオケル豫算外國庫ノ負擔トナルヘキ契約ヲ爲スノ要求書ヲ添付スルモノトス。

第二部 豫算協賛論

第一章 協賛ノ機關

第一節 機關ノ組織

第一、二院制ト豫算ノ協賛

議會ヲ以テ立法府トナシ、國政參與ノ機關トナスニ當リテ、其ノ組織ハ一院制ヲ可トスルヤ、二院制ヲ可トスルヤハ、從來爲政家及ヒ學者ノ論シ盡シタル所ニシテ、一般ノ定論ニ依レハ、原則トシテハ兩院制ヲ可トシ、唯特別ナル事情アル國家ニ於テノミ一院制ヲ採ルヘシト云フニ取スルモノ、如シ。豫算ノ協賛ハ、何レノ國ト雖モ議會ノ最大至要ノ職務トスル所ニシテ、又爭論ノ燒點タル所ナリ。從テ議會ノ組織如何ハ、豫算議決ハ上ニ大ナル關係アルモノトシテ研究セサル可カラス。

普通ニ二院制ノ長所トシテ數ヘラル、モノ、左ノ如シ

第一、二院制ハ政府ノ更迭ト議會ノ解散ヲ少カラシム

第二、二院制ハ君主ノ尊嚴ヲ維持セシム

第三、二院制ハ一時ノ感情ヲ以テ前後矛盾ノ議次ヲナスノ弊ヲ和ラケ國政

ノ基礎ヲ鞏固ニス

第四、二院制ハ一院制ヨリモ審議ヲ鄭重ニスルヲ得

即チ第一ト第二トハ議會專横ノ危險ヲ防ク所以ニシテ、此ノ危險ノ濫用ハ集合

體ヨリ來ル場合ヲ最モ怖ルヘシトナス。何トナレハ多數ノ人ヨリ組成スルヲ以テ、情欲發作ノ度數ハ個人ヨリ甚シク、又之レヲ行使スル力ハ個人ヨリ強盛ニシテ、而シテ其ノ責任ノ販スル所ハ箇々ノ議員ニ採リテハ極メテ輕ケレハナリ。第三ト第四トハ、急激ノ政變ヲ豫防スル所以ニシテ、改正ニ熟慮ノ時日ヲ與ヘ存續ニ必要ナル期間ヲ與ウルモノナリ。北米合衆國獨立ノ際、ワシントン及フランクリンハ一夕議會ノ組織ニ付テ議論ヲ戰セルコトアリ、フランクリンハ熱心ナル一院論者ナリ、痛論ノ餘側ニ在リシ茶ヲ喫シテ熱ニ堪エス、其茶ヲ唾壺ニ投棄ヒシカハ、ワシントン之ヲ見テ微笑シツ、貴下ハ余ニ對シテ兩院ノ有益ナル理由ヲ示スコトヲ求メラル、モ、貴下ハ却テ余ニ其ノ例證ヲ示シタルニアラスヤ。上院ハ下院ノ沸騰セル熱氣ヲ冷却スル場所タリトイヒシハ人ノ熟知スル談柄タリ、又ワシントンカ千七百八十七年ニ於テ「元老院ハ人民ノ無思慮ナル輕舉ニ對シテ人民ノ權利ヲ防衛スル權力ヲ有セサル可ラス」ト論シタルカ如キ、佛國ノ「チエルカ」千八百七十三年ニ於テ「上院ハ抵抗院ト稱セサル可ラス」トナシ、上院ハ常ニ下院ノ防制ヲ其ノ職トナシ、無謀ナル改革ニ對シテ民主制度ヲ保護セサル

可ラスト論セシカ如キ、其ノ説ク所口ノ語氣稍過激ナルヲ免レサルモ、ヨク眞理ヲ道破シタルモノナリト云ハサルヲ得ス。

要之、二院制ハ原則トシテ議會組織ノ適當ナル方法ニシテ、從テ、常ニ議會ノ爭論ハ燒點タル豫算ノ議定ニ就テハ、殊ニ二院制ハ必要ナルコトヲ信スルモノナリ。之ヲ以テ歐米諸國ノ例ニ付テ見ルモ一院制ハ希臘、塞耳比、墨西等ニ於テ其ノ例ヲ見ルノミニシテ、一般ニ二院制若シクハ二院制ニ類似セル制度例之獨逸ニ於テハ一院制ナリルモノ實際ニハ、聯邦參議院ナラ採ルモノトス。彼有名ナル米國ノハミルトシテ、トシテ二院制ナクシテハ米國ナカルヘシト、佛國ノ名士ガンベツタハ晩年ニ至リ一院論ヲ棄テ二院制ヲ主張シテ、曰ク「上院ハ社會動亂ノ際民主制ヲ防衛スル最後唯一ノ保護府ナリ」ト而シテ實例ニ徵スルモ、彼ノ瑞典ノ如キハ、千八百六十六年迄ハ一院制ヲ用ヒタリシモ、同年ニ至リテ二院制ニ改正セリ。

第二、上院ノ組織

以上説ク所ヲ以テ、略議會組織ノ體様ニ付テ説明シ了セリ、然ルニ茲ニ尙ホ附加シテ論スヘキコトアリ。即チ上院ノ組織ヲ全ク勅選ノ終身議員ヲ以テセシムル

コトノ利害コレナリ。

吾人ノ見ル所ヲ以テスレハ、上院ノ組織ヲ全ク勅選ノ終身議員ヲ以テ成ラシムルハ最モ不可ナリ。嘗ニ世襲貴族ヲ以テ組織スルヨリ善良ナラサルノミナラス却テ害悪アリ。何トナレハ、事實ノ上ニ付テ考フルニ、世襲貴族ハ其ノ貴族タル特定ノ資格ニヨリテ、政府當局者ト何等ノ關係ナク、上院ノ議席ヲ占ムルコトヲ得ルモノナリ。從テ箇人ノ特別ノ事情存セサル限りハ、他ヨリ何等ノ羈束ヲ蒙ラサルヘク、其ノ思想言論ハ常ニ自由ナルコトヲ得ヘシ。然ルニ勅選セラレタル終身議員ハ、動モスレハ其ノ選定カ其當時ノ政府ノ利害關係ニヨリテ行ハレ、彼等ハ爲メニ將來ノ政治上ノ行働ニ於テ、利害上感情上等ヨリ左右セラル、ノ虞レアリ。コレ實ニ豫算議定ノ如キ重大ナル事柄ノ場合ニ最モ利用セラレ、易キモハナリト云ハサル可ラス。

斯クノ如キハ、外國ニ其ノ例ヲ見ル所ニシテ、佛國ノ七月王制ノ時代ノ如キ、王ハ全ク上院ノ組織ヲ左右スルノ特權ヲ有シ、上院ハ常ニ王權ト混同セラレタリ。而シテ此ノ事例ハ西班牙葡萄牙ニ傳播シ、今日ニ於テハ伊太利ニ於テ之ヲ見ル。伊

太利ハ其ノ憲法第三十三條ニ規定セルカ如ク、元老院ハ全ク國王ヨリ選任セラレタル終身議員ヨリ成リ、而シテ其ノ人員ニ制限ナシ。國王又ハ政府ハ必要ノ場合ニ於テ議員ヲ増加シテ其意見ヲ上院ニ行フコトヲ得ヘシ。之ヲ以テ彼ノ西班牙、葡萄牙、丁抹等ノ原則トシテ此制度ヲ維持スル國モ、一部分ハ選舉ノ方法ニヨリテ議員ヲ舉クルヲ見ルナリ。白耳義ノ如キハ千八百三十一年ニ於テ、上院ハ凡テ選舉ニ由テ組織セララル、モノトシ、白耳義ルーマニア和蘭、瑞典ノ諸國ニ於テハ財產ヲ以テ資格ノ要件トシ、千八百六十九年ノ西班牙憲法ニテハ曾テ或ル官職或ハ職ニ在リタルコト又ハ學識アルアトヲ資格ノ要件トシタリ。又直接選舉法又ハ複選法ヲ以テ議員ヲ選任スルアリ、和蘭、北米合衆國、佛國等ノ如シ。

第三〇。結論。

我國ノ制度ハ人ノ熟知スル如ク、兩院制ヲ採リ貴族院及ヒ衆議院ヲ以テ成リ、而シテ貴族院ハ世襲貴族ノ分子、終身勅選ノ分子、選出任命ノ分子ヨリ成リ、而シテ終身議員モ學識勳功ノ人士中ヨリ選フコト、シ、歐米文明國ノ例ニ徴シテ其ノ可ナルモノニ從ヘズ。故ニ我國ニ於テハ議會ノ組織ニ付テ上記ノ議論ヲナスノ

餘地ナキハ論ナシ。唯吾人カ本節ニ於テ特ニ論說スル所以ハ、一般ニ豫算ノ議定等重要ナル國務ニ付テ至大ナル關係ヲ有スルカ爲メノミ。

第二節 下院ノ先議權

第一、下院先議權ノ起源

英國

豫算ハ先ニ下院ニ於テ議定ス可キモノナルコトハ、現今諸國ノ憲法ノ原則トナレリ。此ノ原則ハ他ノ憲法上ノ原則カ其ノ起源ヲ英國ニ有スル如ク、亦英國ニ淵源セルモノナリ。

國王ハ第一ニ代議院ノ承諾ヲ求メサル可カラサルヲ以テ、凡テ租税ノ賦課ハ先ツ代議院ニ於テ議決スルヲ例トス。トノ決議ヲナセシハ、實ニ千六百七十八年ニ在リ。彼ノブラックストン氏ハ曰ク、凡テノ給與ハ上院モ亦議決ニ與ルノ權ヲ有セサルニアラスト雖モ、是レ實ニ代議院ノ職權トスル所ニシテ、第一ニ彼ニ依リテ議決セラレサル可カラストハ、代議院ノ古來ヨリ有スル特權ニシテ争フ可カラサル權利ナリト。

惟フニ人ノ知ル如ク、英國ノチユードル及チチャルト王朝ノ下ニ於テハ、貴族ハ常ニ人民ニ反對シテ王家ノ利益ヲ助ケタリ。故ニ千六百四十八年ニハ代議院ハ其ノ復仇トシテ上院ヲ廢止セリ。而シテ其ノ後上院ノ存置ハ復舊セラレテ上下兩院並ヒ立ツコト、ナリシモ、代議院ハ之レニ代フルニ其ノ存立ヲ確實ニスルノ保證ヲ實行セリ。是レ即チ豫算ノ先議權ノ起源ナリ。

代議院ハ國王ハ已ニ依ルニアラサレハ一錢ノ支出ヲナスヲ得サルコトヲ知ル。然レトモ若シ先ツ上院ニ向テ其ノ要求ヲナスコトヲ得セシムルトキハ、國王ハ遂ニ上院ノ議決ノミヲ以テ十分ナリトナシ、代議院ヲ召集スルノ必要ナシト信スルニ至ルヤモ知ル可カラス。當時ノ上院ハ世襲ナリシヲ以テ常ニ成立セシモ、代議院ハ之ニ反シテ國王ノ詔勅ニ由リテ召集セラレシヲ以テ、其ノ成立ハ一ニ國王ノ意思如何ニカ、レリ。之レヲ以テ財政法案ニ付テハ代議院ハ自カラ其ノ死生ヲ賭シテモ、上院ヨリ重大ナル權力ヲ占有スルノ必要ヲ生シタリ。是レ代議院ニ租税案ノ先議權ヲ與フルニ至リシ所以ナリ。爾來豫算ノ提出ハ、兩院ノ何レヲ先ニスルモ勝手タリシ國王ノ自由ハ消滅シ、國王ハ先ツ代議院ニ要求スルニ

豫算本論 豫算協賛論 協賛ノ機關 下院ノ先議權

アラサレハ、其ノ政府ノ行政ニ必要ナル費用ハ之ヲ得ルコト能ハサルニ至レリ。豫算先議權ノ起源ハ斯クノ如キモ、其ノ後ニ至リ此ノ特權ヲ廢止シ、豫算ノ提出ハ國王ノ意思ニヨリ二院中何レヲ先キニスルモ妨ケナキノ制度トナサンコトヲ主張セシ者、英國人士中ニ少カラサリキ。而モ之レカ事實上ノ問題トナリシコト尠ナシ。何トナレハ、其ノ始メニ當リテハ貴族ノ勢力ハ旺盛ニシテ彼等ハ一方ニ大地主トシテ下院議員ヲ選出左右スルノ權威アリ、之ニ由テ選出セラレタル議員ハ大地主タル貴族ニ逆フコトナカリシヲ以テ貴族等ハ實際ニ於テ豫算先議權ニ付テ痛痒ヲ感セサリキ。又其ノ後ニ至リテハ、千八百三十二年ノ選舉法ノ改正ハ貴族ノ選舉上ニ有セシ勢力ヲ破壊シ、爾來代議院ハ益其ノ地歩ヲ鞏固ニシ、今ヤ上院ハマタ昔時ノ如ク權力抗爭ノ元氣ヲ有セサルニ至リシヲ以テナリ。

但シ千八百三十年國王ハ、財政ニ關係シテ有スル一議案ヲ先ニ上院ニ提出シ、代議院ト抗爭ヲ起シタルノ例アリ

第二、諸國ノ制度

豫算先議權ハ、斯ノ如ク英國ニ根據ヲ發シテ諸國ノ憲法上ノ原則トナリ、一般ニ此特權ヲ認メラル、ニ至リシモ、尙多少ノ異例ナキニアラス。瑞西ノ如キハ全然

下院ノ先議權ヲ非認スルモノニシテ、北米、合衆國ノ如キハ唯歳入ニ付テ、下院ノ先議權ヲ認ムルノミ。而シテ彼ノ獨逸帝國ノ如キハ一院制度ナレトモ、尙二院制度ノ如キ働キヲナスモノトス。以下少シク此等ノ國ニ付テ述フヘシ。

獨逸帝國ハ、唯一ノ帝國議會ヲ有スルノミナレトモ、別ニ主權ヲ有スル聯邦參議院ナルモノアリ。聯邦ノ代表者ニ由リテ組織セラル。獨逸帝國ノ豫算ハ第一次ニ總理大臣ヨリ聯邦參議院ニ提出ス。聯邦參議院審議ノ後之ヲ採用スレハ皇帝ニ奉呈シテ而後之ヲ帝國議會ニ提出ス。議會ハ三議會ノ審議ヲ經テ總理大臣ニ返附シ、總理大臣ハ更ニ之ヲ聯邦參議院ニ提出シテ其議定ヲ經ヘキモノトス。

瑞西ニ於テハ、千八百四十八年ヲ以テ佛國カ一院論ヲ實地ニ施行セントスルニ當リ、兩院制度ヲ宣告シタリ。之ニ由ルトキハ、一院ハ各州ノ人口ニ比例シ直接ニ人民ヨリ選舉セラレ、以テ國民ノ代議機關トナリ、一院ハ複選法ニ由リ各州ヨリ各二人ヲ出シ、三十四人ノ議員ヲ以テ組織シ、以テ聯邦ノ代表機關タリ。前者ハ人民ノ直接ナル縮影ニシテ、後者ハ聯邦組織ノ反射タリ。瑞西人ハ惟ヘラク、單一國家ニ於テ君主カ稍モスレハ其ノ權力ヲ弄シテ暴逆ノ惡政ヲナスト同シク、聯邦

組織ノ國家ニ於テ最モ恐ルヘキハ、ワシントンノ曰ヘルカ如ク「人民彼レ自身ニアリ」即チ人民ノ代表機關タル下院ニアルナリ故ニ下院ノ有スル權力ヲ分チテ上院ニ與ヘ、對等ナル地步ヲ占メシムルハ、嘗ニ聯邦間ノ關係ヲ圓滑ナラシムルノミナラズ併セテ民主國ニ共有ナル弊害ヲ防クコトヲ得ヘシト、而シテ其ノ各州ニ於テ、大會議 (Grand Council) カ豫算發案ノ全權ヲ握リテ弊害ヲ及ホシタル實例ハ、瑞西ノ立法者ヲシテ益戒心セシメ、遂ニ豫算ノ提出ハ兩院ノ何レヲ先ニスルモ妨ケナキコトヲ規定スルニ至ラシメタリ、而シテ兩院ノ間ニ、全然對等ノ關係ヲ保タシムルカ爲ニ、兩院順次ニ先議權ヲ行フコトヲ議會ニ於テ決議シ、此ノ決議ハ議院ノ慣例トナルニ至レリ。

合衆國ニ於テハ其ノ各州ハ却テ豫算議定權ニ付テ兩院ノ間ニ區別ヲ設ケサルニ反シテ、其ノ連合國家タル合衆國ニ於テハ、下院ノ先議權ヲ認ムルヲ見ル。今其ノ原因ヲ考フルニ、米國々會ハ自ラ當然集會スルヲ得、從テ英國ノ如クニ行政權ヲ以テ國會ヲ召集セサルカ如キコトナク、此ノ點ヨリ云ヘハ下院ノ先議權ヲ認ムルノ必要ナキカ如キモ、米國ノ憲法史ヲ讀ム人ノ知ルカ如ク、合衆國獨立ノ始

メニ當リ大州ト小州トノ間ノ調和動モスレハ圓滿ナラス、彼ノフランクリンノ如キハ議事中屢日光カ朝暉ナルカ將タ夕日ナルカヲ熟考シ、始メテ其ノ朝暉ナルコトヲ知リタルコトアリシト云フ同氏書狀一節是ヲ以テフランクリンハ苦心ノ餘遂ニ一ノ救濟方法ヲ發明シ、代議院ハ各州人口ノ比例ニヨリテ人民ヲ代表セシメ、一方ニ元老院ヲシテ平等ニ各州ヲ代表セシメテ、人民ト聯邦トノ利益ヲ代表セシメ、以テ其ノ調和ヲ計ルト同時ニ元老院ニモ豫算修正權ヲ完全ニ與フル代リニ、豫算先議權ノミハ代議院ニ專屬セシムルコト、ナセリ。是レ即チ同國憲法第一章第七條ニ規定セラル、所ニシテ、凡テ歳入ヲ徵スル法案ハ先ツ是レヲ代議院ニ提出スヘシト雖モ、元老院ハ他ノ法案ニ於ケルカ如ク是ヲ修正議決スルコトヲ得ヘシトシタル所以ナリ。

第三、現今ニオケル豫算先議權ノ基礎。

下院ノ豫算先議權ハ、我國ノ憲法ニ於テモ認ムル所ニシテ、第六十五條其ノ之ヲ憲法ノ條章中ニ置ケルハ強チニ沿革的ノ根據ヲ有スル外國ノ憲法ヲ模倣シタルモノトノミ考フ可カラス、若シ沿革的ノ理由ニ付テ考フレハ、今日ニ於テハ其

ノ必要ヲ見サルモノト云サル可カラス。何トナレハ、現今ニ於テハ國家ノ團結カ鞏固ニ、君民ノ間其ノ約束ヲ守ルコト公明ニシテ、當ニ議會ヲ開カサルカ如キコトナキノミナラス、各國ノ憲法ハ議會ヲ年々開クヘキコトヲ規定シ、君主ハ喜ンテ是レヲ開クモノナレハナリ

惟フニ各國ノ國法ニテ豫算先議權ヲ認ムル真正ナル根據ハ國家ノ財政ノ負擔者ニヨリテ提出セラレタル議員ハ、又財政ニ關シテ民間ノ事情ニ精通シテ其ノ利害ヲ表明スルモノタルト、下院ハ人民ノ納稅關係ヨリシテ通常通過スルコト上院ヨリモ難キヲ以テ寧ロ其ノ難キヲ先ニセントハ、政策上ノ理由ニ依ルモノナリトセサル可カラス。

第三節 上院ノ修正權

第一、總說

豫算ノ先議權カ下院ニアルコトハ前節述フルカ如ク、僅少ノ例外ヲ除キテ、諸國ノ法ノ普通ニ認ムル所ナリ。然ルニ一步ヲ進メ、下院カ豫算ヲ議定シテ上院ニ送

付セシ場合ニ、上院ニ之ヲ修正スル權利ヲ有スルヤ否ヤニ付テハ、諸國ノ法制ハ一致セス、或ハ修正權ヲ完全ニ認ムルモノアリ、或ハ之ヲ非認スルモノアリ。

第二、修正權ヲ非認スルモノ

豫算ニ關シテ、上院ノ修正權ヲ非認スル例ヲ作リタルハ、下院先議權ノ例ヲ作りタルト同シク、英國ニアリ而シテ同國ニ於テ之レヲ明文ニ掲ケシハ、千六百二十五年ニ於テ「政費ヲ供給スル所ノモノハ國會ニ召集セラレタル陛下ノ人民ナリ」ト決議シタルヲ以テ嚆矢トス。然ルニ千六百七十一年ニ於テハ下院ハ更ニ一步ヲ進メテ、人民カ王ニ與フル所ノ總テノ供給ハ何人タリトモ修正スルコト能ハスト決議シ、又千六百七十八年ニ於テハ「陛下ノ奉スル所ノ總テノ供給及ヒ補助ハ人民ノ純粹ナル贈物ナリ、是等ノ補助供給ヲ承諾スル所ノ原案ハ先ツ下院ニ於テ議決スヘク、是等供給ノ目的條件及ヒ制限等ヲ定ムルハ人民ノ疑フヘカラサル權利ニシテ上院ハ之ヲ修正シ變更スヘカラス」ト議決セリ。斯クノ如クシテ、上院ノ修正權ハ全然非認セラレテ一ハ慣例トナルニ至レリ。其ノ後千八百六十年ニ至リテ一度問題ヲ惹起セシモ、爾後此慣例ハ復確固動カスヘカサルモノト

字漏西

ナレリ。ブラックストン曰ク、上院ハ國王ノ命ニ由テ定メラレタル世襲ノ團體ナリ。故ニ人民ノ自由ナル意思ニ由テ選舉セラレタル任期アル下院ニ反シテ、國王ノ威權ニ左右セラレ、コト容易ナリトス。是レ下院ノ議決冗費多キニ過キ、又ハ其ノ讓與保護等ヲ無謀ナリト信スル場合ニ於テ、之ヲ廢棄スル權利ヲ有セ、ハ足ル所以ナリト。以テ英國々風ノ精神ヲ知ルニ足ルヘシ。

此ノ英國ノ慣例ハ、大陸諸國殊ニ獨逸諸國ノ採用スル所トナレリ、例之字漏西憲法第六十二條ニ曰ク。

國家ノ財政ニ關スル法律案及豫算案ハ、前ニ衆議院ニ提出スヘシ。貴族院ハ唯其ノ全體ニ付テ可否スルヲ得ルノミ。

其他瓦執堡憲法第八十一條、巴典憲法第六十條ノ如キモ同様ノ規定ヲ存セリ。第三、修正權ヲ認ムルモノ。

豫算ニ關シテ上院ハ下院ト同シク完全ノ修正權ヲ有ストナスモノニハ、佛國及ヒ米國ノ如キアリ。

佛國

佛王ルイ十八世ハ、勉メテ英國ノ制度ヲ輸入センコトヲ欲セシモ、獨リ豫算ノ上

合衆國

院修正權ニ付テハ、英國ノ制度ヲ採用セス。其ノ憲法第二十條ニ曰ク「兩院ハ各修正ノ要求ヲ爲スコトヲ得ヘシト。而シテ今日ニ於テモ此ノ原則ハ承認セラレ、修正權ニ付テハ兩院ノ間ニ毫モ差異ナキコト、ナリ居レリ。然レトモ事實上ニ於テハ、佛國ニ於テモ上院ノ勢力ハ遙カニ下院ニ及ハス。上院自カラモ其勢力ノ侵犯ニ對シテ、無頓着ナルカ如キ有様ナリキ。例之、千八百三十七年貴族院豫算報告委員ノ報告ニ曰ク、一年限リノ目的ヲ以テ規定スル豫算ニ關シテハ、貴族院ハ代議院ノ見込佳良ナリト信スル場合ニハ、修正ノ方法ヲ取ルヨリモ彼レノ注意ヲ喚起シテ、自ラ匡正スルノ道ニ依ラシムルコトハ寧ロ自然ノ道理ナリ。而シテ斯クシテ提起セラレタル注意ハ、却テ代議院ニ於テ採用セラレタルコト多キヲ認ムヘシト。而シテ現今ノ實際モ、上院ノ權限ハ下院ニ一步ヲ讓レリ。

合衆國ニ於テモ、先議權ハ下院ノ有スル所ナルモ、歳入ニ關シテ修正權ニ至リテハ兩院同等ナリ。即チ同國憲法第一章第七條ハ規定シテ曰ク、

凡ソ歳入ヲ徵スル法案ハ、先之ヲ代議院ニ於テ提出ヘシト雖モ、元老院ハ他ノ法案ニ於ケルカ如ク、之ヲ修正議決スルコトヲ得ヘシ。

而シテ實際ニ於テモ、合衆國ノ元老院ハ其ノ勢力却テ代議院ヲ凌クノ風アリ、從テ上院ハ其ノ修正權ヲ使用シテ毫モ假ス所ナク、現ニ千八百七十六年ノ如キハ、歲出豫算ニ付テ増加スルコト原案ヨリモ一千万圓ノ巨額ニ達セリト云フ。而シテ之ニ伴フ弊害トシテ、兩院ノ議相合ハサルカ爲メニ屢豫算ノ不成立ヲ見、必要ナル費目ノ支出ヲナシ能ハサルカ如キコトアルハ、千八百七十七年ノ事例ヲ始メトシテ同國財政史ヲ讀ム者ノ常ニ遭遇スル所ナリトス。

第四、我國ノ制度

我帝國憲法ニ於テハ、其第六十五條ニ於テ衆議院ノ豫算先議權ヲ認ムルニ關セ、貴族院ノ修正權ニ付テハ何等ノ規定ナシ故ニ憲法上我國ニテハ貴族院ハ衆議院ト同シク完全ナル修正權アルモノト云ハサル可カラズ。從テ議院法第十二章兩議院關係ニ於テ規定セル所ハ、豫算ニモ適用セラル可キハ論ヲ談タス。然ルニ此事ハ曾テ第三回帝國議會ニ於テ爭論トナリシ所ナリ。當時貴族院ノ上奏文ニ曰ク。

本院ハ政府ヨリ提出シ衆議院ヨリ送付サレタル明治二十五年度歲入歲出總豫算追加案ヲ議スル

ニ當リ衆議院ノ削除シタル云々ノ兩款ヲ急要ノ歲出ナリト認メ憲法ニ依リテ與ヘラレタル協贊ノ權ニ依リ政府ノ原案ニ基キ衆議院ノ修正案ヲ修正シ議院法第五十五條ニ依リ衆議院ニ移シタリ抑豫算案ハ前ニ衆議院ニ提出セラル、ノ外憲法上豫算ニ對スル協贊ノ職權ニ於テ兩院ノ間ニ輕重スル所ナキヲ信シ又、此職權ニ於テ修正ヲ行フニ當リ政府ノ提出セル原案ノ款項ヲ復スルニ付テハ法律上何等ノ制限ナキヲ信ス是ヲ以テ本院ハ憲法ノ命スル職務ヲ盡シ且議院法ノ手續ヲ履ミ以テ衆議院ノ同意ヲ求メタリ然ルニ衆議院ハ更ニ之ヲ挿入シタルハ不合法ノ議決ナルヲ以テ回付ヲ受クヘキモノニアラストシテ返付セリ本院ニ於テハ本院ノ議決ヲ合法ノモノト確信スルヲ以テ之ヲ衆議院ニ回付シタルニ衆議院ヨリ再應返付シ兩院ノ所見遂ニ相合フ能ハサルニ至レリ今憲法上ノ疑義ニ關シ兩院ノ所見互ニ相合ハス從テ憲法ニ進行ヲ現在及將來ニ妨グルノ懼アルニ於テ本院ハ謹テ狀ヲ具ヘ上奏シ仰テ

聖明ノ親裁ヲ待ツアルノミ云々

而シテ之ニ對スル勅語左ノ如シ

憲法上豫算ニ對スル貴族院及ヒ衆議院ノ協贊權ハ我帝國憲法第六十五條ニ依リ衆議院ハ貴族院ニ先テ政府ヨリ豫算案ノ提出ヲ承クルノ外兩院ノ間ニ軒輊スル所ナキモノナリ故ニ後議ノ議院ハ前議ノ議院ニ對シテ何等羈束セラル、所ナク從テ前議ノ議院ニ於テ削除セル款項ヲ在留スルハ素ヨリ後議ノ議院ノ修正權内ニ屬スヘキモノトス但シ後議ノ議院ハ前議ノ議院ニ對シ議院法ノ命スル所ニ依リ同意ヲ求ムルヲ以テ唯一ノ手續トスルノミ

之ニ依リテ爾後貴族院ノ修正權ニ付テ疑ヲ挿ムモノナキニ至レリ

豫算本論 豫算協贊論 協贊ノ機關 上院ノ修正權

第五、兩院議決不致ノ救濟法。

斯クノ如ク上院ノ豫算ノ修正權ヲ認メタル結果トシテ、兩院ノ議決一致セサルコトアルヘシ。此場合ニ於テ豫算ノ不成立トナルハ勿論ナレトモ、其不成立トナル以前ニ於テ相當ノ救濟法ニ由リテ之ヲ調和スルハ望マシキコトナリ。今諸國ノ法制ニ付テ見ルニ

(1) 數回ノ回付制、伊太利、西班牙等ニ於テ採ル所ニシテ、即チ甲院カ送付シタル案ヲ乙院ニ於テ修正シタルトキハ、之ヲ甲院ニ送り、甲院ハ再議シテ乙院ニ送ル。此ノ如ク互ニ往復審議シ、兩院ノ議一致スルニ至テ止ム、一致セサレハ原案ヲ廢棄ス。

(2) 兩院通算制、瓦孰堡、巴典等ニテハ、上院ノ修正權ヲ認メサルモ之ヲ否決スルコトヲ得ヘシ。此場合ニハ、兩院院贊否ノ數ヲ合計シ、其合計シタル投票ノ多數ニ因リ議會ノ決ヲ取ル。若シ投票同數ナルトキハ、下院議長之ヲ決スルモノトス。瓦孰堡憲法第六十一條、巴典憲法第六十一條

(3) 兩院協議會制、是レ米佛等一般ニ行ハル、所ニシテ、我國モ亦此制ヲ採ル、

即チ兩院ノ議相合ハサルトキハ、各同數ノ委員ヲ選出シテ協議會ヲ組織シテ之ヲ議シ、而シテ後更ニ各院ニ於テ協議案ヲ議題トシテ議定セシムルモノナリ。

而シテ以上ノ三種ノ方法中、第一ノ制ハ徒ニ手數ヲ煩ハシテ實蹟ハ疑ハシク、第二ノ制ハ簡便ナル如キモ兩院特定ノ原則ニ反シ、且故ラニ議決ヲ強制スルノ議ヲ免レズ、獨リ第三ノ制度ハ強テ議決ヲ要求スルコトナク、處置公平ヲ得テ然モ實蹟ノ見ル可キモノアリ救濟法トシテ最モ良好ナルモノト云フヘシ。

第二章 協贊權ノ範圍

第一節 諸國ノ制度

第一、歳入ニ關スル諸國ノ制度。

歳入ニ關スル議會ノ協贊權ノ範圍ニ付テハ、諸國ノ制度ハ、大略二様ニ分タル。

第一、永久法律制度。

第二、豫算法律制度。

是レナリ。永久法律、制度トハ、歳入ノ大部分ニツキテハ永久ニ效力ヲ有スル（之ヲ變改セサル限リ）法律ノ規定アリ、此ノ規定ノ執行ニ依リテ國家ノ收入ヲ得ルモノナリ。故ニ此ノ制度ノ下ニ於テハ、豫算ハ唯歳入ノ豫測ヲナシ、以テ歳出豫算ヲ定ムルノ材料ニ供スルニスキサルナリ。而シテ此ノ制度ハ漸次諸國ノ間ニ勢力ヲ得ルコト、ナレリ。例之英國、如キハ、元來國會ノ起源ヲ人民ノ租稅承諾權ニ發シ、從テ歳入ノ議定ハ議會權能ノ最重要ナルモノト見做サレシモ、現今ニ於テハ、租稅ノ大部分ハ永久ノ效力アル法律ニ依リテ確定セララル、ニ至レリ。次ニ豫算法律、制トハ前者ニ反シ、政府ハ毎年豫算法律ナルモノヲ議會ニ提出シ、歳入ハ此ノ内ニ規定セラレテ、毎年議會ノ議定ヲ經ルコトヲ要スルモノナリ。即チ永久法律制ニ於テハ歳入ハ永久、的、の、効、力、ヲ有スルニ反シ、豫算法律制ニ於テハ歳入ハ年々ハ豫算ノ議決ニ由リテ決定セララル、モノナリ。此ノ主義ヲ執ル國ハ、現今ニ於テハ佛國并ニ獨逸帝國（帝國内ノ諸國ニ反ス）ヲ主ナルモノトシ、北米合衆國內ノ諸州亦之ヲ採ルモノ多シ。例之佛國ノ如キハ、千八百三十年ノ規定ニカ、ル憲法第四十一條ニハ「直稅ハ、一年ノ爲ニノミ決議スヘシ、間稅ハ數年ノ爲メ一度ニ決議スル

コトヲ得」ト規定セリ。佛國ニ於テ豫算法律ハ歳入歳出ヲ確定スル法律ト稱シ、此法律ハ毎年議定スルモノトス。故ニ若シ議會ニシテ歳計豫算ヲ議決セスシテ附會スルトキハ、如何ナル租稅モ徵收スルコト能ハサルコト、ナル。獨逸帝國ニ於テハ、其歳入ノ小部分ハ永久法律ヲ以テ徵收スル租稅ヨリ成立スト雖モ、其ノ大部分ハ即チ聯邦分擔額ニシテ、此ノ聯邦分擔額ハ憲法第七十條ニ依リ、聯邦部國ノ人口ニ應シテ出金スルモノニシテ、此ノ分擔額ハ毎年帝國議會ノ豫算議決ニ依リテ決定セララル、モノナリ。

字漏西ノ如キハ、原則トシテ永久法律制ヲ採ルト雖モ、之レニ雜ユルニ豫算法律制ヲ以テセリ。同國憲法第七十條ニ曰ク「歳計豫算中ニ掲ケタルモノ、又ハ特別法律ヲ以テ規定シタルモノニアラサレバ、租稅ヲ賦課スルコトヲ得スト」而シテ一部ノ所得稅及ヒ收益稅ハ、移動シ得ヘキモノトシ、年々議會ノ同意ヲ要ス。第二、歳出ニ關スル諸國ノ制度。

以上述べルカ如ク、諸國ノ制度ハ歳入ニ於テハ寧ロ永久法律制度ニ由レリ。故ニ豫算、議、定、ハ、燒、點、ハ、一、般、ニ、歳、出、豫、算、ニ、集、中、ス、ト、云、フ、モ、不、可、ハ、ル、コ、ト、ナ、シ、而、シ、テ、此

歲出豫算ニ付テモ、議定ノ範圍ハ諸國其軌ヲ一ニスルモノニアラス。

第一、全部自由議定制

第二、一部自由議定制

全部自由議定制トハ、歲出ニ付テ議會ハ其ノ全體ニ亘リテ自由ニ之ヲ廢除削減スルノ權能ヲ有スル制度ヲ云ヒ、一部自由議定制トハ議會ハ歲出ノ一部分ニ付テ自由ニ廢除削減ノ權能ヲ有スルモ、他ノ一部分ニ付テハ斯ノ如キ自由ナル權能ヲ欠クモノヲ云フ。

英國

今諸國ニ付テ見ルニ、英國ニ於テハ後者ヲ採用セリ英國ノ豫算ハ四部ニ分タレ、第一ハ永久豫算、第二陸軍豫算、第三海軍豫算、第四官廳經費及收稅費豫算トス。而シテ此四種ノ豫算ハ二箇ニ大別スルコトヲ得ヘク、一ハ第一ノ永久豫算ニシテ之ヲ固定基金費ト稱シ、一ハ後三者ニシテ總稱シテ支給費ト稱ス。固定基金費ハ國債、利子、國債償還金、帝室費、文武官ノ恩給裁判官ノ俸給等ニシテ、總歲出ノ八分ノ三ニ當リ、永久ノ法律ヲ以テ支出ヲ規定シ、議會カ之ヲ變改セサル限リハ支出ヲ拒ムコトヲ得サルモノナリ、支給費ハ反之、毎年議會ノ自由決議ニ委スル部分

米國

ニシテ、總歲出ノ八分ノ五ヲ占ムルト云フ。

米國ニ於テモ英國ト其制度ヲ同フス、即チ總歲出ヲ分テ三トス、一ハ永久毎年經費ト云ヒ、確定的ノ性質ヲ有シ恰モ英ノ固定基金費ニ相當ス、二ハ毎年經費ニシテ、是レ自由議定ヲナシ得ル部分ナリ、三ハ永久特別經費ト云ヒ、我繼續費ニ相當スルモノトス。

佛國

佛國ニ於テハ、歲入カ全部自由議決ヲ要スルト同シク、歲出ニ於テモ何等ノ制限ナキモノ、如シ之ニ對シテハ彼ノミラポーカ革命ノ際ニ動議ヲ提起シ、大藏大臣コルヴヱットーカ王政復古ノ際ニ改正ノ必要ヲ唱導シタルカ如キアリ、千七百九十一年ノ憲法ニハ國債ノ支拂及ヒ帝室費ニ付テハ除例外ヲ設クヘシト規定シタルアリ、然レトモ其後幾モナクシテ憲法ハ改正セラレ、現今ニ於テハ前述ノ如キ狀態ニアリ。

獨逸

獨逸帝國ニ於テハ歲出ニ關シテ多クノ制限ナシ、唯法律ニ依リ又ハ其他適法ニ支拂義務ヲ負ヘル場合ニハ、政府ハ之ヲ支出セサル可ラス、從テ議會モ協贊ノ責アルモノト云ハサル可ラス、帝國憲法ハ第七十一條ニ於テ「共同ノ支出ハ通常一

年度ニ向テ承認ス、但シ特別ノ場合ニ在テハ數年度ニ亘リ承認ヲ爲スコトヲ得ト規定セリ。

第二節 本邦ノ制度

第一款 一般財政ニ關スル協賛權ノ範圍

第一〇總說

帝國議會ノ職能ハ、國家ノ財政ニ關シテ番ニ豫算ヲ協賛スルニ止マラス、其他種々ナル事項ニモ及フモノナリ、今之ヲ大別スレハ、

- (1) 豫算ノ協賛
- (2) 事後ノ承諾
- (3) 前二者以外ノ事項

即チ本款ニ於テハ、此三者殊ニ第三ニ付テ述ヘ、第二款第三款ニ於テ、第一第二ニ付キ更ニ詳説スル所アラントス。
第二、國債及ヒ大藏證券ノ發行

協賛ヲ經ル理由

帝國憲法第六十二條第三項ニ曰ク、

國債ヲ起シ及……………ハ帝國議會ノ協賛ヲ經ヘシ。

會計法第九條ニ曰ク、

毎年度大藏省證券發行ノ最高額ハ、帝國議會ノ協賛ヲ經テ之ヲ定ム、

斯クノ如クニ、此二者ノ發行ニツキテ帝國議會ノ協賛ヲ經ヘシト規定セル所以ハ、歲出多クシテ歲入ノ之ニ伴ハサル場合ニ於テハ、之カ補充トシテ國家ハ債務ヲ負擔シテ、之ニ充テサル可ラス、而シテ其債務タルヤ、普通公債タルト大藏證券タルトヲ問ハス、國家ノ負擔ニシテ財政上重要ノ事項ナルカ故ニ、豫算ノ協賛ヲ經ルト同シク、帝國議會ノ協賛ヲ經サル可ラス。

此二者ハ、單ニ帝國議會ノ協賛ヲ要スト云フノミニシテ、法律ヲ以テ定ムヘシト云ハス。故ニ理論ヨリ云ヘハ、豫算中ニ之ヲ掲記スルモ可ナリ。然レトモ、普通ノ國債ハ大藏證券ト異リ、數年ニ亘ルヲ例トスルカ故ニ、之ヲ豫算中ニ掲ケテ一年ヲ以テ限界トスルコト能ハス。故ニ通常法律ヲ以テ之ヲ規定スルモノトス。反之、大藏證券ハ一年內ニ償還ヲ終ル國庫手形ナルカ故ニ、法律ニ規定シテ效力ヲ有セ